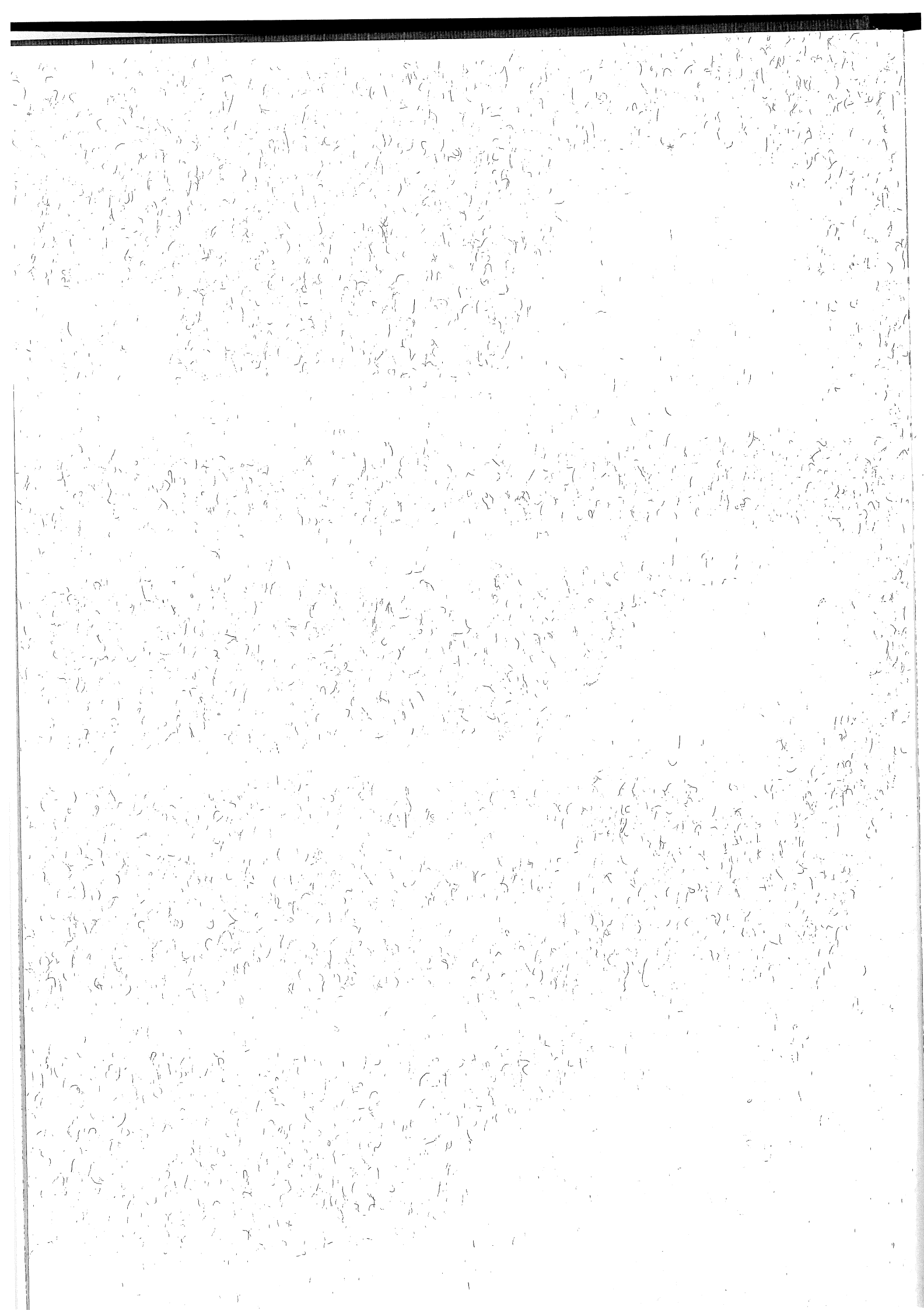


江別市体育協会

五十年史



江別市体育協会旗



(平成12年10月7日：創立50周年を記念して作成)

目 次

ご 挨拶

江別市体育協会会長	池 永 和 親	4
-----------	---------	---

祝 辞

江 別 市 長	小 川 公 人	5
江 別 市 議 会 議 長	赤 坂 伸 一	6
江別市教育委員会教育長	高 橋 侃	7
(財)北海道体育協会会長	堂垣内 尚 弘	8
石狩管内体育協会連絡協議会会長	永 井 利 幸	9

江別市体育協会小史	10
-----------	----

各加盟団体のあゆみ (五十音順)

空手道連盟	16
弓道連盟	20
ゲートボール協会	24
剣道連盟	28
拳法協会	32
サッカー協会	36
柔道連盟	40
水泳協会	44
スキー連盟	48
スポーツ少年団	52
相撲連盟	56
ソフトテニス連盟	60
ソフトボール協会	64
卓球連盟	68
テニス協会	72
パークゴルフ協会	76
バスケットボール協会	80
バドミントン協会	84
バレーボール協会	88
パワーリフティング協会	92
武術太極拳連盟	96
ミニバレー協会	100
野球連盟	104
陸上競技協会	108
ハンドボール協議会	112
ホッケー協議会	114
ラグビーフットボール協会	116

思い出を綴る

江別市体育協会 50 年に想う	池田 春男	118
柔道で得た心と体の変化	佐々木 五月	120
柔道と私	枝元 真実子	122
私と中国武術	山岸 正史	123
江別中央ジュニアバレーボール少年団の足跡	工藤 憲	124
DASH 江別	源籐 均	125

歴代役員	126
------------	-----

栄誉に輝く人々	135
---------------	-----

50 周年記念事業実行委員会名簿	140
------------------------	-----

編集後記	141
------------	-----

題字 森山 天涯



ご 挨拶

江別市体育協会

会 長 池 永 和 親

昭和25年創立以来、この2000年という節目の年に江別市体育協会が50周年を迎えることができましたことは、ひとえに江別市並びに江別市教育委員会をはじめ、多くの関係機関、関係団体の皆様、そして今日まで地道に基盤を築いてこられた諸先輩の方々の、言葉では言い表すことのできないご尽力の賜と、深く感謝申し上げる次第です。

昭和25年といいますと、当時の社会情勢はまだまだ混迷の時期にあり、スポーツよりも毎日の生活に追われる日々であったことと思われませんが、スポーツを愛好する有志の方々が所属する8団体为中心となり、4月26日に「江別体育連盟」としてその第一歩を踏み出したのが今日の「江別市体育協会」の礎であり、その後、皆様の深いご理解と暖かいご支援によりまして順調に伸展を遂げ、現在は24団体の傘下のもと、スポーツの振興と普及発展に力を注いでいるところでございます。

今、超高齢化社会を迎える21世紀を目前に控え、健康の増進や体力の向上に関心が高まる中、余暇の活用、生涯教育の推進といった観点からもスポーツの重要性がますます高まることが予想され、加えて少子化が進む中で競技人口を増やしレベルアップを図るためにも、魅力ある指導者の養成とともに惹きつけるスポーツの推進と底辺の拡大を強化していく必要があります、今後、さらに体育協会の果たす役割も増大していくものと思われます。

私ども江別市体育協会といたしましても、多様化するスポーツニーズに対応できるよう各加盟団体、関係機関等と密接に連携をとりながら、施設の整備充実、指導者の育成、各スポーツ団体への支援体制の整備を図ってまいりたいと考えております。

終わりに、この50周年を契機といたしまして、さらなる飛躍をめざしてスポーツ振興発展のため努力してまいる所存でございますので、今後ともなお一層のお力添えを賜りますよう心からお願い申し上げまして、創立50周年にあたってのお礼とご挨拶といたします。



祝 辞

江別市長 小 川 公 人

江別市体育協会が創立50周年の光輝ある年を迎えられましたことに、心からお祝いとお慶びを申し上げます。

昭和25年4月26日に創立以来、半世紀にわたる着実な歩みの中での大きな節目の年となるわけですが、関係者の方々にはさぞ感慨深いものがあるものと拝察いたしますとともに、これまで体育協会の基盤を創り、支えてこられた先輩諸氏の皆様に深甚なる敬意を表する次第です。

昭和25年と申しますと市制施行前の江別町の時代ですが、スポーツを愛好する熱心な有志の皆さんの、言葉では言い尽くせないご努力が実を結んだものであり、設立以来、市民のスポーツの振興、普及・発展並びにスポーツを通しての市民のふれあい、連帯意識の高揚など、市民生活の中で大きな役割を果たしてこられた、その功績に賛辞を贈りますとともに感謝を申し上げる次第です。

皆様ご承知のとおり、スポーツは、年齢、性別、個人、団体を問わず、いつの時代にも身近なところで行われているものであり、豊かな人間性や協調性、あるいは健全な心身の発達・醸成といったものが自然に培われるという意味において実に素晴らしい一面を持っているものであります。加えて長寿社会を迎え、健康の増進や疾病の予防、生涯教育の推進といった観点から深く市民生活の中に浸透するとともに、生活の一部として根付いていることは、市内にある屋内外体育施設の利用者が年々増加していることから伺えるところであります。また、少子化が進む中で学校教育の一環としてのクラブ活動が低迷し、各競技人口の減少などによりスポーツ界に少なからず影響を与えている現状にあります。江別市内においては少年団等の活動が活発で、常に全道、全国大会に出場する競技もあり、スポーツを通して体験する様々な出来事は発達途上の子供たちの人間形成に大きな財産となるものであり、この素晴らしい環境づくりも体育協会をはじめとする各加盟団体の皆様の日頃の努力の結晶であり、大きな期待を寄せるものであります。

最後になりますが、この50周年という記念すべき年を節目として、今後におきましてもスポーツの振興並びに市民の健康増進のためにご尽力くださいますようお願い申し上げますとともに、さらなる飛躍をご祈念申し上げまして江別市体育協会創立50周年記念誌発刊にあたりましての祝辞といたします。



江別市体育協会創立50周年を祝して

江別市議会議長 赤坂伸一

江別市体育協会の創立50周年を心からお祝い申し上げます。

創立した年と申しますと、戦後の混乱期がようやく収まりつつあった1950年。この頃の日本の経済力は、欧米に比べ大きな開きがあり、誰もが貧しく生きることも大変な時代でありました。

こうした中、8つの競技団体によって結成された江別体育連盟（体育協会の前身）は、爾来半世紀にわたって各種スポーツ大会や協議会の開催、青少年への指導等を通して当市のスポーツ振興に努めてこられました。競技施設が殆どないところから出発しましたが、その後徐々に整備が進み、加えて国体の開催を期に道立総合運動公園が建設され各種施設の充実を見たのも、地域における日常的な文化・スポーツ活動の土壌が醸成されてきたことが大きな力となったことに他ならず、そこには関係の皆様方の数限りない努力があればこそと存じ、市議会を代表して衷心より敬意を表し感謝申し上げます。

今、江別市では、行政と議会が両輪となって生涯スポーツを推進しております。そして、スポーツ振興目標として発達段階に応じたスポーツ活動をとoshi、健康で豊かな人生を築き、活力と個性を伸張し、地域社会の発展に努める市民となることを指針に定め、その推進事項の一つに貴会及び貴会加盟競技団体との連携をうたわせていただいております。思えばこの50年間、地域スポーツの振興を目指して貴会と行政とが良好なパートナーシップをとってこられたのも、皆様の熱意あふれるスポーツマンシップの賜であると確信しております。

まもなく日本は、史上類を見ない高齢化社会を迎えることに戦々恐々としていた感が伺えます。しかし、このようなある種の厳しさを吹き飛ばすためにも、文化・スポーツ活動がますます重要性を増してきます。あの何もかも失った戦後から、今日の経済先進国として発展を遂げた日本の原動力となった勤勉さは、こうした文化・スポーツ活動の土壌があったが故であり、来るべき少子高齢化社会を明るく乗り切るためにも、今後の貴会の更なる活躍が期待されます。

終わりに、様々な困難を乗り越え、記念すべき50周年を迎えた江別市体育協会のますますの発展をお祈りして、お祝いの言葉といたします。



祝 辞 創立50周年にあたって

江別市教育委員会
教育長 高橋 侃

江別市体育協会創立50周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。協会に所縁のある方々にとって、とても感慨深いものがあることと思います。

江別市統計書年表によりますと昭和25年、江別市では飛鳥山公園野球場及び陸上競技場が造成され、第1回町民運動会が開催された年であります。戦後の混乱が未だ続いていた時代に3万1千余人の町民が心をつなげて、大運動会を開催した情景が目に浮かんで参ります。

このような時期に、各競技団体が大同団結し体育協会が誕生したことは十分に首肯けるところであります。

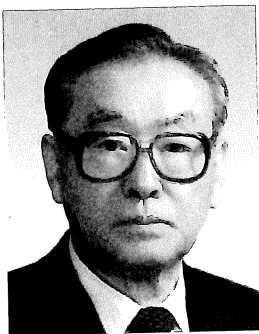
以来、半世紀の長きに渉り、連綿としてスポーツの振興に対する情熱は受け継がれて今日に至っており、加盟競技団体も24団体へと増加しております。歴代の役員の方々をはじめ関係者の皆さんの努力には敬意を表して余りあるものがございます。

この半世紀間の、江別市における最大のスポーツイベントは、平成元年に開催されました第44回国民体育大会「はまなす国体」であります。江別を象徴する原始林の緑に抱かれた道立野幌総合運動公園を舞台に5競技が開催され、全国各地から多数の選手団を迎えて華々しく行われたことは9万4千江別市民共有の思い出であるとともに、国体開催の中心的役割を果たしたのが体育協会でありました。

また、各競技スポーツにおいて全国大会はもとより、世界の舞台で活躍する選手も出ており、競技力向上の面においても、体育協会が残してきた足跡はとても大きなものがあり、深く敬意を表する次第であります。

21世紀を目前にし、創立当時とは社会的状況が一変しております。スポーツをとりまく環境も同様であります。学校そして企業を中心に選手強化が行われてきた手法が限界を迎え、新たなシステムづくりが模索されております。競技スポーツ中心からレクリエーション的スポーツ、健康・体力づくりのためのスポーツへと様変わりしてきております。このような状況下、体育協会のより一層のご尽力に期待するところでございます。

おわりに、江別市体育協会の半世紀に渉るスポーツ振興に対するご尽力に深く感謝申し上げますとともに、新たな世紀におけるさらなる発展をお祈りいたし、お祝いのことばといたします。



21世紀へ繋ぐ栄光の軌跡

～創立50周年記念誌の発行に寄せて～

財団法人北海道体育協会会長 堂垣内 尚弘

新千年紀、20世紀最後を締めくくる五輪年等、歴史的な節目の多い年に、江別市体育協会が創立50周年を迎え、その輝かしい栄光の軌跡と、諸先輩の偉業を綴った記念誌を発刊されますことは誠に意義深く、心からお喜びを申し上げます。

貴協会は、昭和25年に創立されて以来、多くの困難を乗り越えながら、半世紀の長きにわたり、組織の拡充をはじめ、各種スポーツ機会の提供、指導者の養成など、スポーツの普及・振興につくしてこられた業績は大きく、その時々の中に、確かな礎を積み重ねてこられた歴代の会長をはじめ、関係者の皆様のスポーツに寄せる深い情熱とたゆまぬ努力に対し、深く敬意を表します。

この間、貴協会では指導者の全道的な顕彰をはじめ、少年少女から社会人までの多くの選手が、道内はもとより、国体をはじめ全国規模の各種競技大会で、輝かしい成績を残される等、本道スポーツの発展にも大きく寄与されてされました。

特に、小学生を中心としたスポーツ少年団や中・高校生の全国レベルでの優勝、上位入賞という快挙は、有能な指導者の熱意あふれる指導と相俟って、街の明るい話題として、多くの市民に勇気と感動を与えると共に「スポーツの街江別市」を内外に広くアピールする大きな役割を果たされる等、その活躍ぶりは、誠に心強い限りであります。

また、平成元年の「はまなす国体」秋季大会では、野幌運動公園を中心にホッケー、テニスなど四競技会が開催されましたが、貴協会の見事な大会運営と市民の心温まる対応は、参加選手や役員から絶賛される等、さわやかで素晴らしい感動の大会という思いが今も残り、心から感謝しております。

さて、本年二月、北海道のスポーツの殿堂、道立総合体育センターがオープンいたしました。同時に、知事が21世紀に向けた、道民のスポーツ活動に参加を働きかける「スポーツ北海道宣言」がなされました。

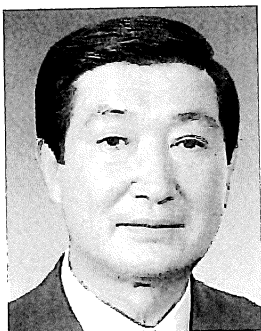
西暦2000年は、北海道のスポーツ界に、新時代の幕明けを告げているように思われます。

当協会は、これを契機に競技力の向上と共に、生活の中のスポーツの輪が、人々の間で着実に広がり、地域を基盤とするスポーツクラブへの発展に努めてまいりたいと思っております。

幸い、江別市民のスポーツに対する関心は高く、日頃から、地域の自然や特色を生かしたスポーツ活動が展開されるなど、本道の生涯スポーツの先進的な街でもあります。

このような中で、市民と一丸となって取り組まれた施設誘致活動や、組織の法人化実現への献身的なご努力など、実績のある貴協会の取り組みに大きな期待を寄せているところであります。

終わりに、21世紀に向けて貴協会の益々のご発展と、江別市の一層のスポーツ振興をご祈念申し上げ、記念誌発刊のお祝いの言葉といたします。



お祝いのことば

石狩管内体育協会連絡協議会
会長 永井利幸

このたび、江別市体育協会が創立50周年を迎えられましたことに対しまして、心からお祝いを申し上げます。

また、貴会が、創立以来今日に至るまで、市民のスポーツ活動の先導的役割を果たしながら、その振興と発展に寄与してこられましたことに対しまして、心より敬意を表しますとともに、石体協の活動に対しましても、貴会の積極的な御協力を賜っておりますことに厚くお礼申し上げます。

さて、21世紀を目前にし、生涯学習社会が進行する中で、人々の余暇時間は年々増加し、健康に対する関心の高さも相まって、だれもが楽しめる生活の一部としてのスポーツがますます盛んになっております。

このような状況の中で、近年、ニュースポーツの普及などにより、幅広い年齢層がそれぞれの体力や技術に応じてスポーツを楽しんでいることやスポーツに関わるニーズが多様化していることなどに応えるために、新たな視点からそれらに対応する必要がでてきております。

まず、一つ目としては、総合型地域スポーツクラブの育成と定着によって、地域のコミュニティの形成や青少年の社会教育活動の場として、スポーツ活動を展開していく必要があります。

二つ目として、スポーツ活動の指導者においては、ボランティアの育成と活用を積極的に取り入れる考え方をもつことによって、スポーツに理解と関心をもつ人の底辺を拡大していくことも大変重要なことでもあります。これは、当然のことながら障害のある方々も健常者と同様にスポーツを楽しむ一方で、競技としてのスポーツ活動をとおして自己の限界に挑むスポーツ本来の姿を追求できる社会の実現という意味から大切な考え方であると思います。

長野冬季オリンピックのあとのパラリンピックは、まさにこれからのスポーツのあるべき姿を示してくれたのではないかと思います。

今後、スポーツ活動のさらなる振興を図る上で、新しい時代の要請に応える事業や活動が強く求められていくと考えられます。

貴会におかれましては、今後とも地域に密着した活動を継続しながら、スポーツをとおして人間形成と地域づくりに貢献されますよう御期待申し上げます。

終わりにになりましたが、貴会がこの50周年を節目として、ますます発展されますことを御祈念申し上げ、お祝いのことばといたします。

江別市体育協会小史

30周年から早20年・・・・・・半世紀の時を刻み、21世紀へ向けて新たな歩みをはじめます

江別市体育協会の歴史は、昭和25年にさかのぼる。もちろん、その前から体育関係の種目別団体が愛好家によって結成されていたし、当然のことながら、種目別の競技大会も独自に開催されていたわけである。

また、市民の各層が参加しての陸上競技選手権大会も催されてもいた。

協会設立以前の競技団体としては、陸上・野球・柔道・相撲・庭球・排球・卓球・自転車の8団体があり、それぞれ活動していた。

北海道体育協会が設立されたのが昭和7年であって、以後、競技種目別の加盟による統合体として戦後まで経過してきたが、昭和23年には地方団体として、札幌市体育連盟をはじめ11団体が地方自治体の連盟として加盟しているが、江別市が顔を出すのは、設立後17年を経過した昭和42年になる。

さて、当時はまだ市施行以前のことから「江別町」ということになるが、昭和25年4月26日、町内各競技団体はかねてから世論のたかまりをみせていた大同団結の時期をこの日に設定し、「江別体育連盟」を発足させた。

加盟団体各代表が一同に会して連盟の結成を祝し、会則の決定、役員選出等を行った

初代会長には岩田政勝氏、副会長には福本重亀氏、三浦光三氏、江草信道氏の3氏、理事長には佐野猛氏が就任した。

その後、昭和29年に市制が施行され

たことに伴い「江別市体育協会」と名称が改称された。

(30周年記念誌より抜粋)

ここで、初代会長の岩田政勝氏について、少し触れさせていただきたい。岩田政勝氏は、明治33年（西暦1900年）生まれで、今年で満100歳の記念すべき年を迎えることになっており、体育協会としても百寿のお祝いを協会挙げて盛大に行う計画を立てていたところでありました。

また、江別市体育協会の創設者の一人として、この創立50周年記念式典には是が非でもご出席いただくことを、役員はもとよりスポーツ関係者一同、心から願っていたところでもあります。

こういった中で、入院されたことをお聞きし、一日も早いご回復をお祈りしていたわけですが、多くの人の願いも虚しく、平成12年8月12日にご逝去されました。

平成10年4月には江別市として3人目となる名誉市民の称号が贈られ、同年5月に開催した体育協会主催の「お祝いの会」で、その矍鑠とした変わらぬお姿を拝見したのが、まるで昨日のような気がしております。

江別市体育協会創立50周年を契機に、さらなるご指導をいただきながら21世紀に向かう心づもりでございましたが、それも叶わないことになり、私共にとりまして大きな打撃であり、限らない悲しみではありますが、その情熱と遺

志を継ぎ、新たな決意のもとにスポーツの振興と協会のさらなる発展に邁進する所存であります。

ここに、そのご功績に感謝を申し上げ、経歴を記させていただきます

- ・ 明治33年（1900年）野幌で出生
- ・ 大正14年慶應義塾大学理財学部（現：経済学部）卒業、東邦電力(株)入社
- ・ 昭和7年同社を退社し、欧米を約1年間視察研修
- ・ 昭和8年岩田合名会社入社
- ・ 昭和27年岩田醸造(株)設立

スポーツ関係公職歴

- ・ 昭和24年～61年
北海道ホッケー協会会長
- ・ 昭和49年～55年
日本ホッケー協会副会長
- ・ 昭和25年～29年
江別体育連盟会長
- ・ 昭和40年～59年
江別市体育協会会長
- ・ 昭和60年～
江別市体育協会顧問
- ・ 昭和61年～
江別ホッケー協議会名誉会長

スポーツ等関係顕彰歴

- ・ 昭和39年10月
江別市政功労者表彰
- ・ 昭和46年10月
北海道スポーツ賞
- ・ 昭和49年1月
文部大臣表彰（体育功労）
- ・ 昭和55年11月
江別市体育協会創立30周年記念特別表彰
- ・ 昭和57年9月

北海道体育協会創立50周年記念 特別表彰

- ・ 昭和58年8月
石狩管内体育協会連絡協議会創立10周年記念特別表彰
- ・ 平成10年4月
江別名誉市民

ここに記させていただいた経歴はごく一部で、このほか、多くの団体の公職に就かれるとともに、勲五等双光旭日賞をはじめとする栄誉を受けられており、その人柄と功績が偲ばれるところであります。

江別市体育協会創立50周年にあたりまして、記念誌にその足跡を残し、心から哀悼の意を表します。

本稿は、昭和25年以降の主たる事業をその時代背景とともに記録し、新たな世紀への架け橋とすることを目的としたが、活動記録の散逸や草創期以来の諸先輩の物故などもあり、小史としてまとめることの難しさを感じている。

こうした中で、池田春男氏（現副会長）が「江別市体育協会50年に想う」と題して綴ってくれた特別寄稿が、氏の足跡とともにおおそ協会の歩みを記録しており、氏の寄稿に厚くお礼申し上げたい。

以下、江別市並びに体育協会の小史を年表により記します。

●昭和23年（1948年）

- ・ 江別開基70年記念式典挙行。
- ・ 札幌国立病院江別診療所開設。
- ・ 江別、機農、野幌高校開校。

●昭和25年（1950年）

- ・ 江別体育連盟創立。
- ・ 飛鳥山公園野球場及び陸上競技場造形。
- ・ 第1回町民運動会開催。

- ・人口3万人を超える。
- 昭和26年（1951年）
 - ・札幌国立病院江別診療所が江別町に移管され、町立病院となる。
- 昭和27年（1952年）
 - ・第1回町民文化祭開催。
- 昭和28年（1953年）
 - ・江別大火(227棟、1,305人被災)。
 - ・剣道連盟加盟。
- 昭和29年（1954年）
 - ・市制施行。
 - ・「江別市体育協会」に改称。
- 昭和31年（1956年）
 - ・飛鳥山公園陸上競技場が第3種公認となり、全道学生陸上競技大会が開催される。
 - ・冷害による大凶作。
- 昭和33年（1958年）
 - ・江別開基80年記念式典挙行。
 - ・酪農学園女子高校（現：とわの森三愛高校）開校。
- 昭和34年（1959年）
 - ・江別高校焼失。
- 昭和35年（1960年）
 - ・弓道連盟加盟。
 - ・酪農学園大学開校。
- 昭和37年（1962年）
 - ・バドミントン協会加盟。
 - ・台風による水害。
- 昭和39年（1964年）
 - ・市制施行10周年式典挙行。
- 昭和40年（1965年）
 - ・野幌原始林公園造成着工。
- 昭和41年（1966年）
 - ・スポーツ少年団育成部設置。
 - ・北海道女子短期大学（現：北海道浅井学園大学）開校。
 - ・石狩川ゴルフ場オープン。
 - ・大麻駅開業。
- 昭和42年（1967年）
 - ・北海道体育協会に加盟。
- 昭和43年（1968年）
 - ・飛鳥山公園テニスコート完成。
 - ・江別市旗制定。
 - ・野幌原始林が道立自然公園に認定。
 - ・札幌商科大学（現：札幌学院大学）開校。
 - ・江別開基90年、市制施行15周年式典挙行。
 - ・新市立病院完成。
 - ・新消防庁舎完成。
 - ・大麻出張所開所。
- 昭和44年（1969年）
 - ・第1回道民スポーツ石狩大会開催。
 - ・北海道スポーツ賞受賞顧問「佐野猛」氏。
- 昭和45年（1970年）
 - ・スケート連盟加盟。
 - ・水泳協会加盟。
- 昭和46年（1971年）
 - ・バスケットボール協会加盟。
 - ・北海道スポーツ賞受賞顧問「岩田政勝」氏。
 - ・青年センター「体育館」完成。
 - ・市の花、市の木制定。
- 昭和47年（1972年）
 - ・青年センター温水プール完成。
- 昭和48年（1973年）
 - ・市民会館完成。
- 昭和49年（1974年）
 - ・体育功労文部大臣表彰受賞顧問「岩田政勝」氏。
 - ・大麻公民館完成。
 - ・第1回市民まつり開催。
- 昭和50年（1975年）
 - ・スポーツ振興基金設置。
 - ・台風による水害。
- 昭和52年（1977年）
 - ・スキー連盟加盟。
 - ・米国グレシャム市と姉妹都市提携。

- 昭和53年（1978年）
 - ・空手道連盟加盟。
 - ・市民体育館完成。
 - ・江別100年記念式典挙行。
 - ・江別100年記念教育貢献賞受賞
「江別市体育協会」。
 - ・高知県土佐市と友好都市提携。
- 昭和54年（1979年）
 - ・テニス協会加盟。
 - ・大麻体育館完成。
- 昭和55年（1980年）
 - ・江別市体育協会創立30周年記念式典、祝賀会挙行。
- 昭和56年（1981年）
 - ・サッカー協会加盟。
 - ・集中豪雨、台風による水害。
- 昭和57年（1982年）
 - ・スポーツ少年団加盟。
 - ・北海道体育協会創立50周年記念特別表彰受賞
顧問「岩田政勝」氏
「佐野 猛」氏。
 - ・江別剣道連盟創立30周年記念式典挙行。
 - ・第1回スノーフェスティバル開催。
 - ・総合社会福祉センター完成。
 - ・新水道庁舎完成。
 - ・道立野幌総合運動公園起工式。
- 昭和58年（1983年）
 - ・バドミントン協会創立20周年記念式典挙行。
 - ・第6回全日本女子柔道56キロ級で渡部五月さん優勝。
- 昭和59年（1984年）
 - ・第1回青少年スポーツ賞表彰式。
- 昭和60年（1985年）
 - ・ソフトボール協会加盟。
 - ・ゲートボール協会加盟。
- 昭和61年（1986年）
 - ・ハンドボール協議会加盟。
- ・ラグビーフットボール協会加盟。
- ・ホッケー協議会加盟。
- ・拳法協会加盟。
- ・市営森林キャンプ場完成。
- ・高砂駅開業。
- ・保健センター完成。
- 昭和62年（1987年）
 - ・卓球連盟創立25周年記念式典挙行。
 - ・全国高等学校総合体育大会開催。
- 昭和63年（1988年）
 - ・野球連盟創立40周年記念式典挙行。
 - ・第44回国民体育大会リハーサル大会開催。
- 平成元年（1989年）
 - ・第44回国民体育大会はまなす国体開催。
 - ・北海道情報大学開学。
 - ・情報図書館完成。
 - ・コミュニティセンター完成。
 - ・新葬祭場完成。
- 平成2年（1990年）
 - ・第二大麻体育館完成。
- 平成3年（1991年）
 - ・郷土資料館完成。
 - ・人口10万人突破。
- 平成4年（1992年）
 - ・江別市スポーツ振興財団設立。
 - ・市政功績者受賞
顧問「佐野猛」氏。
 - ・ふれあいワークセンター完成。
- 平成5年（1993年）
 - ・石体協創立20周年記念特別表彰受賞
顧問「泉 重陽」氏
顧問「佐野 猛」氏
副会長「池田春男」氏
前理事長「嶋倉 昭」氏。
 - ・バドミントン協会創立30周年記念式典挙行。
 - ・新消防本部庁舎完成。

●平成6年（1994年）

- ・パワーリフティング協会加盟。
- ・武術太極拳連盟加盟。
- ・ミニバレー協会加盟。
- ・石体協会長に就任
会長「高間専造」氏。
- ・ガラス工芸館完成。
- ・全国中学校選抜体育大会開催。
- ・セラミックアートセンター完成。
- ・勤労者総合福祉センター完成。

●平成7年（1995年）

- ・パークゴルフ協会加盟。
- ・いきいきセンター完成。
- ・全国高校少林寺拳法大会（組演武
規定の部）で大麻高校男女がともに優勝。

●平成8年（1996年）

- ・加盟団体長交流会開催。
- ・石体協表彰受賞
会長「高間専造」氏。
- ・北海道体育協会表彰受賞
顧問「泉 重陽」氏。
- ・スキー連盟創立20周年記念式典挙
行。
- ・江別国際センターオープン。
- ・第34回北海道障害者スポーツ大会

開催。

- ・全国高等学校体育大会少林寺拳法
女子の部で大麻高校が7連覇達成。

●平成9年（1997年）

- ・加盟団体長交流会開催。
- ・立命館大学慶祥高校開校。
- ・えぼあホール、大麻公民館完成。

●平成10年（1998年）

- ・顧問「岩田政勝」氏に、江別市名
誉市民の称号が贈られる。
- ・「岩田政勝」氏、江別市名誉市民
を祝う会開催。
- ・野球連盟創立50周年記念式典挙
行。
- ・バスケットボール協会創立40周年
記念式典挙行。
- ・人口12万人突破。

●平成11年（1999年）

- ・テニス協会創立20周年記念式典挙
行。
- ・柔道連盟創立50周年記念式典挙
行。

●平成12年（2000年）

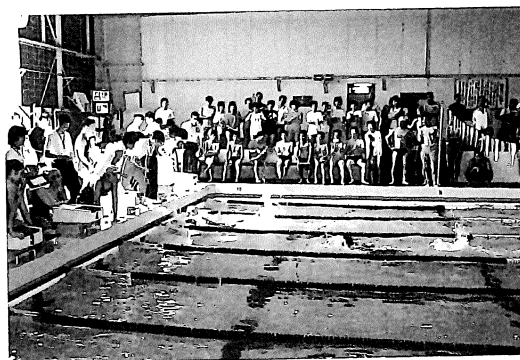
- ・加盟団体長交流会開催。
- ・北海道体育協会表彰受賞
顧問「清水重雄」氏。
- ・江別市体育協会顧問「岩田政勝」
氏ご逝去、江別市葬挙行。



市制30周年 市民マラソン大会



S44.7 第1回道スポ (江別市 7競技 108名参加)



S60.8 第17回道スポ (青年センター)
(江別市 15競技 354名参加)



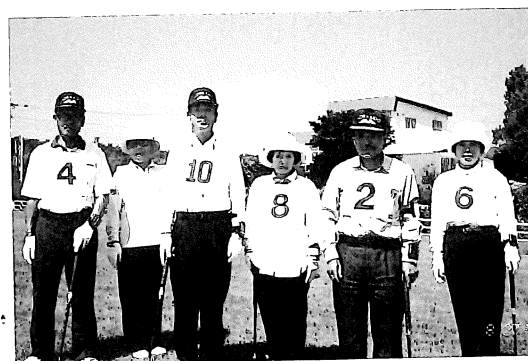
H2.8 第27回道スポ 江別市選手団結団式
(江別市 15競技 335名参加)



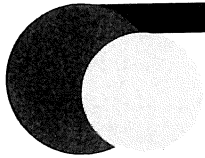
H11.2 第30回道スポ (千歳市)
「さおや」チームワークで優勝!



H12.2 第31回道スポ (恵庭市)
大回転 (青年) 澤 知至選手優勝!



H12.8 第32回道スポ
ゲートボール 江別Bチーム優勝! (15競技 312名参加)



江 別 空 手 道 連 盟

設 立 昭和52年11月15日
加 盟 昭和53年 4月 1日

《現 役 員》

会 長	布 川 義 治
副 会 長	深 澤 秀 則
〃	久津間 義 一
〃	笠 羽 浩 二
理 事 長	音 部 憲 夫
副 理 事 長	笠 羽 利 憲
〃	石 塚 健 治
理 事	金 内 順 子
〃	笠 羽 光 行
〃	江 口 慎 一
〃	西 脇 昭 夫
〃	石 原 章 弘
監 事	加 藤 憲 三
〃	村 山 貢
事 務 局 長	金 内 晴 夫
事 務 局 次 長	岡 本 克 己
事 務 局 員	田 谷 寿 紀
〃	加 藤 憲 義
〃	村 山 和 明

(平成12年度13年度)

《治 革》

空手道は明治初期に中国より沖縄へ伝えられ発展し、明治41年には唐手術として沖縄の中学校正課体育として教育分野で普及し、大正11年文部省主催体育博覧会で初めて唐手術が公開され大変な反響を受けました。

昭和4年には唐手術から空手道へと改名（仏典の般若心経の色即是空…空即是色から取った）を行ない現在に至り、以来昭和30年代に北海道空手道連盟が結成されたのを契機に大きく発展してまいりました。

江別市においてもこのころより高校空手道部や道場が出来て昭和52年には諸団体が大同団結し江別空手道連盟を発足させることが出来、本年で23年が経過をいたしました。



昭和54年11月

第2回江別市民空手道大会（試合）

江別市民体育大会も第1回目は、各団体が選手を出すのに苦勞をして、交流的な大会を開催したのが始まりで、今では全国大会への出場者も多数抱えており全道では市連盟の中でも大変に大きく内容的

にも充実した連盟として認められております。

江別空手道連盟発足当時の役員は、

会 長	伊藤 信一		
副会長	音部 憲夫	安藤 裕実	
理事長	菅原 晴隆		
副理事長	甘利 幸雄		
理 事	金内 晴夫	杉山 徳司	
	渡辺 昇	川幡 英俊	
	中田 清行	佐藤 紘平	
	岡部 三男	松山 増男	
	川内 孝夫		
事務局長	加藤 憲三		
事務局次長	花田 誠		
監 事	中田 清行	花田 結	

以上の役員で発足し大変に組織間の調整に苦勞をしました。

当時の加盟団体は、7団体でした。

大麻少年空手教室（あとのスポ少）

酪農学園大学空手道部

丸與志館道場江別支部

野幌空手道教室（あとのスポ少）

恒心空手道研究会

野幌機農高校空手道部

江別高校空手道部

昭和54年に大麻空手道スポーツ少年団が江別市スポーツ少年団に加盟したのを始め55年には野幌空手道スポーツ少年団が加盟し58年には江別空手道スポーツ少年団が発足しました。

江別空手道連盟の発展にはスポーツ少年団の力が大きくあり、その蔭には役員の献身的な努力によって支えられております。

《現 状》

江別空手道連盟役員（別紙）

加盟登録団体

大麻空手道スポーツ少年団	65名
野幌空手道スポーツ少年団	85名
江別空手道スポーツ少年団	35名
とわの森三愛高校空手道部	25名
酪農学園大学空手道部	15名
丸與志館道場江別支部	(80名)
(社)日本空手協会江別支部	(130名)
全日本少林寺流鍊心館江別支部	(50名)
野幌空手道同好会	45名

()内はスポーツ少年団員を含む

空手道には流派や会派があり、それをまとめた競技団体が、(財)全日本空手道連盟です。

その下部組織として各都道府県単位に分かれており、更に地域別に分かれているが、北海道では、札幌地区、函館地区、室蘭地区、苫小牧地区、空知地区、十勝地区、釧路地区、北見地区、旭川地区、留萌地区、稚内地区連があります。

江別市は札幌地区空手道連盟に所属しており、札幌市内の区連盟と同じ扱いでの競技団体と位置付けされています。

平成元年の第44回北海道国民体育大会では、となりの北広島市で空手道競技が開催されて、大会審判員や役員として江別空手道連盟の役員が活躍をいたしました。



昭和63年9月

第8回全道少年少女空手道錬成大会

江別市においては昭和63年江別市民体育館開館10周年記念の行事に第8回全道少年少女空手道錬成大会が開催され、当連盟の役員 노력によって成功裡に盛大な大会運営がされました。

この力は、本年で23回の江別市民体育大会の空手道競技大会の運営によって培れたもので、この市民空手道大会も国体予選の参加条件大会と位置され、ますます盛大の一途でもあります。

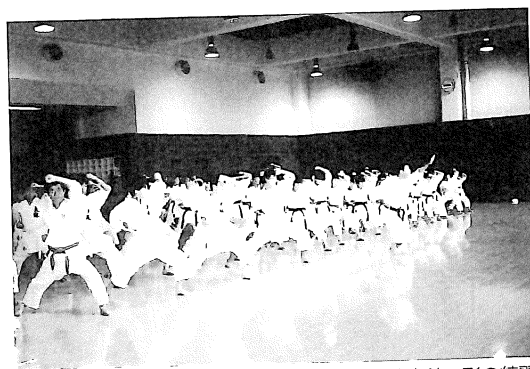
加盟団体には優秀な選手が近年多く育ち、全国大会でも上位に入賞するなど、これらスポーツ少年団員と出身者によって活動が活発化しており、97年にはドイツにも日本スポーツ少年団の代表として派遣しました。

江別空手道連盟の活動の中心は、スポーツ少年団によって行われており市民大会の他に毎年3月には、江別市長杯兼スポーツ少年団本部長旗争奪空手道大会を開催しております。

市民大会は個人戦の型と組手ですが、スポーツ少年団大会は、小学生は低学年

と高学年に別れ5人1組で中学生は3人1組の団体戦で競技が行われています。

この他に事業として、公認審判員養成講習会として、審判講習会を年2回開催して公認資格取得のために知識と技術の習得を役員が行っており、又スポーツ少年団員を中心に江別市ジュニア強化事業にも取り組んでおり、今後益々ジュニア層の活躍が期待されております。



平成8年市民体育館の形の練習

《今後の展望》

少子化現象により、スポーツ少年団を中心に減少傾向に転ずると考えられますが、これからの複雑な社会環境の中で、余暇時間をどう過ごすのかが今、むずかしいと思われます。

この多様化する中に、日本の武道がどう生き残っていくのか迫られてもいる訳で、伝統ある武道が、その目的である、人間形成（人格完成）をめざし、私達自身が、研鑽に努めることにあります。

空手道を通して、青少年の健全な育成と、江別市民の体位向上に寄与することはもち論ですが、今後さらに高齢化社会が加速する中で、高齢者空手道教室をはじめとする、連盟主体の教室の開催をすることなど、市民にとって魅力ある競技団体をめざす必要があります。

そのためには次の様な事業の開催の検討をする予定です。

1. 婦人（30才以上）のための空手道教室

2. 整美と健康のための空手道教室

3. 長寿のための生涯空手道教室

など多くの市民に親しまれる教室を月1回ずつで年間12回の開催することにより、楽しまれ、親しまれる空手道として発展する様に努めます。

私達江別空手道連盟役員一同微力ながら力を合わせ、来たる21世紀に向かって、江別市体育協会との連携を強め競技団体として能力を発揮する様に努めます所存です。

第15回江別市長杯兼
第19回江別市スポーツ少年団本部長旗
争奪 空手道大会



主催 江別市スポーツ少年団本部空手道部
主管 江別市空手道連盟
後援 江別市、江別市教育委員会、江別市スポーツ少年団本部
期日 平成12年5月19日（日）午後13時15分
会場 江別市民体育館

第34回 江別市民体育大会
第10回 江別空手道大会



主催 江別市民体育大会実行委員会
主管 江別空手道連盟
後援 江別市、江別市教育委員会、江別市体育協会、江別市スポーツ少年団本部、北海道空手道連盟、札幌地区空手道連盟
期日 昭和62年8月23日（日曜日）
午前9時～午後4時
会場 江別市民体育館

過去の大会プログラム

第26回 江別市民体育大会
第2回 江別空手道大会



主催 江別市民体育大会実行委員会
主管 江別空手道連盟
後援 江別市、江別市教育委員会、江別市体育協会、大森スポーツ振興会、北海道空手道連盟
公認 北海道空手道連盟
期日 昭和54年11月18日（日曜日）
午前9時30分～午後4時00分
会場 江別市民体育館

第44回 江別市民体育大会
第20回 江別空手道大会



主催 江別市民体育大会実行委員会
主管 江別空手道連盟
後援 江別市、江別市教育委員会、江別市体育協会、江別市スポーツ少年団本部、北海道空手道連盟、札幌地区空手道連盟
期日 平成9年8月31日（日曜日）
午前9時30分～午後4時00分
会場 江別市民体育館

江 別 弓 道 連 盟

設 立 昭 和 3 5 年 8 月
加 盟 昭 和 3 5 年 8 月

《現 役 員》

顧	問	鈴 木 福 信
〃		笹 岡 武 雄
会	長	大 田 貞 三
副	会 長	脇 坂 桂 吾
〃		山 崎 良 明
総	務	小野澤 由紀子
〃		桜 木 光 雄
〃		及 川 正 成
事	業 部	前 田 孝
〃		佐 藤 栄 子
〃		加 藤 周 治
〃		藤 井 孝
〃		戸 口 三千雄
指	導 部	近 藤 明
〃		前 田 正 義
〃		横 山 武 雄
〃		藤 本 敏 男
監	査	成 松 邦 子
〃		井 上 とし子

《沿 革》

江別弓道連盟の設立は、昭和三十五年八月であるが、その経緯は昭和十五年前後まで遡る。

その頃、現王子製紙（当時、富士製紙）の従業員に愛好者が多く、非常に盛んであった。当時の大田工場長は、王子構内に六人立の道内一の弓道場を建て、自ら稽古に励んでおられたと聞き及ぶ。

その立派な弓道場も、昭和二十九年の「江別大火」で焼失してしまったが、その後も弓道愛好者の熱は下がらず、江別市内の愛好者も増え、昭和三十五年八月に、江別弓道連盟を設立した。

当時の役員は、

会	長	弓 田 眞一郎
副	会 長	三 木 高 市
〃		山 北 修
〃		木 川 政 藏
常	任 理 事	脇 坂 桂 吾
〃		笹 岡 武 雄
理	事	相 馬 栄 造
〃		池 田 静 男
〃		管 野 照 雄
〃		前 田 孝
監	査	沢 口 幸 三

発足当時は、弓道場も無く、野立で稽古した。



S 4 7 年道民スポーツ石狩夏季大会での優勝記念
(於恵庭市)

その後、王子製紙の現在の本部門前に弓道場が移転改築され、連盟としても使用させて頂き、稽古した。

当時の江別弓道連盟は、向かうところ敵は無く、石狩大会で三年連続優勝の偉業を成し遂げたこともあったが、私設道場を借りての活動にも限界があり、江別市に様々な陳情をおこなってきた。

そして昭和五十三年十月、待望の弓道場が江別市民体育館内に新設された。当時としては、立派な道場であったが、建屋が六人立の基準に達してなく、現在も各大会の開催、運営が制限されているのが実情である。

しかし、道場が出来て以来、稽古に訪れる人の切れる事が無く、待ち時間があるほど盛況であり、弓道人口も石狩管内一と言われる程である。

昭和五十年頃より、年に一度、希望者を募り初心者教室を始めたが、例年二十人余りの出席者がある。出席者には、定年退職者、家庭婦人、サラリーマンなど老若男女さまざまな人がいて、毎年四、五名が教室閉講後も道場に通い、その後、昇格者や有段者も数多く出ている。

弓道は、年齢や性別などに関係なく体力的、精神的に無理なく稽古が出来る。連盟には現在九十歳で現役で弓を引いておられる方がいる。ちなみに連盟の弓田初代会長も、九十三歳まで弓を引いてお

られた。

しかしながら、初心者がすぐに本格的に弓を引けるものではない。まずは一か月を目処に、基本体を指導し危険行為を認識させる。

それから実際に、矢の離れの稽古を行う。最初は的前十メートルの位置からだが、少しずつ位置を下げていく。その間、手の内、両肘の使いかたの稽古も行う。その指導には上級者が付ききりであたるが、指導者自身もまたより上級者による指導を受け、鍛錬しなければならない。

経験談になるが、弓道は一日稽古を休むと十日位の遅れをとるため、毎日十射でもよいから弓を引くようにと筆者も先生方から指導されたが、それを怠ると、指導および指摘された箇所をすっかり忘れていたり、直っていなかったりすることが間々ある。これも弓人としての気持ちたちが乱れているからで、修行が足りないからであろう。

最近、江別弓道連盟から個人戦ではあるが、全日本選手権大会、国体（国民体育大会）予選、全道大会などで上位入賞を果たすようになってきた。一昨年全日本選手権大会には、当連盟から鈴木福信教士六段が参加した。

全日本選手権大会の出場者は、その資格が六段教士以上と決められていて、各地区の弓道連盟の予選で三名の選手を選出し、最終的には、全国から百六十余名の選手が参加して行われる大規模な大会である。

また国体予選では、一昨年に前田（孝）選手が、今年は免田選手が予選通過を果たしている。

石狩大会では、及川選手が個人戦で準優勝を果たした。

また今年八回目を迎える千歳市長杯争奪戦（千歳の弓道場設立を祝い、毎年七

月に行われている)では、一回目に前田(孝)選手が、三回目に前田(正義)選手が、五回目には及川選手が優勝を果たしている。

今年二月、札幌市にオープンした道立総合体育センター(通称、きたえーる)内の弓道場設立を記念して、四月に祝射会が催されたが、及川選手はその大会においても優勝した。

このように個人戦においては優秀な成績を残してはいるものの、団体戦においては、今一つ奮わないのが実情である。しかし、殆どの試合は団体戦であるため、団体戦においても優秀な成績を残すべく、連盟員は稽古を重ねている。また連盟では、毎月一回、月例射会を実施し、さらに年間最多優勝者を表彰しているのも、稽古の励みになっている。

ところで弓道は、中高年者の武道、或いはスポーツというイメージを持たれ勝ちだが、青少年の教育現場、学校教育にも取り入れられている。

江別市内の高校では、江別高校、野幌高校、大麻高校、立命館慶祥高校、同じく大学では、札幌学院大学、酪農学園大学など多くの高校、大学に弓道部があり、昨年は江別高校の新築移転の際に、立派な弓道場が設立された。札幌学院大学も弓道場を持っているが、その他の高校、大学は弓道場を持っていないため、稽古は市民体育館内の弓道場を使用している。

連盟では弓道場の使用にあたって、午前中は一般、午後は高校、大学、夜はサラリーマンと、おおよそのスケジュールを決めて稽古をしている。

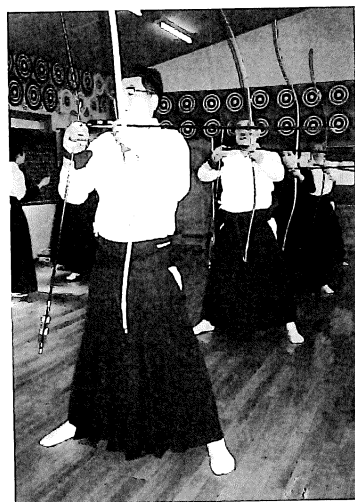
なお、脇坂練士が江別高校弓道部に指導に行っているが、同校弓道部は最近、個人戦において上位入賞を果たすようになってきた。

振り返ると江別弓道連盟も非常に強い

時があった。

先にも述べたが、昭和四十七年頃の石狩大会の団体戦で、三年連続優勝を果たしたことがある。その当時の選手は、管野照雄選手、池田静雄選手、山北修選手、喜多馨選手、前田孝選手の五人で、個人戦においても管野選手が二回優勝、前田孝選手も同じく二回優勝し、多少手前味噌になるが、向かうところ敵なしであった。特に山北選手は、当時全国勤労者大会に出場し、個人戦で全国優勝を果たした。また国体選手としても四回も出場した。定年退職後には連盟の指導をされていたが、惜しくも平成十年に病で逝去された。

かつて山北氏の指導日以外は、的中目的の稽古しかなかった。



月例射会風景(毎月第2日曜日)

その一例として、矢取り競射を行った。通常、稽古の場合の矢取は、何人で行射をしても一番前の人が矢取りに行く決まりになっていたが、矢取り競射の場合、一手二本の的中数により、負けた者が矢を取りに行くことになっているため、的中が悪ければ常に矢取に行く羽目になる。この競射を続けることにより精神力や根性が鍛えられ、それが的中率のアップにつながったような気がする。

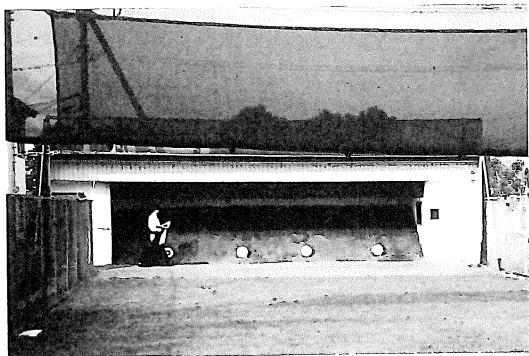
この競射をした仲間の一人だが、いつも矢取に行っていたのが、いつしか的中が良くなり、矢取に行かなくなった。後になって知ったことだが、彼は朝昼晩と稽古をしていたという。

その後の彼は、的中率の落ちることなく、大会ではいつも優勝または上位入賞を果たしていた。

技術や精神力をここまで鍛え上げた彼は、スポーツ選手の手本となるものだと思う。

また、矢取り競射をすることにより、スポーツ選手にとっての平常心を養うことが出来るように思われ、当時山北氏に尋ねたことがあるが、氏に「自分に勝つことで根性も生まれ、それが平常心を養うことにもつながる」と諭された。

しかし、普段の稽古では的中率は良いのだが、未だに昇段審査や試合になると養ってきた筈の平常心など何処へやら…恥ずかしながら唯々震えが止まらず、頭の中も真っ白になることがしばしばである。平常心を保つことの難しさ、大切さを痛感している筆者である。



安全柵等が整備され安心して練習出来る様になった的前

また昇段審査では、的中率が良いからといって昇段出来る訳ではない。審査は学科試験と射技の二つがあり、ポイントの比率は五分五分である。学科試験は百点満点で七十点以上、射技は的中率百パーセントを含め動作、呼吸などが作法に

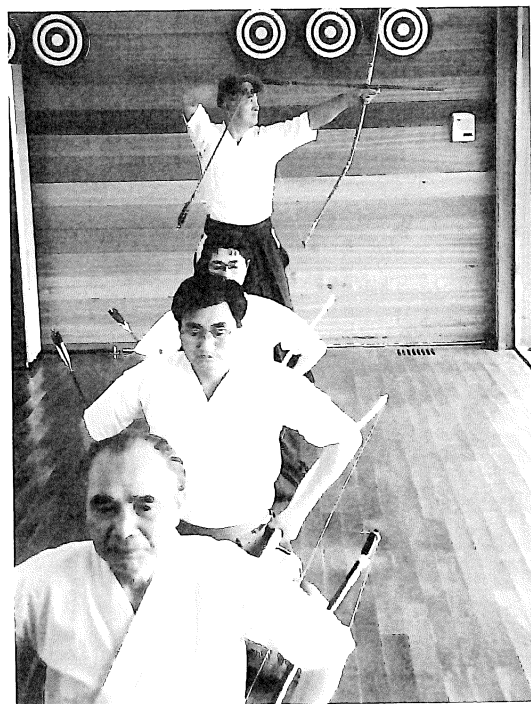
かなっているかが審査され、こちらも七十点以上を得なければならず、これは大変な努力、精進を必要とする。

審査の前の稽古は射法射技、礼に則した体配、射品射格の向上、平常心の向上と弓道一連の勉強をしなければならないが、付け焼き刃で覚えられるものではなく、やはり普段の稽古が大切である。体配と射法射技が、渾然一体となり、品格のある射が生まれる努力が必要である。「射は礼に始まり、礼に終わる」と言われ、射法と礼の一体化を目標とし、平常の稽古の中でも射法射技の練成に併せて礼儀作法についても学ばなければならない。

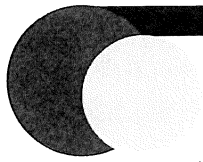
如何に弓道の奥が深いものなのか、しかしその深さ故に、真髓をきわめるための稽古、練成が弓道の面白みであろうと思う。

今後も、一人でも多くの弓人を募り、益々連盟の発展を願っている。

最後に、現在の江別市の弓道人口から、道場が非常に狭く稽古もままならず、増設を切望するところである。



試合中の緊張風景



江別ゲートボール協会

設立
加盟

昭和59年 4月15日
昭和60年10月22日

《現 役 員》

会 長	五十嵐 忠 男
副 会 長	赤 坂 伸 一
〃	保 倉 倉一郎
〃	吉 田 義 隆
幹 事	一 柳 始
〃	伊 藤 定 雄
〃	織 田 偵 二
〃	尾 崎 寿 雄
〃	鎌 田 孝
〃	木 村 三喜男
〃	越 中 ト キ
〃	佐 藤 三 男
〃	斎 藤 政 勝
〃	斎 藤 清
〃	莊 司 貞 夫
〃	鈴 木 昭 三
〃	曾 山 忠 吉
〃	村 中 光 雄
〃	山 本 精 一
〃	山 田 弘
〃	山 根 弘
〃	和 田 敏 夫
〃	渡 部 功
会 計 監 査	佐 藤 峯 治
〃	宮 本 鉄 夫
事 務 局 長	上 原 慶 一
事 務 局 次 長	大 木 康 行
会 計 部 長	河 合 栄 子

《沿 革》

- 昭和58年の夏に、市教育委員会体育課（担当内村邦臣氏）と、市体育指導員の砂川茂吉氏、平岡信夫氏、寺尾テル氏、辻岡俊介氏等が、市民の間でゲートボール愛好者が多くなり、各地域でチームができてきていることから、将来ゲートボールをより普及させるためにも協会をつくる必要があるとの認識から話し合いを行い、協会設立準備会を発足させることを申し合わせる。
- 昭和58年10月2日、協会設立に向けての第1回江別市長杯大会があおさぎ公園で開催され、24チーム、180名が参加し協会設立の気運が盛りあがる。
- 昭和58年12月22日、関係者が協議し、協会設立準備会を発足させる。
- 昭和59年3月20日、設立準備会総会を開催する。
- 昭和59年4月15日、協会設立総会が市民体育館会議室に於いて開催された。会長に山田利雄氏（元市長）、事務局長に平岡信夫氏を選任する。
- 昭和59年11月23日、第1回協会長杯大会が大森体育館（室内）に於いて開催され、17チーム、188名が参加し盛会のうちに終了し、記念すべき大会となる。
- 昭和60年10月、江別市体育協会に加盟する。会員数490名。
- 昭和60年10月29日、ルールの全国統一化にともない、北海道連合に加盟する。

- ・ 昭和62年4月、39クラブ、会員数592名となる。
- ・ 平成3年4月、松崎可夫氏（篠津）が会長となる。
- ・ 平成6年4月、五十嵐忠男氏（西野幌）が会長となる。
- ・ 現在、会員減少が著しい現況にある。



試合前の準備体操 指導：寺尾テルさん

《活動のあゆみ》

- ・ 昭和58年10月2日に初めて行なわれた市長杯大会と、昭和58年11月23日に行なわれた協会長杯は毎年行なわれている。
- ・ 昭和63年8月、待望していた泉の沼公園ゲートボールコート（6面）が完成する。
- ・ 平成2年9月、屋内施設建設に関する陳情書を市議会に提出する。
- ・ 平成2年12月21日、第4回市議会定例会本会議に於いて、陳情書が主旨採択となる。尚、同年11月26日、役員4名が市議会総務文教委員会で陳情書に関する補足説明を行う。
- ・ 平成3年8月8日～9日、第8回全日本世代交流ゲートボール大会（於東京）に高砂町チーム（小松原辰男外6名）が出場する。
- ・ 平成4年2月より、北海道消防学校

体育館を借りて冬季のゲームを行い、以来平成9年まで続ける。

- ・ 平成6年3月、野幌末広公園ゲートボールコート完成する。
- ・ 平成7年8月、改善要請していた泉の沼公園便所が改修される。
- ・ 平成9年5月24日～25日、第12回全国選抜ゲートボール大会（於奈良県）に若葉クラブ（上原慶一外6名）が出場し、決勝トーナメント戦まで進出する。
- ・ 平成9年9月21日～22日、第10回全国ねりんピック97山形大会（於山形）に寿クラブ（上原慶一外7名）が出場し、決勝トーナメント戦に進出し敢闘賞を受ける。



第18回全日本世代交流大会参加者一同

《現 況》

- ・ 平成11年度末登録人員 223名
- ・ 会議
 - （1）総会、役員会（年4回開催）
- ・ 審判員資格、講習等開催業務
 - （1）登録更新時講習会（前期後期）
 - （2）審判員資格試験案内
 - （3）審判員講習会（前期後期）
- ・ 大会の開催
 - （1）春季大会
 - （2）協会長杯
 - （3）市民体育大会
 - （4）市長杯

(5) 北海道新聞杯

(6) 秋季大会

・ 協賛及び石連協大会

(1) 江別老人クラブ連合会大会
(協)

(2) 道民スポーツ大会 (協)

(3) 厚別区、北広島市、江別市交
流大会

(4) 石狩管内大会 (石)

(5) 管内連絡協議会交流大会 (石)

・ 道連合主催大会関係

(1) 創始者杯

(2) 世代交流大会

(3) 全道高齢者大会

(4) 全国社会人大会

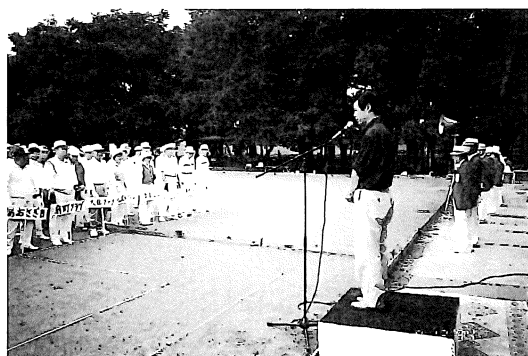
(5) 全道選手権大会

(6) 知事杯大会

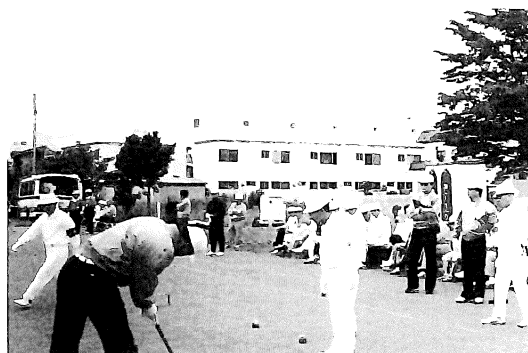
(7) 冬期熟年大会

(8) TVH大会

(9) 冬期ゲートボール選手権大会



秋季大会開会式 於：泉の沼公園コート



他市チームとの交流試合

《今後の展望》

・ 平成11年度事業で、今後の運営等の参考にするために、会員に対しアンケート調査を実施したが、アンケート集約の結果や、寄せられた要望意見等を生かして行くことが必要である。以下、アンケート結果と要望意見の一部を紹介する。

(アンケート結果)

・ 年間、各種大会が7回行なわれているが、回数については、「今のままで良い」が多い。

・ 大会会場を限定しないで、泉の沼公園と末広公園を交互にしてほしいとの意向も示されている。

・ 現在、パークゴルフを行なっている会員は50人程度であるが、希望者も多い。

(要望意見)

(1) 小学生等の大会を計画し、若い人も入って来れる環境をつくる必要がある。

(2) ボーリングが一度すたれて、また復活しているように、必ず元にもどると思う。今、一部の人々から嫌われているのは、人間関係の問題です。先輩の方々は後輩をあたたく指導してほしい。

(3) 審判更新時の教育時間を短くしてほしい。

(4) 冬期間プレーできる施設がほしい。ゲートボール人口増につながると思う。

(5) 公報えべつをはじめ、積極的にゲートボールを市民にアピールすることが必要である。

(6) 勝負にあまりこだわることなく、楽しくゲームができる環境を、会員一人一人が認識してつくっていくこと

が大切である。

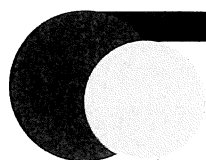
- ・ 平成12年度より、試行的に競技力別等に分けて試合をする事を考えている。いずれにしても多くの事業を通して、お互いのふれあいの中から人づくり、地域づくり、街づくりを目指して行きたい。



全国選抜ゲートボール大会参加選手



ネンリンピック参加選手



江 別 剣 道 連 盟

設 立
加 盟

昭 和 2 8 年 4 月
昭 和 2 8 年 4 月

《現 役 員》

顧	問	岡	英 雄
〃		伊 藤	富 雄
参	与	石 黒	武
〃		馬 場	清
〃		加 藤	信 久
〃		渡 邊	利 一
〃		林	繁
〃		八 柳	兼治郎
〃		野 平	昭 二
会	長	神 田	猛
副	会 長	青 木	勇 雄
〃		高 井	雅 一
〃		夏 井	正 美
理	事 長	吉 田	雄 策
理	事	津 野	悟
〃		阿 部	久 男
〃		関 矢	三 好
〃		佐 藤	甲 仁
〃		福 村	典 彦
〃		山 田	武 志
〃		浦 川	利 幸
〃		畠 山	博 史
〃		渡 部	順 一
〃		松 井	浩
〃		郷	仁
〃		谷 江	篤
監	事	保 倉	倉一郎
〃		尾 形	仁
事	務 局 長	中 山	喜美雄
〃	次 長	横 山	聡

《沿 革》

剣道という名称は、中国の古い漢書『芸文志』に使われているところから、これをはじめであると言われ、日本では、徳川三代将軍家光の寛永11年に、吹上上覧所で行われた試合の記録に「剣道」という言葉が使われている。

また、『日本書紀』には「多知加伎（たちがき）」「多知字知（たちうち）」とあり、これがやがて「太刀打」「兵法」「剣術」「剣撃」などという言葉を経て、明治の中頃から「剣道」と呼ばれるようになった。そして、明治44年に文部省が中学の正課として剣道を体育の一部とされたときに「剣道」という言葉が正式に取り入れられた。

古代から行われていたであろう剣道の起こりを特定することは困難で、創生期の剣道について書かれた書物はほとんどない。しかし、刀剣の歴史と併せて振り返ると、荘園を背景とした貴族・寺社の勢力拡大に伴い武士階級が台頭してきた平安時代、それまでの直刀（平造り）であった刀が湾刀（鎗造り）に変わり、このことから戦闘様式が徒歩戦から騎馬戦へ、つまり突くことが主であった刀法から断ち切る刀法へと変遷していったことは明らかで、こうした日本刀の操法の発達とともに剣道は完成されていくのである。

剣道は日本刀を用いる実戦目的の武術として考案され、後には二刀が武士の権威と象徴になっていく。戦国時代の鉄砲

伝来により戦闘様式が射撃、槍隊の突撃、白兵戦と進む中、日本刀の操法が実用面で重要となって、この時代に数多い流派が出現した。竹刀もこうした時代に登場し、最初は竹を革袋で包んだもので、今日のように剣道具を着けて打ち合う、いわゆる試合剣道は江戸時代末期に始まり、幕末には騒然たる世相の中で全国が剣道はじめ武道に熱中していた。

明治維新後、士農工商の階級制度の廃止、廃刀令などは剣道界に大打撃を与えたが、やがて警察を中心とする剣道の再建が始まり、明治28年の大日本武徳会の創立を契機に復興し、同44年には文部省が剣道を中学の正課として認める一方、大正元年の大日本帝国剣道形の制定や昭和4・9・15年と3回にわたって行われた天覧試合も剣道の普及におおいに貢献した。

こうして普及発展を続けた剣道は、昭和10年代には国家的な武道の奨励もあって隆盛の頂点に達したが、第二次世界大戦の敗戦で一挙に沈滞、大日本武徳会は解散、学校教育としての剣道、警察や官公庁の剣道は全面的に禁止となった。剣道を形を変えてでも残そうと、撓（しな）い競技などが誕生したが、剣道界は全く火の消えたようになった。

しかし、昭和27年の講和条約発効で剣道復活の動きは俄に活発となり、剣道人の努力が実を結んで同年10月、全日本剣道連盟が結成され、長い空白期間を経て剣道は再び愛好者の手に戻った。その後愛好者は増加の一途をたどり、全剣連発足以来、これまでの初段登録者の累計は約150万人に達している。

《活動のあゆみ》

江別剣道の歴史は、その源を明治の開拓屯田兵に始まり、戦前、最もその中心をなしたのは野幌剣道愛好会であった。

全盛を極めた昭和初期は、甲源一刀流、富田喜三郎教士の門下で免許皆伝、小塚栄四郎をはじめ、大塚豊、宮岸良輝、山岸三郎、伊藤辰弥の各剣士が中心となり、東に剣豪鎌田七蔵、また北には工藤誠、新開昼吉、川手倫惟など、石狩管内において江別在住の剣士は注目を集めていた。こうした指導者、諸先輩の活躍は、江別の剣道愛好者を多数養成し、当時、年一度の町大会には札幌から審判の先生を招聘し、武道大会として盛大に開催されていた。しかし、戦前のことでもあり、剣道としての団体組織はなく、その主管はほとんどは在郷軍人会か、青年団が総てを取り仕切っていた。

第二次世界大戦の敗戦により日本古来の剣道は壊滅的打撃を受けたが、それは江別も例外ではなかった。しかし、各地区では昭和24年頃から社会人の剣道競技が行われ始め、有志が集っては組織結成を徐々に進めていたのである。こうした剣道復活への息吹は江別にも届き、昭和27年には同志相寄り機熟せりと江別剣友会の発足を見たわけである。初代会長には、特に武道に情熱と理解があった日野本男が就任した。翌28年の北海道剣道連盟の発足にあたり江別剣友会も加盟、名称も江別剣道連盟と改め、ここに現在の連盟基盤が出来上がった。同年8月には、第4回江別市民体育大会に剣道の参加が認められ、会場となった第一中学校には、少年を含む124名の選手が集い盛大に競技が行われている。

今年は実に44回目を数える全江別剣道選手権大会は、昭和31年からの開催で、市内の多くの選手が熱戦を繰り広げてきた。

少年団の活動では、昭和40年に江別剣道スポーツ少年団が団員46名で発足、同42年には野幌と江北が、同44年には大麻

が、同47年には東野幌が、そして現在は江別中央、江別東を加えて計7団体が結成されている。近年、この少年団を巣立っていったOB達の子供や孫が新たに入団し、世代を越えた青少年の健全育成と剣道の発展に寄与しているところである。

江別市で開催された主な大会は、昭和53年に江別開基100年を記念して第15回全北海道東西対抗剣道大会を開催、地元選手の活躍は記憶に新しいところである。また、平成10年には第41回東北・北海道対抗剣道大会を開催し、北海道チームが快勝、主管の江別剣道連盟はその大会運営を絶賛された。



北海道軍5将 高井雅一教士七段（江別）

《現 況》

現在、会員数は77名（うち居合道部会10名）、市内には7少年団約300名の子供達、そして高校生と大学生の約130名余りが剣道を学んでいる。

連盟の事業は、(1)剣道大会、講習会の開催並びに後援、(2)剣道に関する調査、研究、指導、(3)段位の審査および級位の附与、が主である。

年間事業は、連盟結成以来、全北海道

団体優勝剣道大会、全道段別選手権大会や各種全国大会北海道予選会などをはじめ各種大会への選手派遣、市内にあっては市民体育大会剣道大会、全江別剣道選手権大会、江別市長杯争奪少年剣道大会等を開催している。

少年団育成にあっては、市内7カ所の少年団において毎週2回の稽古、さらに赤胴少年剣道錬成大会、全道青少年剣道錬成大会や全道中学生剣道錬成大会等への参加に向けて錬成会を実施している。特に全道の小学生が集まる赤胴少年剣道錬成大会では、江別選抜チームが3年連続でベスト8に進出するなど、江別っ子の剣道レベルが着実に向上し、全道の注目を集めている。

また、真剣に修練し学んだ成果を判定する級位審査を年2回実施するとともに、各種講習会を実施し、指導者並びに審判技術のレベル向上を図っている。

江別市役所、王子製紙（株）には剣道部が、大麻地区には大麻剣友会が有志を集い活動しており、全道各種大会で数々の戦歴を誇っている。



日本剣道形（平成12年本部長旗杯公開演武）

平成12年の北海道剣道祭では、日本剣道形の部に、大麻剣友会から郷 仁五段・渡部丈司五段が出場、見事優勝した。

《今後の展望》

江別剣道連盟も発足から47年の歳月が経ち、大小様々な大会や稽古を通して「交剣知愛」が実践されてきたところである。

こうした中、剣道の国際化が進み、世界剣道選手権も第11回を数えるに至った。また、剣道界への女性進出も著しく、戦前は竹刀を握るのはほとんど男性だけであったが、今では小・中学生から社会人、家庭の主婦に至るまで、剣道に熱心な女性が増えている。全剣連の統計では、年間の初段登録者のうち三分の一近くを女性が占めており、女性のための剣道大会も数多く、いずれの大会も盛況である。江別でも、かつて竹刀を握ったことのある女性が剣道を再開したり、子供の稽古に付き添った母親が剣道に興味を持ち、母子で稽古に通う風景も見られるようになった。今後、こうした背景を受けて女性指導者の育成充実にも努めて参りたい。

また、昭和40年代後半の少年剣道ブームが去ってから、近年、青少年の剣道人

口が低迷している。一方では、剣道の特性が人間形成にプラスと評価され、しつけと関連して子供に剣道を勧める家庭が依然として多いことも事実であり、青少年の健全育成に対する剣道への期待は大きいものがある。

剣道の普及発展の上で問題となるのは、こうした少年剣道への理解がいつまで続くかという点である。これには、少子高齢化社会の到来による幼少年人口の減少、スポーツ全体と学習塾などとの競合、そして剣道と他のスポーツとの競合が課題として考えられるが、少年剣士の減少は剣道界全体の発展を阻害するものであり、剣道人口の底辺拡大のために江別剣道連盟も真剣に取り組まなくてはならない問題となっている。

剣道のさらなる発展のためには、これまで以上に日本の伝統文化の精華である剣道の魅力がどこにあるかを、剣道人が先に立って示すべき時代であり、それが江別剣道連盟の責務でもある。

剣道は剣の理法の修練による 人間形成の道である

「剣道修練の心構え」

剣道を正しく真剣に学び
心身を錬磨して
旺盛なる気力を養い
剣道の特性を通じて
礼節をとうとび
信義を重んじ
誠を尽くして
常に自己の修養につとめ
以つて国家、社会を愛して
広く人類の平和、繁栄に
寄与せんとするものである。



平成12年赤胴少年剣道錬成大会
ベスト8チーム（江別選抜）

江別拳法協会

設立 昭和61年 4月 1日
加盟 昭和61年12月11日

初代会長 高間 専造 氏
初代理事長 鍵谷 好徳 氏



全道大会選手団入場行進

《現 役 員》

会 長	高 倉 勝 孝
理 事 長	野 坂 政 司
副 理 事 長	鍵 谷 好 徳
事 務 局	高 橋 康 子
〃	鍵 谷 真 紀 子
監 事	蘇 武 正 春
〃	岩 田 信 一

《沿革と活動のあゆみ》

少林寺拳法は、我国において一つの団体として、2300以上の支部をかかえる最大組織である。道内でも130支部が活動中であり、道体協はじめ各市町村体協の加盟団体として青少年の健全育成に努力中である。当地江別市では前会長である高間専造氏の深いご理解とご支援を受け、昭和61年12月に、江別市体協の皆様の一員となることができ、今日まで地道な活

動を継続中である。これまでの、当協会の取組みについて、各事業等ごとに総括してみようと思う。

1. 本協会主管、共催等の主な事業について。

(1) 全道、全国各々の主管運営について
下記の通り実施、成功に導く。

(ア) 全国高校大会への開催協力（平成2年7月）

(イ) 全道高校大会への開催協力（昭和61年、平成元、4年）

(ウ) 全道高校新人大会の開催協力（平成6、7、8、9年）

(エ) 北海道大会の主管運営（昭和63年、平成5年）

(2) 本協会主催、共催事業への取組み

(ア) 今年で14回目をむかえる市民大会及び夏、冬季の合宿、技術強化目的の特別合宿等を毎年実施し、成果をあげてきた。

(3) 指導員が各講演会への講師としての参加及び教育問題をテーマに各講座の開講を実施、講師として町村信孝氏、上田三三男氏等各界の有識者を招聘して、有意義な事業を実施。

(4) 毎年車イスマラソンのアシストとしてボランティア活動にも努力。

2. 本協会所属支部の大会実績及び各表彰歴について

(1) 国際大会（平成元年、5年）

当協会下の大麻高校支部が出場、男女とも各個人部門に上位入賞

(2) 全国大会

江別大東支部小学生団体

（平成2年第4位、3年最優秀）

江別大東支部一般女子個人

（平成6年以来最優秀等6年連続上位の見事な評価を受ける）

(3) 全日本学生大会

当協会下の大学支部が平成6年より9年まで連続4年間、女子三段以上の個人部門で最優秀、そして平成8年には団体種目で全国最強の防衛大をやぶり、初の団体最優秀の偉業達成。

(4) 全国高校大会（当協会所属大麻高校）

昭和63年の岡山大会以来、新潟、札幌、名古屋、姫路、神奈川、大阪、松山、鹿児島等毎年連続の全道総合優勝をして、個人、団体部門全てに全国出場を実現させ、全国でも、その技術レベルの高さを十分に証明し通算8年連続の各部門最優秀等の好成績を残して指導の鍵谷好徳氏とともに全道の体育関係者より大きな注目をあつめる。

(5) 全北海道大会、全道学生大会、全道高校大会（高体連）においては、前述してきた通り、毎年全ての全国大会出場権を獲得する為に、ほぼ全種目、部門において最優秀か優秀となり、他に追従を許さない大実績を残す。



全国大会にて

〈表彰歴〉

当協会下の各支部

- ア. 江別市青少年スポーツ賞
(昭和62年より平成5年まで毎年)
- イ. 道体協表彰(平成3年、5年、6年)
- ウ. 南部忠平記念奨励賞(平成6年)

上記の通り重要な賞を多くいただく喜ばしい実績を残している。

〈報道〉

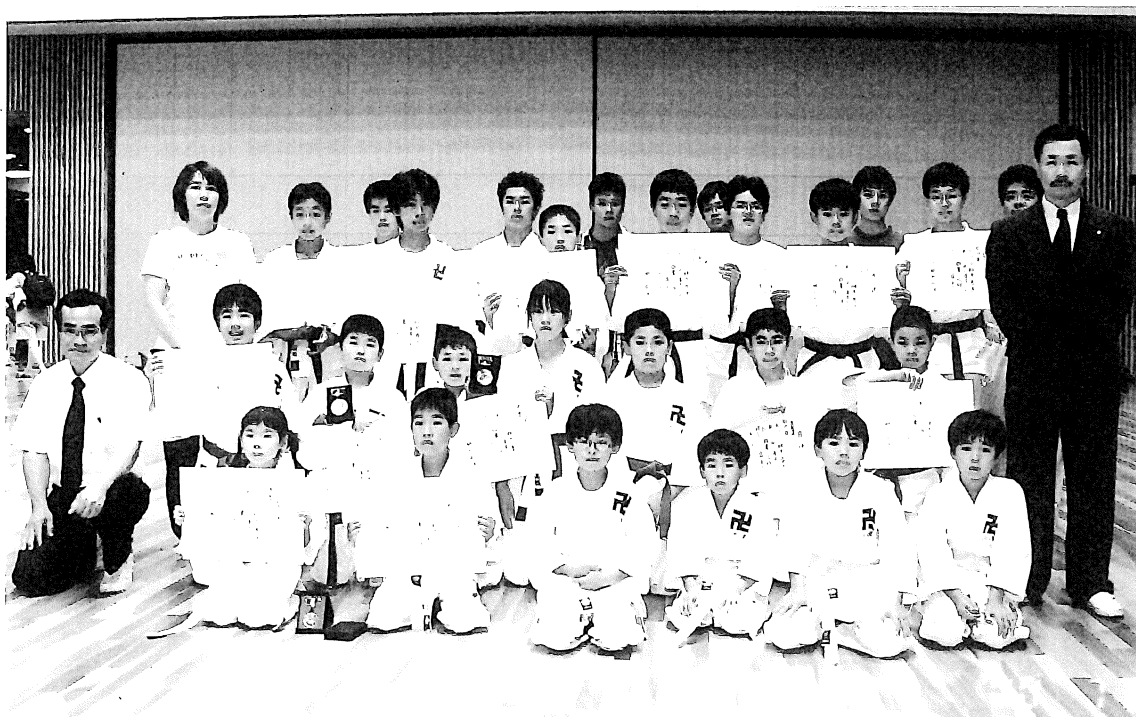
HBC「拳士にかけた青春」の1時間放送を全道ネットで平成2年8、12月に2度放映され、「気分は天気730」、「どさんこワイド」、「スーパータイム」及び新聞報道等に20数回と活動ぶりが紹介される。特に1時間のドキュメントは教育関係者より深い関心をよせられ、その後の活動にも、良い結果をもたらすこととなる。

〈現況と今後の展望〉

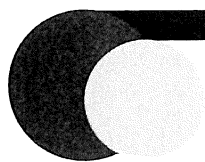
組織自体は、国際的に益々発展を続け、国内的にも安定した広がりを持つ中で、江別では、協会内会員数が増加し、活動

が著しく伸張した時期を経て現在、他地区と比較して平均的で安定した会員数を維持活動中である。特に江別大東支部(鍵谷好徳支部長)と大麻麻の実支部(野坂政司支部長)は、賢実な活動を続け、小中高校生への指導は、道内はもとより全国でも屈指のレベルを保持している。また技術のみに固執せず、何よりも人間の成長を大切にして、将来を担う青少年が正義感と自信、勇気そして責任感の伴う有為な人材となることを念頭に指導実践がなされている。ただここ数年は、過去に鍵谷監督のもと、めざましいほどの実績を残した大麻高校支部の活動が、同氏の職場異動に伴い、満足に指導が受けられなくなるという事情から低迷を続けており、本道拳法界にとって全道、全国的には、手痛い大損失となっている。故に、当協会と道連盟では、その復活を望む地域住民の声も受けて、鍵谷氏が最も信頼をよせている道連盟副理事長の野坂政司氏を同校監督に就任要請をする他に、当協会所属の札幌学院大学支部にも、道

連盟理事長の池上治男氏を迎えて、高校、大学双方の充実した指導体制を整備しつつある。今後当協会は、高倉会長のもと、現役員が一丸となって、大切な若者や子供達の為に、様々な試練を乗り越え精進努力する所存である。



H12年度 江別大東支部 全道大会入賞者と



江別サッカー協会

設 立 昭和56年 2月14日
加 盟 昭和56年 4月 1日

《現 役 員》

顧 問	郷 正 雄
会 長	野 村 義 次
副 会 長	大 森 利 勝
〃	後 藤 一 昭
〃	薄 井 逸 夫
〃	森 木 潤 一
〃	富 室 隆
理 事 長	加 藤 敏 昭
副 理 事 長	野 呂 英 行
常 任 理 事	山 口 健 二
	(社会人リーグ担当)
〃	小 玉 豊 治
	(総務担当)
理 事	堀 江 祐 一
	(事務局長)
〃	高 間 専 逸
	(事務局次長)
〃	野 村 尚 志
〃	佐 藤 和 英
〃	福 士 志 津 男
〃	佐 藤 和 彦
〃	斉 藤 尚 樹
監 事	後 藤 久 子
〃	宮 沼 直 之

《沿 革》

協会設立以前の江別のサッカー事情は、中学・高校でのクラブ活動が主であり、社会人チームとしては王子製紙、江別市役所などが札幌地区サッカー協会に加盟して札幌社会人リーグなどで活躍しておりました。

昭和50年代に入り、市内のサッカー人口は少年サッカーの普及などにより増加し始め、社会人チームなども誕生し始め協会設立の気運が高まり、昭和55年に江別市役所のサッカー部が中心となり、江別サッカー協会が初代会長郷正雄氏のもと設立されました。

この頃は、大会を行うにも会場を確保するのも大変で学校のグラウンドや手頃な広場を見つけはサッカーゴールなど大きな荷物をトラックで運搬して会場の準備を行うなど、設立当時の役員の皆さんには大変苦勞しながらも徐々に事業拡大へのご尽力いただきました。

《活動の歩み》

江別市体育協会加盟後のサッカー協会の活動は、市民体育大会の小学生、中学生、高校・大学・社会人の部開催しておりました。

平成6年からは当協会の新たな主催大会として、協会長杯争奪サッカー大会を開催した年でありました。

第1回協会長杯争奪サッカー大会では、小学生、中学生、高校・一般の部から21チームが参加し、約1ヶ月間に渡り熱戦を繰りひろげました。

第1回大会の成績

小学生の部（飛鳥山陸上競技場）

優 勝 江別ユニオン少年団

準優勝 対雁少年団

第三位 文京台レッドファイターズ

中学生の部（中央中・第二中）

優 勝 中央中学校

準優勝 江陽中学校

第三位 第三中学校

高校・一般の部

（南幌町リバーサイド公園サッカー場）

優 勝 大麻高校

準優勝 当別F C

第三位 北海コーキーズ

また、平成5年からは社会人リーグ立ち上げのため、江別サッカーリーグ実行委員会を設け協会役員とクラブチームなどが中心となり準備作業を進め、平成7年に待望の第1回江別社会人サッカーリーグが8チームが参加し6月から8月にかけて日曜日を開催日として熱戦を繰りひろげました。

この記念すべき第1回江別社会人サッカーリーグの成績は次のとおりで、コーキーズとF C野幌が6勝1敗の同率で優勝し、石山クラブ5勝2敗、アミーゴス4勝3敗、F Cフォルツァ3勝4敗、キャット&ドック2勝5敗、大麻F C2勝5敗、電制7敗でした。

平成8年の第2回江別社会人サッカーリーグでは、参加チームが4チーム増え12チームとなり、翌年の平成9年第3回社会人サッカーリーグからは更に4チームが加わりリーグを2部制として開催しました。

平成11年第5回社会人サッカーリーグの成績は次のとおりで、1部リーグはF C野幌が6勝1敗優勝し、ナイスガイズ5勝1分1敗、アウル当別5勝2敗、F Cキャッツ2勝2分3敗、コーキーズ2勝2分3敗、メンズ2勝1分4敗、エルフシュリット1勝1分5敗、キャッツ&



江別社会人リーグ

ドック1勝1分5敗。

2部リーグはTバーズが6勝2分で優勝し、アウスレーゼ5勝2分1敗、ワッチオFC4勝3分1敗、FCフォルツァ4勝4敗、王子製紙3勝3分2敗、ハルシオン3勝1分4敗、シェビー2勝2分2敗、スマイル1勝1分6敗、MIHOKO1勝7敗でした。

サッカー競技は屋外だけのスポーツと思われがちですが、世界的には欧米を中心に屋内サッカー（5人制）も盛んでプロリーグが行われているほどである。

北海道では全国的にも早くに普及しており、数多くの大会が行われておりレベルも高く多くの選手達が日本代表として世界大会などで活躍している。

当協会でも、通年サッカーを楽しむことと、特に個人技術のレベルアップにつながるなどから、平成元年に室内サッカー大会を新たな事業として開催しました。

当初は試合会場と日程の関係で小学生及び中学生を対象として行っておりました。

平成7年からは、今までの大会を協会長杯とし新たに市長杯を設け、年2回の開

とし、小学生及び中学生の大会から参加規模を拡大し、高校・一般社会人さらには四十雀の部（四十歳以上）を加え、93チーム、約1,000人規模の参加数となっている。

平成11年協会長杯室内サッカー大会の成績は、小学4年生以下の部（12チーム参加）優勝江別ユニオン少年団、準優勝対雁少年団、第3位大麻ジュニア。

小学フリーAの部（8チーム参加）優勝江別ユニオン少年団、準優勝大麻キッカーズ、第3位対雁少年団、小学フリーの部（8チーム参加）優勝江別ユニオン少年団、準優勝大麻キッカーズ、対雁少年団。

中学生の部（20チーム参加）優勝江別ユニオンA、準優勝中央中学校B、第3位野幌中学校A。

高校・一般社会人の部（36チーム参加）優勝とわの森三愛高校A、準優勝チーム矢沢、第3位ペペロンチーノ、チェリーズB。

四十雀の部（9チーム参加）優勝岩見沢四十雀、準優勝アグレ、第3位大麻ZZ、江別四十雀、対雁パパーズで、下は小学年生から上は50歳代までが参加した幅の広い大会でした。



室内大会

《現 況》

平成12年の当協会の主な事業として、江別社会人リーグの15チームが1部・2部に分かれて6月から8月にかけて行われ、7月には小学生、9月には高校・一般社会人の部の市民体育大会の開催、8月には小学生、10月には会長杯争奪大会の開催。

また、冬期間に行われる室内サッカー大会は江別市民体育館を会場として12月に市長杯室内大会、翌年の2月には会長杯室内大会の5大会を開催し、約60団体、1,000人が一年を通してサッカーを楽しむ環境づくりを目的とし実施している。

事業運営の円滑化のため、協会役員体制の他に、総務、審判、競技、技術指導、育成普及の5つの専門部会を設け市内のサッカーの普及と技術向上目指し活動を行っている。

中体連や各種団体等から依頼される大会のそれぞれの運営及び審判予定されている。

更に、市内中学生の選抜チームを結成し、12月に千葉県八千代市で開かれる国内外の中学生選抜大会に参加し、持てる

力をいかに発揮し、上位の成績を目指し練習に取り組んでいる。

《今後の展望》

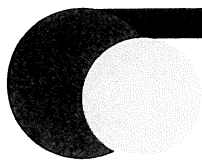
当協会は江別市体育協会に加盟しているものの、サッカー協会の上部団体である北海道サッカー協会の加盟には至っておらず、市内で行っている各種大会は全道・全国大会に繋がる予選会としての開催ができない状況である。

現在、市内で活動して全道・全国大会を目指している少年団及び社会人チームは、札幌地区サッカー協会などに登録している現状である。

当協会も北海道サッカー協会の下部組織として行くには、当協会傘下団体登録数の不足を解消し、全道規模の大会を運営していくための3級以上の公認審判員育成や大会運営スタッフなどの充実が、必要不可欠であり今後これらの課題を現在江別社会人リーグに加盟している団体と協会役員が一体となり組織強化を図り上部団体加盟に向けた取組を行っていきたいと考えている。



中学校選抜



江 別 柔 道 連 盟

設 立 昭 和 2 4 年 4 月 1 日 (柔道同好会発足)
加 盟 昭 和 2 5 年 4 月 2 6 日

《現 役 員》

顧 問	櫻 井 淳
参 与	加賀谷 喜 八
	石 川 家 光
	松 下 勇
	澤 田 清 晴
会 長	丸 山 武 敏
副 会 長	岩 田 善 輔
理 事 長	高 梨 幸 輔
副 理 事 長	大 森 明
	今 野 昭 男
	林 紀 博
	田 中 啓 介
監 査	石 川 家 光
	松 下 勇
常 任 理 事	松 崎 善 吉
	佐々木 康 雄
	佐々木 昭 一
	寒河江 堅 治
	清 野 軍 士
	山 中 喜 照
	田 辺 昭 雄
	千 葉 重 信
	竹 村 英 雄
	佐々木 辰 雄
	丸 山 武 彦
	新 井 春 男
	堀 川 士 郎
	奥 山 忠 由
	江 本 幸次朗
	十 倉 宏
	新 家 一 幸

《沿 革》

江別に於ける柔道は昭和初期より江別警察署道場や北日本製紙（現王子製紙）の道場を使用して町の柔道愛好者がそれぞれに集って合同練習をしていたようである。

昭和7年頃には柔道愛好の士が仮設道場に青年達を集め興武会と称して練習をしていたようであるが、昭和12年以降戦争がおこり昭和17年には遂に明治神宮大会も中止となり、日本の武道も休息状態となる。

昭和20年敗戦後はGHQの指令で武徳会は解散、学校柔道は中止、柔道は武道であるとして禁止になるなど柔道を愛するものにとっては断腸の思いであった。

しかし、やがて数年後柔道の高遠なる理想を求める声が柔道愛好家からあがり、近代スポーツとしてGHQのみとめるところとなり、ようやく復活することとなる。江別に於いても柔道同好会をつくるはこびとなった。

昭和24年医師村上政雄が初代会長となり柔道同好者を集め、江別柔道同好会を発足させ、組織化されるに至った。

昭和25年には待望の学校柔道の復活、第5回国体から柔道が参加種目となり全日本柔道選手権大会の開催とようやく講道館柔道が息をふきかえた時期である。

昭和27年に役員改選を行って二代会長に森田亀雄を選出した。この頃札幌柔道連盟理事の丸山武敏が江別に来住し組織の近代化につとめたので、江別柔道が躍

進期に入り各種大会に好成績を上げるようになった。



S32.12丸山道場にて

昭和29年に役員改選を行って三代会長に曾良中清作を選出した。

昭和31年には四代会長に矢野熙を選出、江別柔道連盟と改称した。

昭和32年に五代会長に石沢武を選出した。

昭和34年に六代会長に古田島薫平を選出した。

昭和45年に全日本柔道少年団北海道支部が結成されるやいち早く江別分団として加盟、第1回結成大会以来好成績を残しその名を高めた。

昭和49年には少年団後援会を再編成し、新しく江別柔道少年団育成会（会長高間専造）が父兄の強い意志で誕生した。これに対応して専任指導員が強化されめざましい成果を上げることとなる。

昭和54年に連盟創立30周年記念式典を行い、道柔連より古田島会長に特別功労賞が贈られた。

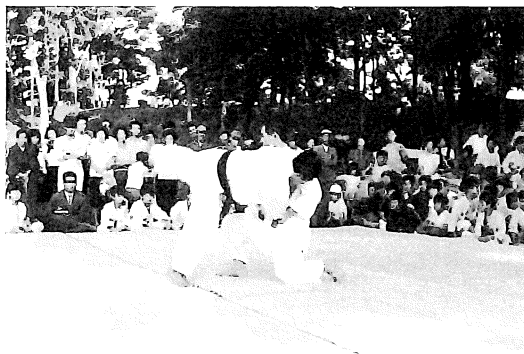
昭和61年に役員改選を行い七代会長に高間専造を選出した。

平成8年に八代会長に丸山武敏を選出、現在に至っている。

平成11年には連盟創立50周年記念行事を盛大に祝った。

《活動の歩み》

昭和27年5月、第1回札幌軍対江別軍の対抗柔道大会を開催、その後この大会は近接市町村対抗柔道大会に発展していった。



江別神社境内特設会場にて

昭和28年、江別神社祭典奉納柔道大会を行い、その後連盟の恒例行事として毎年開催され、春秋の2回実施されている。また10月31日に第1回職域対抗が江別署において行われ、団体戦では北日本製紙が10対1で警察署を破り優勝した。個人戦では1位に石川庄作（北日本製紙）、2位に橋場（警察署）3位に斉藤（警察署）が入賞した。その後11回大会まで続く。

昭和29年、第1回市民体育大会を開催、以来毎年行われている。

昭和30年、第6回全道青年柔道大会を江別市にて開催、団体個人ともに上位入賞をした。

昭和31年11月11日に第5回近接市町村柔道大会を江別高校特設道場で行った。

昭和33年11月10日、当連盟主催の第5回職域対抗柔道大会を行い団体戦では決勝で丸山道場が2対1で開発局機械工作所を破り優勝した。個人戦では1位菊池末太郎3段（江別署A）が、2位今野昭男3段（北日本製紙）が、3位松崎善吉2段（開発局機械工作所）がそれぞれ入賞した。

昭和35年、第7回職域柔道大会を行い江別警察署道場に北日本製紙、開発局、角谷組など7チームが参加、団体戦では北日本製紙Aチームが優勝した。

昭和37年、国体柔道北海道予選大会を開催、好成績を収めた。

昭和41年10月、第1回石狩管内少年柔道大会を行い上位入賞する。

昭和43年、第1回当別対江別の対抗試合を開催、以来開催地を交互に行い大いに親善を深めた。

昭和44年、再度国体柔道北海道予選大会を開催、17名の選手が参加した。同年、第1回道民スポーツ大会が開催され以来石狩管内大会として毎年続けられている。

昭和45年、全日本柔道少年団に加盟、第1回結成大会以来毎年参加。第6回大会から4年連続上位入賞を果たす。



第6回全北海道少年柔道大会で三位

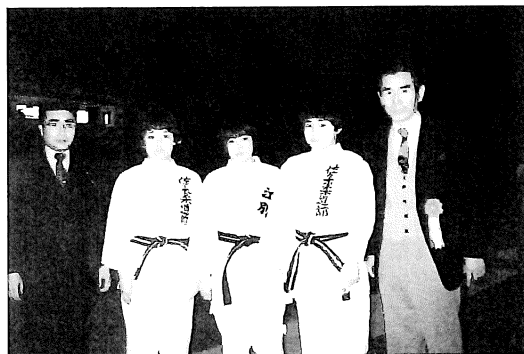
昭和53年、柔道少年団全道大会を行い、小学生の部優勝、中学生の部準優勝を獲得し全道にその名を高めた。

昭和51年春より少年団卒業記念柔道大会を開催し毎年の恒例行事となる。

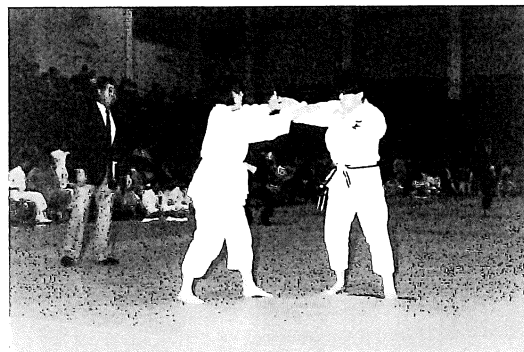
昭和58年、59年に開催された全日本女子体重別選手権大会において渡部五月が56kg以下級で2年連続優勝に輝く。

昭和61年には五十嵐準子が全日本女子体重別選手権大会72kg超級で優勝、平成2年には、全日本女子柔道選手権大会で3位、さらに、平成3年には環太平洋選手権大会無差別級で優勝を果たす活躍をした。

平成5年7月4日、第46回東北、北海道対抗柔道大会を江別市民体育館において開催、主管に当たった江別柔道連盟も会員の一致協力により盛会裡に大会を終わらすことができた。団体戦は8対6で北海道軍が優勝した。



第7回全日本女子柔道体重別選手権大会優勝した渡部五月(右から二人目)



優勝した五十嵐準子(右)

《現 況》

当連盟は少年柔道及び少女柔道に力を入れてきたが今後もこの方針は変わらないはずである。以前は柔道少年団が江別、角山、大麻、野幌の4地区にあったが、現在活動しているのは江別と大麻、野幌の三地区になったことは残念である。

現在毎年行われている大会を列举すると次の通りである。

5月に江別神社春季祭典柔道大会

8月に道民スポーツ石狩夏季大会

9月に江別神社秋季祭典柔道大会、都市対抗柔道大会

11月に全道段別柔道大会、市長杯争奪少年柔道大会、市民体育大会柔道競技、スポーツ少年団本部長旗争奪柔道大会

2月に江別少年団卒業記念柔道大会

3月に大麻少年団卒業記念柔道大会、全道選手権大会、マルちゃん杯少年柔道大会等があげられる。

その他、会員のための審判規定講習会を行い、審判の資質の向上につとめている。



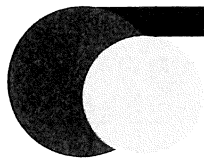
東北・北海道対抗 開会式

《展 望》

柔道は講道館を創設した嘉納治五郎先生の言葉、精力善用にある。日本古来の柔道スポーツは今や全世界に広がりオリンピック種目ともなって知らぬものがないほどに普及した。まことによろこばしいことである。しかし、柔道の本家である日本の柔道人口が減少していることも事実であり残念なことでもある。ここで考えなければならぬことは柔道人口底辺の拡大である。

そのためにこそ、少年柔道及び女子柔道を普及発展させてゆかねばならない。そして、小、中学、高校、大学へとつなげる必要がある。そのために次にかかげる努力をしてゆかねばならないと思う。

1. 指導者の育成、特に学校現場のカリキュラムの中に格技の位置付けがあるのだから格技（柔道）のできる体育教師の配置を教育委員会に強く要望する。一般人の中からも適格者をさがし指導者として育成する。
2. 市当局に武道館の建設を強く要求していく。江別より小さな市町村にすら公立の武道館がある。江別市につくれぬはずはない。
3. 連盟会員の高齢化がすすんできた。今や柔道衣を着ることも少なくなってきた。そこで1年に1日ぐらい「柔道の日」をつくって身体に支障のない人は形の1つもやってみてはどうかと思う。そうすることによって会員の柔道を通しての親睦や柔道への情熱がよみがえってくると信ずる。



江 別 水 泳 協 会

設 立 昭 和 4 5 年 6 月 3 日
加 盟 昭 和 4 5 年 6 月 1 8 日

《現 役 員》

顧 問	松 下 治 芳
〃	東 田 正 信
会 長	川 村 恒 宏
副 会 長	天 内 淳 一
〃	山 崎 正 行
理 事 長	佐 藤 昭 彦
総 務 委 員 長	大 野 聰
競 技 委 員 長	佐 藤 学
指 導 委 員 長	高 月 ルミ子
普 及 委 員 長	川 上 小 夜
競 技 力 向 上 委 員 長	川 田 真 之
委 員	三 好 美知代
	石 橋 潤 子
	青 木 則 子
	武 下 淳 子
	名 古 屋 紀 子
監 査	川 住 俊 徳
	山 本 幸 秀
	坂 上 信 子
会 計	佐 藤 幸 美

《沿 革》

1970年6月3日、中央公民館（現・郷土資料館）において、会員21名で江別水泳連盟として発足する。

会長に横田勝弥氏（元・市議会議員）
理事長に工藤祐三氏（元・市職員）を選出する。

発足当時はまだ市営等のプールはなく、学校のプールを借用して活動する。したがって、団体の活動も活発ではなかったようである。

2年後の72年に待望の青年センターの温水プールが完成し、これを記念して落成記念水泳競技大会を開催し、市民85名が参加して盛大に行われた。この大会を機に、翌年の6月に選手育成を目的とした江別水泳少年団が発足し、江別市におけるクラブ活動の基盤となり、各クラブともインターハイ・国体への出場選手を数・質ともに多く配している。

75年4月に北海道水泳連盟に加盟し、同年三重県で開催された国体に監督・選手2名が北海道代表として選出されている。

79年4月に全道第1回婦人水泳大会が開催され、家庭のご婦人達のサークル活動の発足となる。

87年インターハイ、89年国体が野幌運動公園プールで開催される。

94年には江別スイミングスイフトが社会体育優良団体として文部大臣賞を受賞するなど、スポーツ少年団活動にも力を注いできた。

96年7月、第34回北海道障害者スポー

ツ大会水泳競技が開催され、青年センタープールが初めて障害者にも使うことができるように改修される。

《活動の歩み》

70年6月江別市体育協会に加盟する。1ヶ月後の7月、第1回水泳指導講習会を第三小学校のプールで58名が参加して行われたが、これが連盟最初の活動であった。72年に青年センターが出来てからは夜間のプールの監視を連盟に依頼され、毎晩会員が交替で監視員をしてきた想い出が残る。

同年、日本赤十字社水上安全救助員の講習会が連盟の後援で開かれ、女性の会員も多く受講し、救助員資格を得、これが奉仕団活動の基となる。

80年11月江別水泳連盟設立10周年記念式典が行われこの年に連盟から江別水泳協会と改称する。

87年にはインターハイ、89年には第44回はまなす国体が野幌運動公園プールで開催され、シンクロ・飛び込み・水球の各競技に選手を北海道代表として選出している。

90年7月、江別水泳協会20周年記念式典が行われ、ゲストにソウルオリンピック100M背泳ぎ金メダリストの鈴木大地氏を招き、近隣市町村の水泳愛好者も見学を訪れるなど、盛大に開催された。

歴代会長、理事長は次の各氏である。

初代会長	横田勝弥
二 代	松下治芳
三 代	東出正信
現 会 長	川村恒宏
初代理事長	工藤祐三
二 代	大郷正裕
三 代	天内淳一
現 理 事 長	佐藤昭彦

協会の主な事業としては、次に挙げるものが現在行っている事業であるが、これらを通して水泳の普及、技術の向上に努めてきたものである。

70年、第1回江別水泳競技大会
(第17回市民大会)

72年、第1回市民マークテスト
(泳力検定・道水連公認)

78年、第1回江別選手権水泳競技会
(道水連公認大会)

83年、第1回夏休み水泳教室

道民スポーツ石狩夏季大会などにも参加し、出場した全ての大会で優勝したが、参加市町村が少なく水泳競技がなくなってしまったのが残念であった。

また、青年センターで行っている新春水泳記録会・各種講習会などにも積極的に後援もしてきております。



新春水泳記録会

○ 各委員会の活動

競技委員会は、江別水泳競技大会、江別選手権水泳競技会など水泳協会主催の事業のほか、スポーツ財団が行っている水泳大会の後援など、選手育成・水泳競技を主とした事業を行っております。

指導委員会は、毎年各小学校プールを利用して、小学生を対象とした夏休み水泳教室、外部講師を招いての研修会・講習会を開催し、会員や一般市民の水泳技術の向上・指導を行っております。

普及委員会は、道水泳連盟公認マークテスト（泳力検定会）、準指導員研修会・講習会などを開催し、水泳の普及を行っております。

競技力向上員会は、選手の登録業務、選手強化事業を行っております。

最後に2000年11月に、江別水泳協会も30周年を迎えることになりました、記念誌や式典・祝賀会を開催いたしますので宜しくお願いいたします。

《現 況》

99年度の登録は10団体・個人会員115名となっており、発足当時よりは100名くらい増えております。

更に登録団体にはおもに主婦を対象とした、江泳会、パドル、江別レディース。子供を対象としたスイミングフレンズ、ツクシンボ、フリッパーなどの水泳サークル。

スポーツ少年団に加盟し、選手育成団体として行っているものは、江別水泳少年団、江別スイミングスイフトがあります。

さらに、酪農大学の学生で組織している酪泳会が結成されてから20年が経って活躍されております。

これらのボランティア団体のほか、市内で最初の民間プールとして開設され、大人から・子供まで年齢等を問わない指導、選手育成までも行っているジャパンスイミングスクールがあります。

特に少年団、スイフト、酪泳会、ジャパンの4団体は日本水泳連盟に選手登録をし全道・全国の水泳大会に参加し、数多くの記録を残してきております。

しかしながら、現在の青年センターのプールだけでは協会登録9団体のほか、登録外のサークルの活動などもあり、活動日数、コース数、活動時間に制限されており、ボランティアでの選手育成には難しいものが出てきております。

《展 望》

1、年々、少子化問題も関係してきているのか、子供の水泳人口も減少してきております。逆に自分の体調に合わせて行うことができ、腰や・膝の負担を軽減することができ、病後や老後のリハビリに大変良いことで高齢者の方は増えております。

また、基礎体力を付ける、バランスを養うなど子供の頃に水泳を行うことはすべてのスポーツの基礎として最高のスポーツです。他のスポーツ団体の指導員の皆さんも、ぜひ、小学校低学年までは、水泳をやらせて下さい。

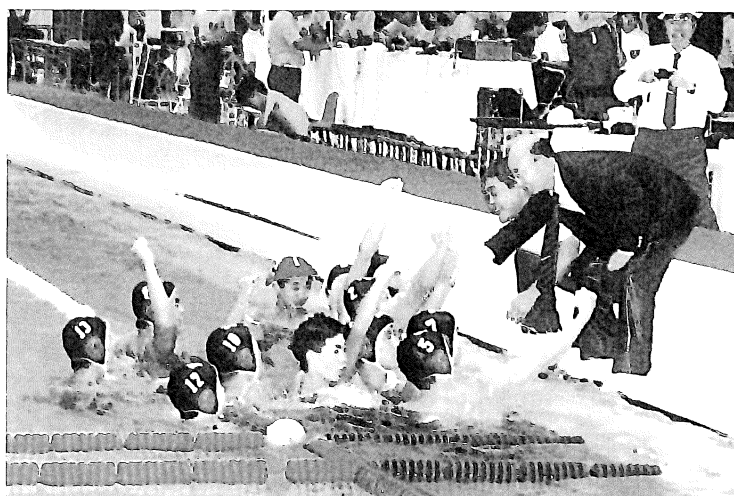
2、タイムを競う競泳、リズム水泳や水中エアロビクスなどの楽しむ水泳、病後のリハビリのための水泳、それぞれの目的は変わっても、水泳は同じプールで子供から老人まで、泳力のある人ない人、健常から障害者まで、みんなが一緒に楽しめ・交わ

えるスポーツです。水泳は生涯スポーツです。家族みんなでプールへ通って下さい。

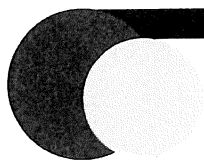
- 3、青年センターのプールもサークルが増え、活動するコースや時間が不足しています。大会の参加者や見学者が増え、選手席や、見学者席が不足しています。プールも建設してから30年経ちました。将来構想の中に生涯スポーツに対応できるプール建設の要望をしていきたいと考えております。



平成元年「はまなす国体」



迫力あるプレー続出「水球」



江 別 ス キ ー 連 盟

設 立
加 盟

昭和51年9月14日
昭和52年4月13日

《現 役 員》

顧	問	伊 藤	豪
会	長	堀 井	常 彰
副	会	武 井	孝
〃		木 村	弘 治
理	事	木 内	俊 次
理	事	阿 部	昌 弘
〃		伊 藤	俊 悦
〃		稲 葉	信 也
〃		川 内	亮 蔵
〃		北 風	利 明
〃		小 玉	豊 治
〃		小 柳	隆 司
〃		澤	富 靖
〃		沢 口	文 裕
〃		武 部	忠 一
〃		出 口	朝 彦
〃		長 野	謙 一
〃		堀 部	八 郎
〃		牧 野	幸 彦
〃		山 上	孝
〃		吉 田	康 弘
幹	事	牧 野	幸 彦
〃		川 内	亮 蔵
全日本スキー連盟・北海道スキー連盟派遣技術員			
常 任 技 術 員		吉 田	康 弘
		沢 口	文 裕
		出 口	朝 彦
		小 玉	豊 治
道 連 技 術 員		北 風	利 明

《沿 革》

昭和51年9月14日、北海道スキー連盟の正式な認定を得て江別スキー連盟が発足した。

当時のスキー界は、国際的にはオーストリー、フランス、イタリア等のアルペンチームがワールドカップの舞台で華々しい活躍をしていて、日本チームも猪谷千春（コルチナ大会回転第2位）に続けと、多くの選手が国際舞台へと進出し始めていた頃であった。そして、オーストリーのあのトニーザイラーやヨセフリーダーが世界に名を馳せて、彼らが出演する映画が封切られ主題歌の（白銀は招くよ）がラジオやテレビから茶の間に、そして町々のスピーカーから流れて弥が上にもスキー熱が盛んになって行った。

また、冬季オリンピック札幌大会もスキー人口の増加に拍車をかけた。

折りも折り、日本経済はバブル経済に差しかかり消費も拡大して行ったところから、スポーツ用品等も世界の流行を追って店頭を賑わせていた。当然のことながら、新製品を求めて、スキー愛好家はスポーツ用品店へと足を運んで行った。

野幌駅前と江別銀座商店街にスポーツ用品店を営んでいた小玉良治氏の許にもスキーインストラクターやスキー愛好家が集まるようになった。

そして、江別にスキー連盟を創ろうと言う機運が持ち上がり、当時、岩見沢スキー連盟や札幌スキー連盟に所属して一般スキーの普及に努めていた指導員、準

指導員、教育委員会で社会体育の任に携わっていた方等が東奔西走して連盟創設に必要な条件を着々と整備し、苦労の末にやっと江別スキー連盟設立へと漕ぎ着けたのであった。この間、数年の歳月を費やしたこと、岩見沢スキー連盟、その他、関連の組織や機関から多大なご支援ご鞭撻を頂いたことを銘記して置かなければならない。

平成9年、初代から会長を努めて来られた伊藤豪氏が勇退され、後任に5期に亘って副会長を努めて来られた、堀井常彰氏が就任された。

平成11年度に新たにスノーボード部が設置され、初代部長には小玉豊治氏が就任された。

平成11年、連盟規約の一部改正及び機構改革を行った。



基礎スキー講習会

《活動の歩み》

江別スキー連盟はスキーを通して健全な精神の普及発展を図り、市民の体位向上を期することを目的として創設された。

この目的を達成するために市民のスキースポーツの振興、普及、技術の指導、普及のための研究会、講習会、各種のスキー行事の開催、会員の親睦交流に取り組んで来た。

その活動の歩みの概略を以下に列記すると、創設当時の会員構成は団体としては・江別市役所・江別市教育委員会・王

子製紙・北海鋼機・北電火力発電所・江別市立病院・市内各スポーツ店・市内高等学校、個人としては市内のスキー愛好家、S・A・J公認指導員・準指導員であった。したがって、当初は、団体加盟の会員を対象とした研修会講習会が主な活動であった。

昭和51年度会員研修会、市民スキー教室、会員スキー教室、歩くスキー教室(教委主催)、一般スキー講習会、検定会、中学生アルペン教室、チューンナップ・ワックステクニック講習会、歩くスキーの集い、初心者歩くスキー講習会、道民スポーツ石狩大会予選、市民スキー大会、会員スラローム大会を行って来た。

これらは、以後、継続して現在に至っている。

山の無いスキー連盟ということで、活動の拠点としてのホームゲレンデは岩見沢市志文の万景閣スキー場であった。

内容によっては歩くスキーのように飛鳥山、野幌原始林、夕張マウントレースイ、札幌西岡距離競技場等に場所を移して活動して来た。

昭和56年から上級者強化練習を行っている。スキー人口の増加に伴い、講習会、検定会等の指導者の確保が必要になってきた。講習会受講者が増えるにつれ、講師一人の受け持ち人数が多くなり既に限界ぎりぎりの状態であった。指導員、準指導員の養成に視点をあてた活動である。

昭和57年から市教委、体協、市内各種団体の主催するスキー行事を後援して講師を派遣し活動している。

この頃から、市に要請して、飛鳥山、大麻西町公園、東野幌公園等を整備し、小スキー場として幼児教室、親子教室、婦人教室等の一部の講習の場として利用して来た。

昭和57年幼児健康教室、婦人スキー教

室。

昭和59年にはナイター講習会をとりいれている。上志文荻野山や、手稲オリンピックに遠征しての活動である。

昭和59年、会員スキーバスの運行開始

昭和60年、江別スキー連盟会長杯スキー大会新設

昭和61年には婦人初心者ナイター講習会を飛鳥山で行っている。

昭和61年、これまで一般に含まれていた少年を一般とは切り離してジュニア検定を行うという全日本スキー連盟の規定に基づきジュニア検定が開始された。制限滑降、総合滑降、8の字回旋、ジャンプの試技を検定する。吹雪の中、寒気の中、参加の子供達にも検定に携わる検定員にも過酷な活動である。

昭和62年、これまで活動の拠点として利用させて頂いた万景閣スキー場が経営者が変わり、三井グリーンランドと改称され引き続き新装のロッジ内に連盟の事務所を設置して頂き活動している。

昭和63年、親子スキー教室

平成1年、一級クリニック

平成4年、S・A・J基礎スキー準指導員受験説明会、これまで事務局長が行っていたものを担当者を決めて行うようにした。

平成6年、市民クロスカントリー歩くスキー講習会（スポーツ財団主催）、野幌原始林クロスカントリー歩くスキー大会

平成7年、母と子のスキー教室（スポーツ財団主催）

市民スキー教室は朝里川、桂沢、マウントレースイ、上砂川に遠征して活動している。

市民スキーツアー、年度の最終行事として行うようになった。テイネハイランド、マウントレースイ、上砂川、カムイリンクス、キロロスキー場へバスツアーし

てきた。

等々平常連盟独自の計画による講習会、検定会の外に各種団体の協力事業、本州修学旅行スキー体験学習への協力、一部市内高等学校のスキー授業への協力と活動内容も充実してきた。

平成8年江別スキー連盟創設20周年実行委員会を組織し、記念行事、記念誌、記念式典の計画立案に取り組み、平成8年9月28日、記念式典挙行、記念誌の発行を見るに至った。



基礎スキー級別テスト

《現 況》

創設当時団体加盟していた各職域の状況の変化に伴い、団体加盟が姿を消して、現在は、個人加盟が全てで、会員数は流動的であり、概略600名弱とおさえている。

活動の分野は、歩くスキー、競技スキー、基礎スキーに分かれており、組織的にはこの分野に基づき3つの委員会を設けてそれぞれの専門分野で活動している。

基礎スキー専門委員会は、その活動内容から、更に、総務部、検定部、指導部、スノーボード部の4部制を布き、平常行っている講習会や検定会の開催及び準指導員養成等は、基礎スキー専門委員会の中の4部が分担して活動を展開している。

歩くスキー専門委員会の計画に依る活動は、シーズン中に10回程度、主として

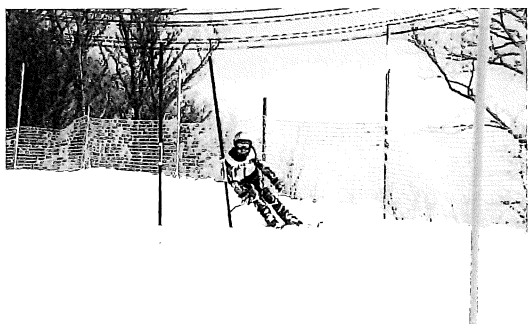
野幌原始林を中心に活動を展開している。

競技スキー専門委員会の計画に依る活動としては、ジュニア競技スキー教室の開催が10回程度と各地で行われる協議会への参加等の活動を展開している。

基礎スキー専門委員会の計画に依る活動としては、基礎スキー検定会5回程度、ジュニア検定会4回程度、基礎スキー講習会10回程度、ジュニアスキー講習会9回程度、ナイター講習会7回程度、幼稚園児スキー講習会4回程度、1級クリニック4回程度、プライベートレッスン10回程度、小学生冬休みスキー教室3日間、コース2回程度、技術選手権予選会1回、市民スキーツアー1回、シニアスキー講習会3日間コース1回、スノーボード講習会3回程度、上記の活動を展開している。

スノーボードに関しては、部が新設されて日が浅いこともあり、現在、連盟内の指導員養成に力を入れており、未知数の部分が多いが、スキー界の動向から見て、今後、スノーボード愛好者の増加が考えられるので、活動が広がって行くことが予想される。

これに対して、スキー愛好者は次第に高齢化している傾向が見られるというスキー界の趨勢をにらみ、平成12年シニアスキー講習会を試みた。初めての試みで、PRその他、暗中模索の中実施している。



ジュニア競技スキー練習

《展 望》

昭和51年に連盟が発足して24年の歳月を経た現在、江別スキー連盟も大きく発展して来た。

この間に、スキー界も大きく変化し冬季スポーツが多様化してきている。

スノーボード部の新設もその一つの現れである。

スキー部門でも、従来のノーマルスキーの時代からカービングスキーの時代へと移って来つつある。

ゲレンデでは、ショートスキー、ファンスキーを楽しむ姿もちらほら見かけるようになった。

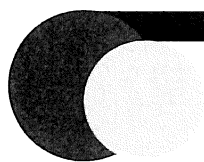
当連盟としては、全日本スキー連盟傘下の組織として、時代の流れを見極めつつ、それに対応して行かなければならないと考える。

歩くスキーは、最寄りに原始林のコースを有している。一般スキーは、遠征を余儀なくされている。2000年代の冬、地元でスキーを楽しむ姿が見られないだろうか、と考えるのは全くの夢だろうか。

ともあれ、江別市体育協会の傘下にある、冬季スポーツを通して市民に貢献して行く江別スキー連盟としては代が替わり、人は変わっても頑張り続けて、体協ともども栄えて行くことを祈念して止まない。



歩くスキー（野幌森林公園）



江別市スポーツ少年団

設立 昭和49年4月1日江別市スポーツ少年団連絡協議会
昭和56年4月1日江別市スポーツ少年団に改称
加盟 昭和41年体育協会内少年団育成部として加盟

《現 役 員》

本 部 長	佐 古 利 男
副 本 部 長	田 辺 昭 雄
〃	大 郷 正 裕
本 部 員	黒 田 稔
〃	中 山 喜美雄
〃	大 森 明
〃	川 村 恒 宏
〃	橋 本 茂 昭
〃	中 山 雅 裕
〃	音 部 憲 夫
〃	上 田 省 二
〃	依 本 正 平
〃	野 川 豊
〃	辻 井 淳 一
監 事	笠 羽 利 憲
〃	久津間 義 一
事 務 局 長	金 内 晴 夫
事 務 局 員	横 山 聡
〃	福 士 志津男
〃	小 林 則 幸
指 導 協 会 長	池 岡 実
〃 副会長	神 田 猛

《沿 革》

スポーツ少年団組織は、日本体育協会創立50周年記念事業、昭和39年に開催される東京オリンピックを記念して昭和37年6月に日本スポーツ少年団として誕生しました。翌年の昭和38年には、北海道スポーツ少年団も結成された。

その設立時の理念は、「一人でも多くの子どもたちにスポーツの楽しさと喜びを与え、スポーツを通して子どもたちのからだと心を育てる組織をみんなの住んでいる地域の中につくっていこう」というものでした。それを受けて体育協会内部にスポーツ少年団育成部が昭和41年に2団をもって芽生えたのでした。

昭和40年度 江別剣道少年団活動開始

昭和41年度 野幌剣道 〃

昭和44年度 江別卓球 〃

〃 大麻剣道 〃

〃 角山柔道 〃

〃 大麻柔道 〃

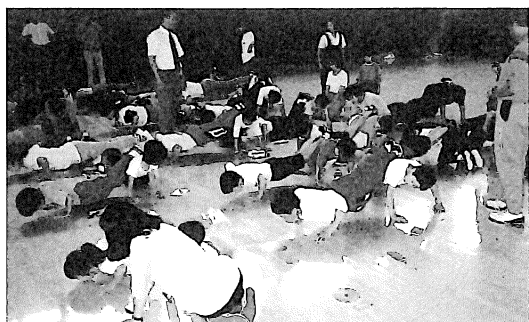
昭和48年度 江別軟式庭球 〃

昭和49年度 日本スポーツ少年団登録制度が開始されました。登録団だけがスポーツ少年団と名乗れることとなりました。

〃 江別市体育協会少年団育成部より分離独立。

スポーツ少年団剣道部として5団が登録（江別、野幌、大麻、東野幌、江北剣道）

〃 スイミングスイフト登録活動開始



体力テスト

♪ 大麻卓球登録活動開始
 ♪ 江別市スポーツ少年団連絡協議会設立
 昭和50年度 角山柔道加盟
 ♪ 江別柔道加盟
 昭和51年度 日本スポーツ少年団有料登録開始
 ♪ 江別軟式庭球スポーツ少年団解団
 ♪ 江別バスケットボールスポーツ少年団加盟
 ♪ 大麻野球（現チャイルズ）加盟
 ♪ 野幌野球（現タイガース）加盟
 ♪ 元野幌野球加盟
 ♪ 桜ドッジボール加盟
 ♪ 屯田ドッジボール加盟
 昭和52年度 大麻バッファロー加盟
 昭和53年度 西大麻野球（現アトムズ）加盟
 昭和55年度 桜・屯田ドッジボール解団
 ♪ 大麻空手加盟
 ♪ 野幌柔道加盟
 ♪ 野幌卓球加盟
 昭和56年度 江別市スポーツ少年団に改称し本部結成記念式典実施
 ♪ 本部長旗争奪専門部大会開始
 ♪ 野幌空手道加盟
 ♪ 大麻ホッケー加盟
 昭和57年度 江別空手加盟
 昭和59年度 事務局が、江別市教育委員会より自立
 昭和59年度 東大麻グランドキングス加盟
 ♪ 大麻ミニバスケットボール加盟
 昭和60年度 中央剣道加盟
 ♪ 野幌ホッケー加盟

♪ 大麻軟式庭球（現大麻ソフトテニス）加盟
 昭和61年度 大麻キッカーズ加盟
 昭和61年度 文京台サウスジュニア加盟
 ♪ 日本スポーツ少年団認定員養成講習会（江別会場）開始
 昭和62年度 第1回北海道スポーツ少年団表彰（6団体12指導者受賞）
 ♪ 江別ソフトテニス加盟
 ♪ 江別ユニオンサッカー加盟
 ♪ 江別太バレーボール加盟
 ♪ 元野幌野球解団
 昭和63年度 大麻剣道文部大臣表彰を受賞
 ♪ 元野幌野球解団
 平成元年度 江別東剣道加盟
 ♪ 対雁サッカー加盟
 ♪ 江別太バレー退団
 ♪ 東野幌野球解団
 ♪ 大麻レオファイトアーズ解団
 ♪ 東野幌野球解団
 平成2年度 江別市スポーツ少年団初級ジュニアリーダースクール実施
 ♪ 江別卓球解団
 平成3年度 江別バドミントン加盟
 平成4年度 大麻ジュニアF C加盟
 平成5年度 ツクシンボスイミング加盟
 ♪ 野幌ホッケー休団
 平成6年度 江別スイミングスイフト文部大臣表彰を受賞
 ♪ 大麻ホッケー休団
 平成7年度 野幌レッドブリックスミニバスケットボール加盟
 ♪ 大麻東ダイヤモンドミニバスケット加盟
 平成8年度 江別中央ジュニアバレーボール加盟

- 〃 豊幌フェニックス野球加盟
- 平成9年度 野幌ファイターズ加盟
- 〃 元江別アニマルズ加盟
- 平成11年度 若葉ウイングスミニバスケットボール加盟

《現 況》

1, 登録状況

前段までは、過去からの登録加盟を年次で記載しました。

平成11年度末現在、登録団数42団の登録がありますが、2団が休団中であり、実質40団1,298名、小学生から大学生までの団員が登録しています。これは、江別市内の小学生のほぼ1割に当たる登録人員です。

その性別内訳は、男子は980人、女子318人です。

小学生は、1,091人、中学生が177人、高校生以上32人となっています。

種目別には、野球（9）、剣道（7）、バスケットボール（5）、柔道（3）、空手（3）、卓球（2）、水泳（3）、バドミントン（1）、バレーボール（1）、サッカー（4）、ソフトテニス（2）の11種目となっています。

指導者は、175名が登録指導者として位置づけられ、その6割に当たる人が少年団認定の有資格者です。

有資格者も単位団に必ず置かなければならず、2日間の研修で少年団の組織について、安全指導、発育と発達などの講義と体力テストの実技を受けて得られる資格の「認定指導員」が、98名、さらに日本スポーツ少年団での研修と試験で得られる「育成指導員」4名で構成されており少年団を支えています。

また、登録指導者で構成する指導者協議会をも組織しています。

2, 少年団事業

当スポーツ少年団本部では、次の事業を行っています。

(1)単位スポーツ少年団の活動促進を図るための助成事業…登録団に対して、登録人数割りと均等割りの2本立てで助成

(2)指導者養成事業

①認定員養成講習会開催…日本スポーツ少年団登録規定に定められる認定員の養成を北海道スポーツ少年団と石狩管内スポーツ少年団連絡協議会の助成を受け毎年開催しています。

②研修会参加助成…スポーツ少年団に係る研修会参加に対しその費用の一部を助成します。

(3)交流事業

①リーダー研修…日帰りで、4年生を対象とします。

②初級ジュニアリーダー研修
5年生以上を対象とし前期1泊2日、後期半日の講習を実施

③管内リーダー研修会

④スタルヒン野球大会…ブロック予選、管内代表決定戦を実施し優勝チームが旭川の本大会に参加している。ここ数年江別チームが連続して旭川に参加し、過去には、大麻チャイルズが優勝して、日本スポーツ少年団野球大会にも駒を進めています。

⑤スノーフェスティバル…昭和53年



第11回江別市スポーツ少年団交歓会

に冬期間の交流活動として実施その後、江別スノーフェスティバル創設期から開会式と事業の参加を協力している。

(4)体力測定事業…夏休みと冬休みに実施。1級合格者に賞状を付与。

(5)少年大会派遣事業

①日本スポーツ少年団が実施する全国少年大会に例年1名ずつ参加している。

②管内少年大会…1泊2日の野外活動を通じ管内の団員と交流を深めています。

③全道少年大会…3泊4日のレクリエーション活動や創作活動を行い、全道の団員と交流を深めています。

④管内剣道交流会…5市町村が参加し全道出場権をかけて競い合っている。

⑤全道剣道交流大会…管内の代表としてここ数年全道大会に選手を輩出しています。

(6)専門部大会…昭和56年の本部制度への移行を契機に種目ごとの本部長旗を作成し本部長旗争奪大会を実施しています。

又、それとあわせて種目を越えての交流を深めるために父母と指導者を交えた〇×クイズや玉入れ、長縄とびなどを行う交歓会を実施し、種目を越えた団員相互の交流を深める事業として継続している。

(7)手帳配布事業…日本スポーツ少年団で監修しているスポーツ少年団員手帳を購入し1年目と4年目7年目の団員に配布しスポーツ少年団員としての意識を高めるとともに誇りを持ってもらうよう配布しています。

(8)母集団研修会…母集団や後援会としてスポーツ少年団を援助し、バックアップしてくれる組織としてさらに

強力な支援者団体として必要な「スポーツ少年団組織」「母集団のあり方」などについての講義を毎年、登録受付日に実施している。

《今後の展望》

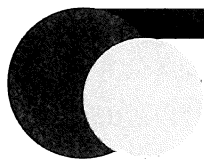
文部省では平成7年より総合型地域スポーツクラブ育成モデル事業をスタートさせました。

総合型地域スポーツクラブのイメージは、欧州で一般的にある多種目、多世代にわたるスポーツクラブであり、地域住民が自主的に運営し、300人から500人の会員を要し、施設の管理運営をはじめとし、スポーツ愛好家からプロ選手までを輩出する組織をイメージしているものです。スポーツ少年団組織自体のスタートは、ドイツのスポーツユーゲントをモデルとしているところからそのような組織の考え方で「地域に根ざす」「地域の青少年スポーツ」など相容れることが多いものです。

社会がこの総合型地域スポーツクラブに目覚めることになれば、まさに親子そろって、家族ぐるみで、世代を越えた色々なスポーツ活動をしている人々の非常に楽しい構図が見えてきます。

それにより、地域のコミュニティの形成や、地域の教育力の向上などメリットは無数にあるといわれています。

世の中がますます、高度化、情報化、高齢化、少子化等々が進む中、人間のヒトとしての本能である「動くこと」や、「集いゲームする喜び」の本質を深めていく上でも、地域に根ざしたスポーツ少年団だからこそ、そのうねりの中であって、さらに輝きを見せていく必要があることと思われまふ。



江 別 相 撲 連 盟

設 立 昭 和 2 5 年 4 月 以 前 (愛 好 者 団 体 と し て 活 動)
加 盟 昭 和 2 5 年 4 月 2 6 日

《 現 役 員 》

顧 問	清 水 重 雄
相 談 役	高 柳 武 治
会 長	土 蔵 辰 馬
副 会 長	小 山 千 芳
〃	江 本 幸 次 朗
理 事 長	角 建 雄
副 理 事 長	佐 藤 良 男
〃	大 湯 欣 市
総 務 部 長	江 本 幸 次 朗
指 導 部 長	有 野 廣 実
施 設 部 長	佐 藤 良 男
事 務 局 長	宮 野 正 春
事 務 局 次 長	山 崎 実
理 事	鈴 木 正 和
〃	浜 口 勇
〃	藤 田 昌 之
〃	永 浦 宏
監 事	堀 田 利 男
〃	神 谷 正 明

《 沿 革 》

江別相撲連盟の歴史をたどると昭和10年までさかのぼることになる。当時、江別駅前で龍門旅館を経営していた大井勝蔵を中心に相撲の同行者が相集い『江別相撲同好会』を結成したのがそもそもの始まりであった。

創設当時の先達の名を掲げると次の通りである。

江別地区

大井勝蔵（会長）・松尾・金内・阿部・本山・清水

野幌地区

水野・川上・萩野・遠藤・中村

王子製紙

伊藤・佐藤・前田・渡部

北海電力

八重樫・西川・甲斐・鹿内・沢村

以上20名に及ぶ。

昭和14年4月に役員の改選を行い、2代会長に石川勝・副会長兼理事長に清水重雄を選出し『江別国技会』と名称を変更した。

昭和23年の役員改選で3代会長に三浦光三・副会長に清水重雄を選出した。当時は戦後の混乱期であったが東京から大相撲をよぶ大事業を行ない相撲への関心を高めるかたわら後進の指導育成に力を注いだ。

昭和27年の役員改選では4代会長に清水重雄・副会長に渡部武司・理事長に高柳武治を選出したが、この時期は相撲道の振興に努力したものの戦後の復興期と

共に、各役員も熟年世代に入り本業が多忙で思うにまかせずしばらくの間は活動も休息状態となった。

昭和43年には道民スポーツ大会が創設され、第2回道民スポーツ石狩夏期大会が江別市に於いて開催されたことで江別相撲界の建て直しがはかれることになる。社会的にも個人的にもようやく安定とゆとりが生じたことも相撲再建の原動力につながったことは言うまでもない。

昭和44年4月には『江別相撲連盟』と改称して組織を再編成し、6月には北海道相撲連盟と江別体育協会に加盟した。連盟になっての初代会長には清水重雄・副会長に高柳武治・理事長に辻田武作を選出し、技術指導、審判講習等を実施すると共に後進の養成に力を注いだ。

昭和51年には役員改選を行ない2代会長に土蔵辰馬・副会長に高柳武治、石川外三・理事長に中山満を選出した。

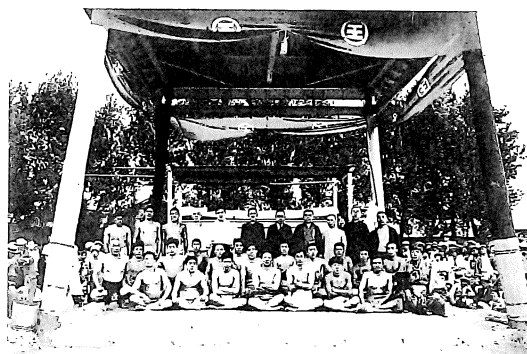
昭和53年には名誉会長、顧問、相談役を新設し、役員改選をして今日に至っている。現役員は冒頭にのせた通りである。

《活動の歩み》

団体の活躍と成果

昭和10年に誕生した相撲同好会から現在の相撲連盟までの活動のあゆみを回顧すると

昭和11年に江別相撲大会の記録がある。当時の写真によればこの土俵は王子製紙(旧富士製紙)のもので実に立派なものであった。ここで育った選手が各大会に出場し優秀な成績を残している。

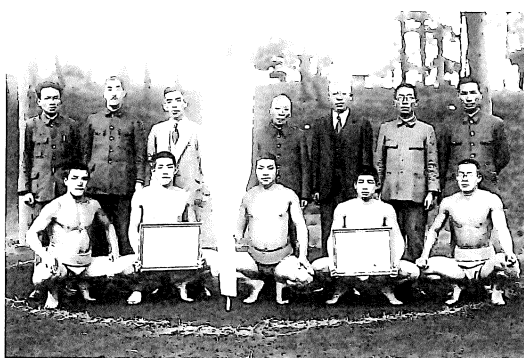


昭和11年 江別相撲大会参加選手

昭和16年に全国青年学校相撲大会に北海道代表として江別青年学校の選手が出場し見事全国優勝をなし遂げている。写真は当時のもので現在も連盟の役員をしている清水重雄・高柳武治の雄姿も見られる。

なおこの年には江別国技会の選手が全道選手権大会で優勝、仙台大会でも3位の成績を収めている。

昭和21年から24年まで4年連続管内優勝は当時の実力を如実に物語っている。



昭和16年 全国青年学校相撲大会(優勝)北海道代表選手

昭和25年には戦没者法要相撲大会をまた昭和28年には東北、北海道素人相撲大会を実施したが、戦後の復興期の影響もうけてその後しばらくは江別国技会の休息状態がつづく。

昭和43年に初めて道民スポーツ大会が行なわれたのを機に昭和44年江別相撲連盟として再出発し、選手の育成につとめ、全道の各大会に積極的に参加し、江別で国民体育大会北海道予選を行なう。

平成7年には全道選手権大会、高校総体北海道予選大会を実施した。

個人の活躍と成果

昭和12年全道選手権大会で清水重雄が厚田の池田（後の横綱吉葉山）を破って優勝した。

昭和16年の同大会で、高柳武治が渡島の杉村（後の横綱千代の山）を破って優勝した。

昭和20年（終戦の年）高木定義が室蘭の花田（後の若の花）を破って優勝するなど個人としても輝かしい記録を残している。

《現 況》

全国的に見て相撲の競技人口は年々減少の一途をたどり、江別相撲連盟でも同様なことが言える。すなわち新会員の入会がなく、一方では会員の高齢化が進み事業活動が思うようにいなくなる傾向があり、残念なことである。

ここで一人でも多くの新会員が加盟されることを期待している。

当連盟の事業方針は次の通りである。

1. 相撲道の普及と発展に尽す
2. 小、中学生に対する相撲競技の育成につとめる
3. 相撲連盟会員の拡充をはかる

特に現在は相撲競技底辺の拡充を目標に小、中、高生対象に、すもう教室と各大会にむけての強化練習を行なっている。

相撲連盟の年間行事としては一般の部が（1）国民体育大会北海道予選、（2）全道市町村対抗相撲大会、（3）北海道相撲選手権大会の三大会がある。江別相撲連盟からも出場しがんばっている。

少年の部は（1）6月の最終日曜日に夕

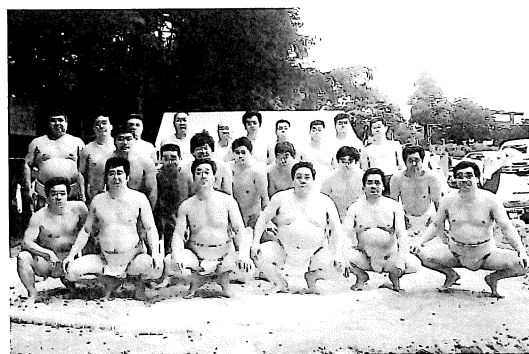
張市にて、はまなす国体記念大会、わんぱく相撲夕張場所、（2）7月の北海道小中学校相撲選手権大会北海道予選（札幌テレビ塔仮設土俵）、（3）市内での全江別少年相撲大会兼市民体育大会と9月の江別市子ども会地域対抗相撲大会などがある。



オール江別少年相撲大会「見合って 見合ってー」

少年相撲は、わんぱく相撲及び全道小中学校相撲選手権大会では常に上位の成績を残している。特に平成11年度の全道小中学校相撲選手権大会の女子の部では小学5年生が個人優勝するなど優秀な成績を収めている。

一般の相撲大会は前述した全道三大会のほか、当連盟では市民体育大会を兼ねた大会と、江別神社秋季大祭奉納相撲大会と称して、全道各地で活躍している多くの選手に参加を願い例年盛大に行ない大いに相撲熱を高めると共に後進の指導育成に役立っている。



江別神社奉納相撲大会 近隣市町村の面々

《展 望》

相撲はいうまでもなく国技と称され日本古来の伝統的格技の一つである。そして今や女子にも開放されて新相撲と呼ばれ発展しそうな状況にある。又相撲がオリンピックにも取り上げられそうな風潮にある。

心技体の強化にも役立つ相撲は意外とルールが簡単で分かりやすい反面敬遠されやすい一面もあり、「とる」より「見て楽しむ」スポーツになりつつある傾向が見られる。

相撲を振興するための障害はなんといっても指導者の不足を一番に挙げなければならない。義務教育の学校現場で体育の中に格技が位置づけられているにもかかわらず実際に取り上げられていないのは現場の教師に格技を指導できるものがないことである。こうしたことを文部、教育行政機関に強く要求してゆかねばならぬと同時に民間人の中からも多くの指導者を育てる必要がある。

次に子どもをとりまく環境問題がある。それは進学受験問題の過熱化である。子どもは塾へいったり、習い事で忙しいからだ。更にカッコいいものに憧れるのが今の子どもたちだ。スポーツだってそう。裸でやる相撲よりもユニホームを着るサッカーや野球に憧れるのももったいなことである。特に小学校高学年や中学生になるとなおさらである。これらが相撲離れの要因であろう。

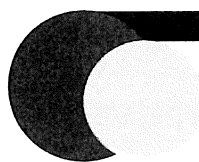
こうした風潮や反省をふまえて今後の展望にふれたい。

- (1) 日本相撲連盟を中心とした各都道府県の参加団体は指導者の養成講習会の強化をはかり一人でも多くの指導者を育てる。
- (2) 少年向けのわかりやすい手引き書を

発刊しその普及につとめる。

- (3) 容易に裸になれる公認相撲パンツの着用をすすめる。

最近では、小学生、中学生の全国大会も行なわれ、2008年オリンピック種目を目指す新相撲（女子）の組織化がすすめられている。このときに当り江別の小学生の相撲は全道大会でも常に上位にランクされており、これを中、高校で絶やすことはゆるされない。ここに一貫指導体制の重要性を再認識せざるを得ない。このためにこそ指導者の資質の向上と育成は斯界の急務と考える。国技スポーツ相撲を通して体力、気力を育てることは、現下の軟弱日本を救う道にほかならぬことだ。



江別ソフトテニス連盟

設立 昭和25年4月以前(愛好者団体として活動)
加盟 昭和25年4月26日

《現 役 員》

顧問	阿部梅吉
〃	杉田正
〃	竹村恒男
会長	武井孝
副会長	掛田耕三
〃	河上アツ子
理事長	工藤旻
副理事長	中川雅志
理事	根本敏明
〃	依本正平
〃	石元雅人
〃	小川英世
〃	西岡利忠
〃	宮沢洋子
〃	小野ひろみ
〃	川西一枝
〃	中山チズ子
監事	渡部利之
〃	渡辺孝二

会長 福本重亀(北日本)
副会長 武藤敏一(江別警察署)
副会長 安斉 富(北電)
理事長 阿部梅吉(江別高校教員)
理事 千葉寿人(雪印)
中村 謙(北日本)
笠羽 亮三(北電)
佐賀井 勇(第三小学校教員)
会計監査 辻 茂(第三中学校教員)
松本 昌喜(北日本)

の諸氏が選任された。

昭和25年創立の江別市体育協会と同じく、今年創立50周年を迎えることになった。

設立当時は、公設のテニスコートが無く、当時の北日本製紙や江別高校のコートを借りて練習や大会を運営してきました。

事業としては、会員の夏季練習や9月25日に、第1回の町民大会を開催するなど、庭球協会の事業がスタートしていききました。

昭和29年の市政施行に伴い従来の町民大会から第1回市民大会と名称を変更し、現在の市民大会へと繋がってきております。

この頃から愛好者も段々増えてきており、江別高校の2面では、大会運営に時間がかかりコート造成の要望が高まってきました。

第2回市民大会からは、40歳以上の壮年の部が設けられ、老いも若きも楽し

《沿 革》

戦後、社会教育の振興が叫ばれ、江別市体育協会が結成された、同じ25年に、当時の北日本製紙の福本重亀さん、江別高校教員の阿部梅吉さんらが中心となって同好者に働きかけを行い、7月8日に江別高校で発起人会を開催し、規約案等の協議を行った後、7月17日に設立総会を開催し、名称を江別庭球協会としてスタートすることになった。

設立当時の会員は28名で、役員に

める軟式庭球となってきた。

昭和35年には、全道の仲間との交流や全道大会参加を考慮して、北海道軟式庭球連盟へ加入し、それに合わせて名称も江別庭球協会から江別軟式庭球連盟に改め、活動の場が江別市内から全道へと広がっていった。

昭和42年大麻団地テニスクラブが会員120名をもって設立され、翌43年に連盟加入となり、江別連盟に新し地域単位のクラブが加入し、連盟会員も飛躍的に増加し、活動も一段と活発になっていった。

この年、愛好者待望のテニスコートが飛鳥山公園に完成し、これを記念して市制施行15周年記念市民大会兼市営コート開き大会として、6月30日に140名を越える参加者を得て盛大に開催されました。

また、この年から江別地区対大麻地区対抗試合が始まり、江別全体へと広がっていくことになる。

《活動のあゆみ》

昭和25年設立から現在まで連盟を支えた会長は次の各氏である。

初代会長 福本 重亀

2代会長 対馬 英二

3代会長 阿部 梅吉

4代会長 杉田 正

5代会長 竹村 恒男

6代会長 武井 孝(現在)

設立当時の事業は、協会が主催して協会会員の練習会、町民大会が主なものでダブルスの個人戦のみで行われてきた。

その後、活動単位が職場、クラブ単位で行われるようになり、大会にも団体戦が行われるようになった。

昭和44年市営コートの完成と大麻クラブの加入により、会員の増加とともに選手層も厚くなり、全道各大会へも出場し、だんだん好成績を収めるようになってき

た。

当時、市営コートとしては、飛鳥山公園にコート4面、大麻西コート2面、大麻東コート1面の公設コートが有り、連盟の大会は飛鳥山コートで、大麻の3コートは大麻クラブが江別市から管理委託を受け、大麻クラブの練習やクラブの大会にとフルに活用されてきた。

事務局もこの頃から各クラブが持ち回りで担当することになった。

昭和46年には江別市で初めての全道都市対抗大会兼全国予選大会が飛鳥山市営コートで開催され、地元の利か、優勝することができた。

団体戦で青年、成年、壮年、教員、女子の5組でのチーム編成であった。

対外試合については、道民スポーツ石狩夏季大会が管内持ち回りで開催され、現在も続いているが毎年江別連盟の大きな事業として、毎年好成績を上げている。

江別連盟が大きく変貌を遂げるのは、はまなす国体テニス競技開催のため道立野幌総合運動公園にテニスコートが18面造成されたことである。

道内で1個所に18面揃っているのはほとんど無く、全道、全国大会が開催されるようになり、当連盟が主管した大会も数回に及ぶことになる。

特に平成2年に北海道で始めて開催された全国小学生ソフトテニス大会は、江別連盟・北海道連盟が始めて経験した大会のため、非常に苦勞した思い出があります。

前年の開催地から色々資料を取り寄せて参考にして取り組みを行った。

この大会は毎年夏休みに行われており出場選手の父母がたくさん来道し、宿泊が定山溪の旅館しかとれず、父母から遠いと苦情を言われたりしましたが、帰りにまた北海道でやってくださいと言われ

た時は苦勞が報われたような気がした。

色々苦勞があったが、はまなす国体が終了したすぐ後のため、施設、進行等のノウハウを活かすことができたのが成功につながったと思います。

その後、現在まで全国小学生大会が道内で2度開催されていることは夏の北海道での大会開催は全国から期待されているようです。

その後、野幌総合運動公園では、全日本社会人大会等が開催され、更に今年はソフトテニス最高峰の天皇杯・皇后杯全日本総合選手権大会が開催されるなど連盟にとって忙しい年となっている。

《現 況》

現在連盟には、一般クラブとして、大麻、江友、野幌、グリーン、Uース、王子製紙、江別市役所の7団体が加盟して、会員数は約150名となっている。

また、少年団として、江別、大麻少年団がそれぞれ活動している。

全盛期には高校も含めると1000名以上の会員を擁していたこともあったが、昭和50年代後半から減少傾向となっており、こらは全道、全国的な傾向であり、

ソフトテニスの将来が心配されているところだ。

日本ソフトテニス連盟では、将来はオリンピック種目にもと考え、国際化に乗り出し、現在では世界30カ国でソフトテニスを楽しむようになってきている。

この、国際化に対応するため平成6年、名称を[軟式テニス]から[ソフトテニス]へと変え、競技規則も大幅に変更した。

従来は後衛、前衛と役割が決まっており、例えばサービスは後衛のみだったものが、改正後では交代でサービスを行うなど、前衛、後衛の区別をなくし、外国人に馴染んでいる硬式テニスに、より近づいた形と言えます。

新ルール(国際競技規則)と旧ルール(日本競技規則)の2本立てですが、現在は新ルールがすっかり定着して、殆どが新ルールで競技が行われています。

道内の小学校、中学校には結構優秀な選手が多く小学生、中学生の全国大会においては、毎年好成績を上げております。

現在、当連盟では、毎年春季加盟団体戦を皮切りにインドア大会を含め年間15ほどの大会と審判等講習会を、また、成年、シニア(女子)の全道インドア大会を開催している。



昭和49年 道民スポーツ石狩夏季大会

《今後の展望》

現在、日本のソフトテニス人口は、(日本ソフトテニス連盟登録者) 数十万人といわれております。

ソフトテニスの長所は、高齢者も十分楽しむことが出来ることで、現に連盟の大会でも70歳以上の部を設けている。

現在、道立総合運動公園に18面のテニスコートがあるためか、市内の公設コートの数、整備状態は良好とは言えない。

市内大会、各クラブの練習や道民スポーツ大会などの運営のためにもぜひとも6~8面のクレー又は人工芝のコートの整備が望まれる。

整備されたコートなど環境が整うことによって、愛好者も増え練習にも力が入り、優秀な選手も輩出してくる。

日本ソフトテニス連盟は平成11年度から会員登録制度をスタートさせました。

この会員登録制度はソフトテニスの一層の普及発展を目指すため、会員組織を確立し、会員およびその所属団体の把握

を明確にすることにより、普及活動の基盤として役立たせるとともに、各組織の健全な財政に寄与させるために実施され、初年度としては45万人の登録がされています。

ジュニア層から社会人層までが共有できる指導者システムを構築してレベルの高い選手を養成する一方生涯スポーツとしての年齢層に対する普及を促進することを重点目標として取り組んでいます。

江別連盟に関しては、女子会員は、全道大会でもそこそこの成績を上げているが、男子にあっては特に若年層が少なく、高校や大学でソフトテニスをやってきても社会人になると職場等の関係で、ソフトテニスと縁が切れてしまうことが多いようです。

江別ソフトテニス連盟も、今年50周年を迎えました。

楽しいソフトテニス、生涯スポーツとしてのソフトテニスを合い言葉にその普及振興を図ることを重点として今後とも取り組んでいきたい。



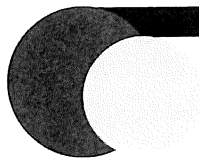
平成12年 北海道選手権大会開会式 野幌総合運動公園コート



平成元年 道民スポーツ石狩夏季大会 当別町



平成元年 40周年記念大会入賞者 飛鳥山公園コート



江別ソフトボール協会

設 立 昭和59年11月24日
加 盟 昭和60年 5月24日

《現 役 員》

顧	問	森 田 芳 雄
会	長	池 田 春 男
副	会 長	萩 原 健
理	事 長	月 田 孝 一
副	理 事 長	三 上 孝
	〃	五十嵐 明 彦
	〃	青 沼 茂 子
	〃	富士原 孝 治
理	事	斉 藤 真由子
	〃	寺 下 富 子
	〃	尾 野 美保子
	〃	小 濱 美 和
	〃	前 田 彰
	〃	金 田 満喜雄
	〃	磯 野 薫
監	事	萩 生 容 子
	〃	福 田 良 子
事 務 局 長		月 田 孝 一
次	長	梶 原 絹 子

《沿 革》

江別ソフトボール協会の設立は、昭和59年11月24日であります。

設立当時は、昭和60年当市での道民スポーツ大会の開催や昭和62年全国高校総体及び平成元年第44回国民体育大会（はまなす国体）の一部開催が予定される同じく石狩管内ソフトボール協会、市教委等から体協を通じて要請があり当時活動していた男子のクラブチーム、家庭婦人連盟及び職場を訪問して理解と協力を得て協会を発足致しました。

設立当時は7チームで翌年は20チームに増えました。

結成時の役員

会 長	森田 芳雄
副 会 長	遠藤 晃彦
理 事 長	池田 春男
副理事長	三上 孝
	月田 孝一
	高橋 省一
監 事	小野寺邦男
	土井 真弓
事務局長	大野 聡
次 長	梅田 信子

運営の方針として

1. ソフトボール人口の拡大、市民の心身の健全な発展、体力の向上と親睦を図る。
2. 試合運営など活動の円滑化及び技術の向上を図る。
3. 審判員の育成を図る。
4. 既存組織の運営活動方針を当面

尊重する。

運営の基本を基に活動の初期には、ユニホームのあり方、怪我の場合の保険加入問題、ルール上のヘルメット着用義務等の問題もあったが親睦を主に次の大会、『会長杯』『市長杯』『市民大会』『アスカ杯』『中野杯』『啓盛自動車学校杯』『火災予防ママさん杯』等の大会後援と支援があり幅広い活動の場が有って登録チームは一時23チーム選手は約370名で活動していました。

登録チーム名（昭和59年～平成11年）

○レッドキラーズ・ギャルファイターズ・あけぼのフレンズ○ビックスネイル
○対雁ソフト（フレンズ）・江友ナイン・大麻カトレア9・大麻迷球会（迷球会ピンクパンサーズ）・ニチイ協友店会・北電江別発電所・理容クラブ・江別市消防署（ICBM）・安全地帯・江別郵便局OB（江郵会）・ペンギンズ（ブラックジョーク）・若葉ヤルキーズ・啓盛自動車学校・ヘルスターズ・オールランドプレーヤーズ・グランドパチンコ・消防学校ファイヤーズ○江別農協ソフト部（JA江別市）・チャレンジャーズ・3.7ファイターズ・野幌ナイン・協友ベアーズ・ヤングシケンファイターズ・ファンブラーズ・ブルースカイ○江別第一中学校○江別第二中学校○江別第三中学校○江陽中学校・大麻東中学校○中央中学校（○印は11年度分）

事業の主なもの

昭和59年 江別市体育協会へ加盟申請書提出
広報誌『ついしかり』チーム募集掲載依頼
60年 石狩管内ソフトボール部協会加盟申請書提出

61年 第3種公認審判員認定講習会参加
62年 市教育委員会へ『ソフトボール専用球場の新設を願う』要望書提出
平成元年 第44はまなす国体聖火リレーに哨員3名派遣
3年 市史編纂事業に伴う資料提出
4年 北海道学習情報システム事業に伴う団体登録
5年 江別連合青年主催マラソンソフトボール大会模範試合
6年 愛別町開基100年記念雪中ソフトボール大会参加
当協会創立10周年記念式典・祝賀会開催
7年 第33回北海道障害者スポーツ大会視察（稚内市）
8年 当市で第34回北海道障害者スポーツ大会 主管
北広島市制記念ソフトボール大会家庭婦人選抜参加
9年 ゆうあいピック北海道選手団強化合宿協力
10年 98年度日本リーグ北海道大会会場係派遣石狩市

《現 況》

近年は社会構造の変革、企業での雇用情勢の変化、女性パートの拡大またスポーツ競技の多様化等によりソフトボール人口の減少、既設チームの高齢化など、特に男子チームでの早朝試合は勤務に影響がでるため中止になるなどしてチーム自体が自然消滅してしまった。現在は家庭婦人、一般女子及び中学女子の9チームで活動中であります。

新たに、『杜の美江別自動車学校杯』『江別女子選手権大会』等も新設され創意

工夫で現状を乗り越えたいと頑張っています。

一方、公認審判、公認指導者の育成特に中学女子を対象にジュニア選手育成強化のため講習会を例年開催し指導の成果が現れている。

家庭婦人の試合方法は、幼児も一緒に参加するために保母さん役の人が居ないとお母さんはゲーム中子供に気がとられ真剣に試合をすることが出来ない事もあるが、皆さん楽しくプレイにハッスルしています。

J A江別市チームは、全道農協大会で優勝するなど活躍中であり、また、国体に選手を派遣しています。一方、とわの森三愛高校は、全国大会の常連校として当協会はもとより全道のリーダー的存在です。

道民スポーツ大会過去の実績は、一般男子、壮年男子は3位、一般女子は準優勝が最高で優勝を目指して努力しているところです。

公認審判員は、協会主催及び共催大会はもとより市内中体連、農協大会、連合青年大会、福祉施設関係大会、石狩管内大会等の各種大会に参加していますが審判員の人数が少ないため管内の協力を受けているのが現状です。

平成11年度大会結果

6月 第5回夏季大会

優 勝 フレンド

準優勝 レッドキラーズ

第54回国体石狩管内大会

優 勝 石狩クラブ

準優勝 千歳自衛隊

7月 第15回会長杯

優 勝 フレンド

準優勝 レッドキラーズ

第7回杜の美江別自動車学校杯

優 勝 フレンド

準優勝 ビックスネイル

第46回J Y市民大会兼技術講習会

優 勝 中央中学校

準優勝 第二中学校

8月 第46回市民大会兼第17回市長杯

優 勝 フレンド

準優勝 レッドキラーズ

9月 江別女子選手権予選家婦の部

優 勝 フレンド

準優勝 レッドキラーズ

第7回江別女子選手権大会

優 勝 フレンド

準優勝 酪農大学OLIVES

2月 2000年マシュマロンピック雪中ソフトボール大会

一般の部

優 勝 タカギバンディズ

準優勝 ハッチャキ野球同好会

J Yの部

優 勝 東大麻グランドキングス

準優勝 中央中学校

《今後の展望》

当面の課題は、いかにしてチームを増やすか苦慮していますが、平成9年からマシュマロンピック雪中ソフトボール大会を開催するなどしてアピールしています。また、照明設備ある球場が出来れば、仕事を終えたサラリーマンが勤務に影響なく試合を楽しくすることの出来る場を造る必要があると考えています。

今、21世紀を迎え様としているとき生活水準の向上による余暇時間の増加、健康への関心、高齢者社会に向けて明るい社会造りを進めるためにも広く老若男女が楽しめる場をソフトボールを通じて努

力していかなければならないと考えています。

家庭婦人チームの試合

- ・暑さも吹き飛ばし白熱した試合
- ・三振前の大ファール その後？



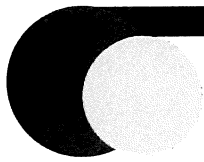
男子チームの試合

- ・あの頃が懐かしい
- ・早くナイター設備がほしいな…

雪中ソフトボール大会

- ・赤いボールを使用して10人でプレイ
- ・雪に埋まったボールを捜すのが大変
- ・守備、走塁には、走る時雪に足がとられて思うように走れない
- ・寒さも忘れてハッスルプレイ





江 別 卓 球 連 盟

設 立
加 盟

昭 和 2 5 年 4 月 (愛好者団体として活動)
昭 和 2 5 年 4 月 2 6 日

《現 役 員》

顧 問	小 林 一 男
〃	政 田 政 一
会 長	田 辺 昭 雄
副 会 長	佐 古 利 男
〃	服 部 實
〃	橋 本 茂 昭
理 事 長	吉 川 敬 造
副 理 事 長	太 田 英 一
〃	高 橋 正 生
事 務 局 長	福 士 登志緒
事 務 局 次 長	高 橋 孝 也
常 任 理 事	多 田 東 一
〃	敦 賀 保 恵
〃	安 田 敏 昭
〃	高 橋 登貴子
〃	大 朝 暁 子
〃	奈 良 貴 宏
会 監	山 崎 和 憲
計 査	佐 藤 正 一
〃	福 原 繁

《沿 革》

江別卓球連盟は、前身として昭和25年4月、市内の愛好者により結成され、年に1～2度の大会を行っていたが組織的にも継承するに至らなかった。

その後、卓球競技の発展と組織の確立のため、江高卓球部顧問の小沢、道職員の政田、王子製袋の服部、市役所の吉川らが中心となり昭和37年5月、会長を当時の市会議員小林一男にお願いして市内の事業所や学校などの賛同を得、正式に発足を見た。

昭和42年5月さらなる拡充のため北海道卓球連盟に加盟、札幌支部から独立をし江別支部として認可される。

昭和44年11月公認審判員として3名が取得し、審判団のスタートを切った。

昭和47年4月、初の全道軟式選手権大会の開催運営を行う。

同年5月に大麻卓球クラブ結成。

昭和50年4月、野幌卓球クラブ結成。これら前後して江別、大麻、野幌各地区に三つの卓球スポーツ少年団が結成される。

また、50年代に入ると太田、東野や江高女子高体連ダブルスなど全国大会への出場に加え上位入賞の実績は後の全国大会出場へ大きな契機となる。

昭和58年4月、第二代会長に神田昭雄(当時美原小校長)が就任。

昭和59年9月、神田会長が急逝されたため佐古利男副会長が会長代行となる。

昭和62年1月、江別卓球連盟25年記念

誌「白球とともに」を発刊す。

同年4月、第3代会長に田辺昭雄（市議会議員）が就任。

平成元年8月、はまなす国体卓球競技大会（美唄市）審判員として福士ほか7名を派遣。

平成4年5月、江別卓球連盟「創立30周年記念祝賀会」開催。2協賛社、10名の功労者を表彰。

平成7年8月、第27回道民スポーツ石狩大会で三種目制覇、完全優勝飾る。

平成8年7月、第34回北海道障害者スポーツ大会卓球競技を成功裡に運営。

《活動の歩み》

当市の卓球人口は、連盟として27団体のほか個人と合せて700人、このほか体育館やサークルなどの愛好者を含めると約1,000人のプレーヤーがいると押さえている。

この様な成長を見るに至ったのは前述「沿革」でその概略を記したが今一度ふり返って見ることにする。

江別の卓球史を語る時、忘れてはならないのは、王子製紙(株)体育部の方々の存在であろう。戦前からと思うが、知り得る戦後について触れて見る。当時企業と言えは北電と王子（当時北日本）で、特に王子製紙は全てにおいて職場の花であり憧れの的であった。

卓球で言えば、二門の向いの休憩所（？）や独身者の清江寮の食卓兼ピンポン台で青年男女が白球に汗している姿が思い浮かぶが、これに限らず当時の野球、バレーボール、軟庭、柔剣弓道など、江別スポーツ界の先駆者であり又戦後の混沌とした世相の中で青少年の健全育成に与えた影響は非常に大きいものがあったと言えよう。

さて江別の卓球史上、高校OBの存在も欠かせない。昭和30年代に入り三中卓球部卒業生は、江高に佐々木、札工に輪島、光星高に尾田、翌年には江高に中橋の各選手が進み、いずれも主将となりクラブの発展に努めた。高校卒業後は、各々進まれるが、地元中高生への強化練習や初の市民大会を開催するなど競技発展に若き情熱を注がれた。

なかでも中橋は専修大学の正マネージャーとなり本場のトレーニングや技術を夏冬休みには必ず帰省し母校、江高後輩に直伝され、その功あって当時から札幌地区で常に上位を占め個人のほか全道大会出場など暫く続くこととなる。

一方この頃、当卓球連盟創設に功労のあった政田（道職員、現顧問）は卓球のほかスキー、スケートの競技にも名を馳せた人だが、特に市内の中高生の技術向上に卓越した指導力で当たられ、その後も陰に陽に当連盟の功労者として業績大である（道立スポーツセンター館長を歴任）。

さて、この様なリーダーの元、昭和37年に「江別卓球連盟」が正式発足を見た。当時会場と言えは、江小、三小の屋体しかなく、しかも卓球台も少なく大会毎にオート三輪で運ぶなど地道な運営が思い出される。その後、中央公民館の講堂（二小体育館移設）が設置されてからは、常に6台の卓球台があり狭くも常宿として卓球ファンが溢れていたものである。昭和42年、北海道卓球連盟の江別支部となり直接、全道大会への出場権を与えられるや、その年の社会人全道大会「女子の部」で戸蒔選手が3位に入賞、全国大会の出場を果たしたのである。その頃、日体協は東京オリンピックを機に底辺拡大を掲げ「スポーツ少年団」の育成が叫ばれ、当連盟も相まって昭和44年「江別

卓球SP少年団」が結成、その後は、今も活躍中の大麻、野幌SP少年団も結成を見、その育ての親である佐古、橋本氏は今でも全道や地元の少年団本部のリーダーとして活躍中である。一方努力のかいあり後の全道学生チャンピオン寺崎選手の輩出や、野幌少年団などは全道少年大会で団体個人とも1～3位の入賞独占する等の実績は輝かしいものがある。

また当連盟の伝統的な事業のひとつとして技術講習会が挙げられるが、先に述べた専修大学生No.1の招へいのほか役員各位の人脈の故をもって昭和55年には、二代会長の子女、神田恵美子選手（全日本1位）、昭和60年中国の羅武漢選手（世界No.1）、同年、日卓強化委員長、道上進氏、昭和61年からは数回に亘り、協和発酵(株)チーム（全日本No.1）等、これら有名選手チームの招へいを次々に展開してきている。

次に審判員養成について触れよう。昭和44年、常務理事だった服部、津島、吉川が初めての公認審判員取得がきっかけとなり現在80名に及ぶ審判団を有し、特に平成3年には福士、高橋（登）が二級を取得し現在は安田、富田の審判部によるルールの厳正が図られている。

さて組織を維持し充実させるには傘下の団体の力も不可欠である。その要となっているのは市役所卓球部、野幌クラブ、大麻クラブ、スカイ、サンダーズ、卓正

会、江卓会等の団体のほか女子役員の大朝らやアドバイス役の道卓の本吉氏の功績は大なるものがある。

《現況と今後の展望》

当連盟は、あと2年で40周年を迎えるが、その愛すべき当連盟のプロフィールを紹介する。メンバーは前述のとおりであるが、大会等の数は大小約20ほどあり月2回行うこともあるが、これだけ事業を消化をするには大変なことでもある。その対策として持ち廻りとしている事や、有りがたいことに当役員や審判団には女性が多く特に日程の確保や気配りが功を奏しており、全道大会開催の受入も容易になった由縁と感謝している。

一方、チームワーク宜しきは、スポーツ好きの会長、ボランティア精神旺盛な副会長諸氏の人柄によるところ大である。少し歴代の会長にふれて見よう。初代の小林一男会長は大会後の会場清掃に自らホーキを持たれた姿を思い出す。二代目の神田会長（S59怪我で急逝）は挨拶には必ず日本卓球界の話題を話し、迎える“はまなす国体”の役員を誇りにしていたものだ。三代目の現在の田辺会長は柔道、ゴルフ、卓球とスポーツマンで多忙の中にも大会欠席はまれである。

次に管理運営の要である事務局であるが、吉川から太田この時に基礎づくりとなる。その後、東野に移るが25年誌の編集は連盟唯一の著書である。次に引継いだのは現在の福士・高橋（孝）、会計の山崎は、名コンビで組み合わせから庶務、会計と適確で、また大会業務にあつては高橋（正）や多田の存在も欠かせない。また卓球を離れても、祝反省会やはたまた山菜採りのアウトドアなどなど、幅広く親睦を深めているのもユニークなこと



創立30周年に作った記念テレホンカード

と自負している。そして我が卓連よ永遠になれとは余りにも楽天的であろうか。次に今後のこと等に触れて見よう。

卓球大国と言われて久しいが、昭和20～30代の日本の活躍は目ざましく、日本人に最も適したスポーツで、この牙城は盤石だと評されたのも懐かしい。

また、ラケットはラバーからスポンジラバーとその変遷は今も続いている。今は見ても楽しい卓球にと力を入れている。例えばユニホームを見ると、昔のシャツの色は、黒青緑赤茶の5色のみが、今は白ありサイケ調の柄ありで、暗いイメージはどこ吹く風である。白ボールにあって、今はオレンジ色が主流となっている。大きさも、レクリエーション普及用として“ラージボールの42mm”と、今年末には従来のボールに2mm大きく40mmボールになることが決められている。この様に目まぐるしく変わるルールにも、即対応しファンに周知することも役目である。さて、日本のスポーツは過去、特定の競技者以外は見るスポーツとされていたが今や自らが行う“生涯スポーツ”の時代と言われるようになり、我々スポーツ関係者として有りがたく良き時代の到来と喜んでいる。しかしスポーツは青少年の健全育成にこれまでも一役を担ってきているが、昨今の青少年の問題行動には目に余る事が多いのは誠に残念極まりないことである。物がなく、自然を駆けめぐり、少ないスポーツに興じた頃は懐かしく思う。いやこれからもスポーツの普及に改めて皆で考えて見よう。

話しを卓球に戻すことにする。もう20年もうろうか、某タレントが“根暗の卓球”と発言し、小中高生の入部が激減し、困惑したが、一方“愛ちゃん”の登場や“温泉卓球”の復活や街では卓球場でピンポンブームである。厚底グツで足を挫か

ねばと思う今日この頃である。

“卓球”ひとつ言えることは、誰でも、幾つになっても出来、最近では、ボケ防止になるとも言われている。またまた、我田引水になってきた。

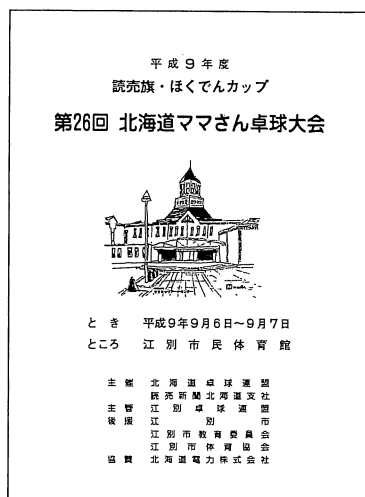
さて思うままに書いたが、脱漏した事績や先輩各位があれば、この失礼をお許し願いたい。

終りに私どもが加盟している江別市体育協会が、創立50周年を迎えたこと我がことのように感じている。なぜなら構成員としては勿論のこと、これまで、協会の役員として、理事長、事務局長、今は副会長、スポ少本部長と、その要職に参画してきたことであり、その慶びはひとしおである。

最後に傘下24団体の皆様とともに今後も協会の益々の発展を祈念し寄稿のことはとする。



全道大会懇親会で踊りを披露するレディース役員の面々



全道ママさん大会のプログラム

江別テニス協会

設 立 昭和54年 1月27日
加 盟 昭和54年12月18日

《現 役 員》

顧 問	伊 藤 豪
名 譽 会 長	山 畠 正 男
会 長	小 泉 忠 行
副 会 長	横 田 博
理 事	遠 藤 毅
理	鈴 木 潤 治
〃	鶴 羽 曜 子
〃	徳 本 陽 子
〃	野 英 二
〃	下 田 直 樹
〃	杉 本 孝 子
〃	鶴 羽 節 雄
〃	田 中 悦 子
〃	半 田 睦 美
〃	阿 部 紀 彦
〃	安 田 幸 子
〃	石 崎 和 枝
〃	岩 倉 清 乃
〃	水 島 久 美
〃	中 山 公 美 子
〃	佐々木 勝 也
〃	太 田 日 出 子
〃	杉 尾 乃 里 子
〃	阿 部 か おり
〃	林 邦 生
〃	宮 地 比 佐 子
〃	鷺 田 真 澄
〃	大 沢 晶 子
監 事	小 林 資 郎
〃	太 田 和 宏

《沿 革》

昭和53年12月に10名からなる設立準備会を経て、翌54年1月27日に大麻公民館において設立総会により、正式に江別庭球協会が産声を上げた。江別市体育協会への加入は同月30日に加盟申請し、12月28日の常任理事会で承認された。設立当初は「大麻テニスクラブ男子」「大麻テニスクラブ女子」「江別テニスクラブ」「王子製紙テニスクラブ」「酪農学園大学クラブ」「札幌商科大学テニスクラブ」「アップルクラブ」の7団体・会員総数251名のスタートであった。

大会の開催は、54年3月の結成記念大会を皮切りに初年度から加盟団体戦、選手権大会、室内選手権大会を、55年度からは会長杯大会、ミックスダブルス大会、市民大会を行ってきており、56年には旭川で開かれた第32回都市対抗戦に初参加する他、岩見沢市、広島町（現北広島市）との第1回三都市親善大会（58年に恵庭市が加わり四都市となった）をあすか山コートで開催する等、順調な運営を行ってきたところである。

設立当初の大会結果や写真を紐解くと、大麻クラブの会員に宇宙飛行士毛利衛さんの成績と顔が残っているのが、今では大変貴重な記録となっている。毛利さんは当時大麻から北大に通勤されており、その抜群のテニスセンスで大麻クラブはもとより、協会にとっても、貴重な戦力で、市内大会で優勝している他、都市対抗の代表選手になるなど各種の大会で大

活躍されている。平成元年に協会設立10周年を記念して発行した記念誌には、N A S Aにあってもラケットは必需品になっているなど当時の思い出を含めて寄稿されている。



S56年5月第32回都市対抗（旭川）前列右が毛利 衛さん

《活動の歩み》

協会主催の市内大会は、会長杯、ミックスダブルス、市民大会、選手権シングルス、同ダブルス、ベテランの各大会は屋外（野幌総合運動公園コート）で、冬期対抗戦と室内選手権は屋内（野幌運動公園アリーナ及び市民体育館）で毎年開催している。

各大会は、それぞれ開催1週間前ドロー会議において組み合わせや運営方法が理事会によって決定されるが、当日の進行は加盟団体の当番制に任されているのが、特徴といえよう。

当番クラブ員は、当日の会場準備に始まり受付、会計、アナウンス、記録、表彰、後かたづけまでの一切を受け持つことになっているが、これといったトラブルは生じたことがない。

このほか、ミックスダブルス大会では試合終了後に森林公園キャンプ場でジンギスカン鍋を囲んで懇親会が催されており、参加者も100名は下らないのが通例である。

このように、技術の向上を目的とした大会もさることながら、会員相互の和気あいあいとした雰囲気が江別テニス協会の最大の特徴と言える。

また、都市対抗大会では、平成9年に晴れの一部昇格を果たしており、今後の成績によっては全国大会出場も可能な位置を占めるまでになり、名実ともに道内テニス界のトップクラスと肩並べる地位を占めるようになったといえよう。



平7年7月第16回ミックスダブルス大会後の懇親会

こういった会員の努力と協力の下で、昨年は協会設立20周年を迎え、10周年に引き続いて記念誌の発行と6月には記念大会（任意のメンバーによる団体対抗戦）の実施及び市民会館において池永体協会長と齊藤教育長をはじめ関係団体の来賓をお招きしての記念祝賀会を開催し、いずれも大盛況の内に終了したことは記憶に新しい。

江別市テニス協会創立20周年記念祝賀会



平11年6月創立20周年記念祝賀会で都市対抗出場メンバー（市民会館）

また、昨年は長年に亘り協会の理事として、テニス協会の発展と市民スポーツの振興に貢献されてきた北野幸子さん（大麻ローンクラブ）が体協から「江別市体育協会功労賞」を受賞し、ベテラン大会の開会式において多数の参加者の前で池永理事長より表彰状を受けられたのはご本人はもちろん協会全体にとっても大変嬉しいことであった。

《現 況》

現在、加盟団体数は20、会員数は700人を超える大所帯になった。

また、会員の中に酪農大、札幌学院大、北海道情報大の学生が加盟し、一般、壮年クラスと和気あいあいと対戦していることも他の競技と異なる特徴ではないだろうか。

各市内大会の参加者は、毎回200名近くにのぼり野幌総合運動公園のコート18面

全てを使っても、夕方ぎりぎりまで時間がかかることがある。

大会によっては、早朝1時間延長することもしばしばあるほどである。

また、大会毎に会場で抽選会やA級選手のコーチによる技術講習会を行うなど、会員相互の親睦やレベル・アップを図る催しがあり、単なる試合のみの大会に終わらず、運営に工夫を凝らしているのも特徴となっている。

また、都市対抗大会の全国大会へのキップに手が届くのも、近い将来に必ず実現するであろう。

《今後の展望》

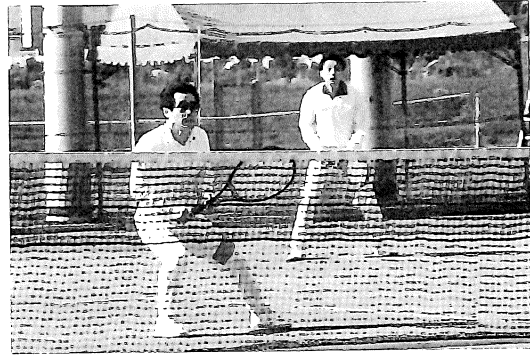
年々会員数が増えることに伴って、試合数の規模に合った会場の確保には一番悩んでいるところであり、現在は野幌総合運動公園の地元ということで、全道レベルの大会に混じって年間の開催枠を何とか確保させてもらっているが、市内ではこのほかに大規模なテニスコートがないため、ぜひともナイター施設のある市営テニスコートの建設を切望して止まない。

江別市を代表して出場する都市対抗の選手たちの練習会場が南幌町や長沼町にしか求められないのは、いささか寂しいことである。

大会の内容については、参加クラブ数の増加に伴って、今後は「加盟団体戦」の実施も検討されている。

もうひとつの悩みとしては、年会費及び大会参加費用を極力低く設定して学生や家庭婦人などが参加しやすくしていることもあり、協会自体の年間運営予算の確保に苦慮していることである。通例の事業等は何とか乗り切っているが、周年記念事業や都市対抗大会参加費用といっ

た特別な事業に対しては役員が寄付広告を集めたり、代表選手の個人負担に頼っているのが現状であり、市民スポーツの振興という側面を考えたとき、単純に会費値上げには結びつけられないだけに、今後も運営費の確保が引き続いての検討課題となろう。



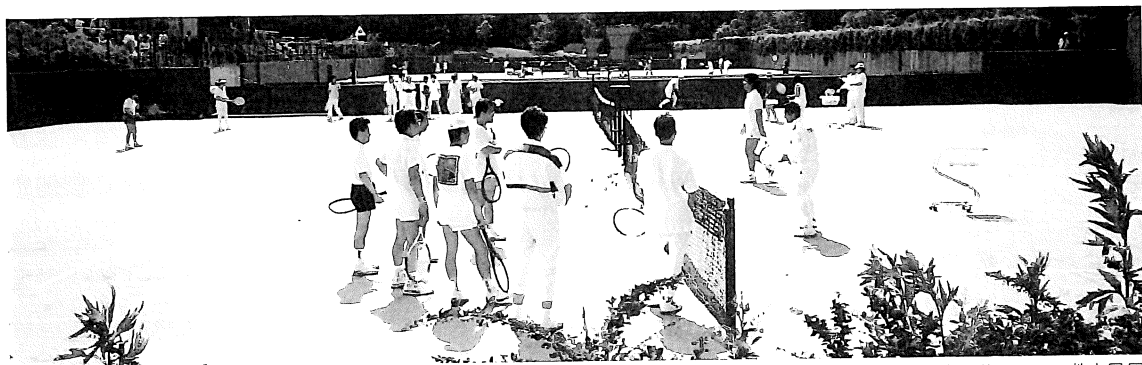
試合風景



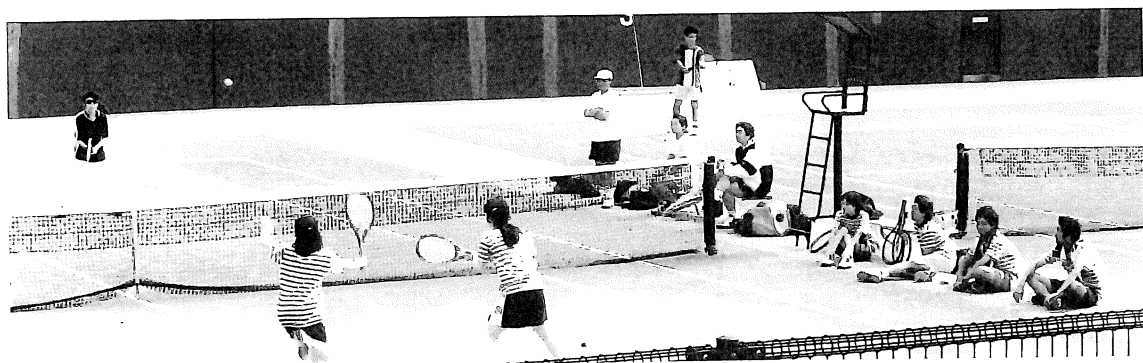
平11年10月北野幸子さん、池永会長から表彰を受ける。(運動公園)



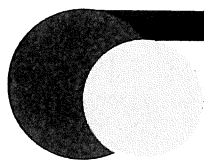
第1回ベテラン大会表彰式



平6年大会後のテニス教室風景



20周年記念大会



江別パークゴルフ協会

設 立 平成4年 4月30日
加 盟 平成7年11月22日

《現 役 員》

顧 問	富永 明	池川 時夫
理 事	佐藤 一郎	会 長 (緑)
〃	柳原 恒夫	副 会 長 (緑)
〃	佐々木 亨	〃 (大)
〃	土田 薫	常 任 (互)
〃	神 勝伸	〃 (と)
〃	吉泉 成男	〃 (な)
〃	丹 政清	事務局長 (互)
〃	竹原 正三	〃 次長 (緑)
〃	小椋 規	〃 担当 (大)
〃	河野 昭夫	〃 〃 (互)
〃	大田 重樹	〃 〃 (と)
〃	金子 金蔵	〃 〃 (な)
〃	稲童丸 聡	会計部長 (緑)
〃	森広 和雄	副〃 (大)
〃	榊原 貞之	担当 (大)
〃	千葉 勝男	〃 (互)
〃	佐藤美智子	〃 (緑)
〃	渡部 良治	指導部長 (緑)
〃	大西 安雄	副〃 (大)
〃	木村 弘治	担当 (大)
〃	伊藤 博昭	〃 (互)
〃	佐藤 巖	〃 (と)
〃	三宅 元	〃 (な)
〃	桜井ミチ子	〃 (緑)
監 事	中達 圭昭	会 計 (緑)
〃	木村 栄八	〃 (大)

上記役員所属団体名

(緑) は緑ヶ丘同好会・(大) 大麻同好会・(互) 互助会サークル・(と) とよほろパークゴルフクラブ・(な) ななかまどパークゴルフクラブ

《沿 革》

パークゴルフは、いつでも、だれでも、子供から高齢者の方まで男女を問わず、幅広い層に渡って、同じ条件の中でプレーを楽しむことのできる、コミュニティスポーツである事を基本として、1987年(昭和62年) 8月22日国際パークゴルフ協会が十勝の幕別町に誕生したニュースポーツであり、自然にやさしく・人にやさしく・ルールがやさしい事が大衆に認められ全国に普及し、更に、国外へも普及しており、2000年4月現在、道内愛好者約40万人と報道されており、その後さらに増加しております。

今年度、富山県で開催される国民体育大会では、デモ・スポーツとして参加をする事になっております。

江別パークゴルフ協会は1991年(平成3年) 当協会現顧問の富永明氏が、市内緑ヶ丘14番地の緑地公園予定地所有者5名と、公園工事にかかるまでパークゴルフ場としての借用をお願いし承諾を得、翌1992年(平成4年) 4月に愛好者数名にて9ホールのパークゴルフ場を造り、4月30日には設立総会を開催し協会が誕生した。その後、国際パークゴルフ協会への加盟・江別体育協会への加盟となり現在までの経過は下記の通りです。

1992(平成4年) 4月 協会設立

1992(平成4年) 6月8日 国際パークゴルフ協会に加盟となる。

1995(平成7年) 11月22日 江別市体育協会理事会で承認され加盟が決まる。

《活動の歩み》

協会発足後は、人生80年時代を迎えての、生涯学習の一端としてのコミュニティ活動、市民の健康増進と医療費の節減等に微力ではあるが尽力いたしたく、市民に対し広くPRをした所、市内各地区より愛好者が入会し、平成4年4月緑ヶ丘コースは協会管理のパークゴルフ場として、役員を始め会員一同にて、コースの整備・草狩り等維持管理に努力をし、平成8年9月には「道民スポーツ夏季石狩大会」の当番市として、管内9市町村対抗パークゴルフ大会が、このコースで開催され江別市チームが優勝した。その後、公園造成開始の平成9年8月まで、緑ヶ丘コースで協会活動をした。

この間、市関係機関へは専用コースの設置をお願いし、漸く平成8年に市内「あけぼの町」にコースの設置が決まり、平成9年6月のオープンと成り協会の活動も「あけぼのコース」にうつした。

一方、緑ヶ丘公園造成時公園内に周辺住民の利用できる、ミニコースの併設を地域の「しらかば自治会」を通し、市建設部公園課へお願いをし、造成計画に取込んで戴き、平成10年9月にオープンと成り、地域の方々に喜んで戴き利用者の会も出来、会員は平成11年10月現在36名と連絡を受けております。

又、パークゴルフと言うスポーツに理解を示して戴く、金融機関並びに商社団体より冠大会の実施申し入れが有り、平成7年より4団体主催の大会を毎年行い、会員相互の技術向上と親睦に寄与させて戴いております。

尚、「あけぼのコース」オープン年より、市長杯争奪大会翌年からは市民体育大会の中にパークゴルフ競技を取入れられ開催しております。この様な、協会活動に

より会員も増え続け、平成8年に大麻同好会が設立され、団体で加入したいとの申込みが出てきたので、平成10年4月より協会組織を変更し、従来の会員資格を個人会員から、会員30名程度の団体会員とし、毎月の平常活動は各団体単位で行い、協会は冠大会・市民大会等市内の団体全会員参加の行事を担当することに活動方法を分け、パークゴルフの基本が実現出来得る組織とした。

平成12年3月現在の加入団体は5団体であり、他に2団体から紹介がきている。

初代会長 富永 明 平成4年～7年

2代々 佐藤一郎 8年～現在

協会会員の推移

平成4年 23名

〳5年 59名

〳6年 77名

〳7年 90名

〳8年 99名

〳9年 228名 (緑ヶ丘127名)

(大 麻101名)

〳10年 233名 (緑ヶ丘122名)

(大 麻111名)

〳11年 320名 (緑ヶ丘132名)

(大 麻103名)

(互助会 50名)

(豊 幌 35名)

〳12年 400名 (予想)

《現 況》

会員増加に伴い、ニュースポーツ・パークゴルフの発祥精神を基本として健康で・明るく・楽しく・ルールがやさしいコミュニティスポーツの普及により市民の皆様が、健康で楽しい生活を送れる様サポートをする事に、協会役員一同が心掛け活動しております。

又、平成10年には国際パークゴルフ協

会加盟団体の増加にともない、組織の見直しがあり、全道14支庁管内と、札幌市に支部を置く事になり（本州は各県単位）9年12月に石狩支部が設立され、当協会が支部担当協会となり、石狩支部管内のパークゴルフ愛好者の加入促進と技術指導も行う事になった。

江別パークゴルフ協会加盟団体名

1. 緑ヶ丘パークゴルフ同好会
2. 大麻パークゴルフ同好会
3. 互助会パークゴルフクラブ
4. とよほろパークゴルフクラブ
5. ななかまどパークゴルフクラブ

協会事業

I. 各種大会

- | | |
|-----------------|------|
| 1. 石狩中央しんきん杯 | 6月 |
| 2. 道新知事杯予選会 | 6ヶ月 |
| 3. 江別協会会長杯 | 7ヶ月 |
| 4. 江別建設業協会会長杯 | 8ヶ月 |
| 5. かんば健康増進大会 | 8ヶ月 |
| 6. 道民スポーツ夏季石狩大会 | 8ヶ月 |
| 7. 江別市市長杯 | 9ヶ月 |
| 8. 江別市民体育大会 | 9ヶ月 |
| 9. 道新ユベオツ杯 | 10ヶ月 |

II. ルール・マナー講習会

1. 公認指導員並びにアドバイザー研修会 年 数回
2. 公認指導員並びにアドバイザー認定講習会 年 1回
3. 各団体新入会員講習会年 数回

III. 協会内指導者人数

公認指導員	10名
アドバイザー	49ヶ月
計	59ヶ月

《今後の展望》

1997年（昭和62年）からのニューススポーツであり、本年度で13年目を迎え、予想を超える普及人口であり、更にパークゴルフ人口が増えてくると、越えなければならないハードルも数多くあり、その一つである三世代のスポーツとなると、現在の愛好者は高齢者が多いので、これからは若年層の開拓が必要であり、一般のサラリーマン及び婦人層にも働きかけようと考えておりますが、愛好者が増えますと、プレーするコースが少なく、当市には専用コースは「あけぼのコース」より無く、2～3年前からコースの増設を市関係機関にお願いをしているが、早急に実現して戴きたい。

全市民が休日を3世代でのコミュニティスポーツで楽しみ、健康で明るい街作りに、江別パークゴルフ協会として、寄与したいと考えております。

《協会年表》

1. 1991年 平成3年8月
江別パークゴルフ同好会創設
（富永明・富永静子・池川時夫・斉藤忠・萩野邦男・天野キサ・小林澄子さんの7名で創設）
2. 1992年 平成4年4月17日
市内緑ヶ丘緑地公園予定地へパークゴルフコース造成
（国際パークゴルフ協会札幌支部長故平塚治郎氏の指導により）
3. 1992年 平成4年4月30日
江別パークゴルフ協会設立総会
（国際パークゴルフ協会への加盟議決され申請することになる）
4. 1992年 平成4年6月8日
国際パークゴルフ協会加盟承認され

る（承認番号第79号）

5. 1995年 平成7年9月4日
第1回石狩中央信金杯実施
同信金江別白樺通り小坂支店長（現理事本店長）のご好意により始まり毎年実施している。
6. 1995年 平成7年10月9日
第1回道新藤井販売店杯実施
道新藤井販売店社長のご好意により始まり毎年実施している。
7. 1995年 平成7年11月22日
江別市体育協会の才3回理事会で承認され加盟が決まる。
8. 1996年 平成8年9月8日
第28回道民スポーツ石狩夏季大会は江別市が当番市なので、市体育協会からの要請を受け、パークゴルフ競技を緑ヶ丘コースで行い、管内9市町村対抗で当協会チームが優勝した（協会役員にて大会運営をした）。
9. 1996年 平成8年9月18日
第1回かんば健康増進大会実施
市内若葉町野幌若葉郵便局の岩上局長のご好意により始まり毎年実施している。
10. 1997年 平成9年4月13日
第6回当協会の総会で昨年より入会希望があった大麻同好会の入会が議決された。
11. 1997年 平成9年6月1日
市内あけぼの町に「あけぼのパークゴルフ専用コース」オープンする。
12. 1997年 平成9年8月25日
緑ヶ丘コースは公園工事が始まり使用終了。
13. 1997年 平成9年9月14日
第1回江別市長杯パークゴルフ大会を行い以後毎年実施している。
14. 1998年 平成10年3月15日
緑ヶ丘同好会設立総会

（協会規約の会員資格変更により旧個人会員での構成する会）

15. 1998年 平成10年3月15日
江別協会規約の改訂が議決される。
（会員資格変更により会員資格は江別市に本拠を置く30名程度の団体会員となり、役員も2同好会より選出された。）
16. 1998年 平成10年9月23日
江別市民体育大会にパークゴルフ競技が取入れられた。
17. 1999年 平成11年4月3日
江別協会総会で「互助会パークゴルフクラブ」と「とよほろパークゴルフクラブ」の2団体加盟承認される。
18. 1999年 平成11年8月10日
第1回江別建設業協会々長杯
江別建設業協会のご好意で実施
19. 2000年 平成12年4月2日
江別協会総会で「ななかまどパークゴルフクラブ」加盟承認される。



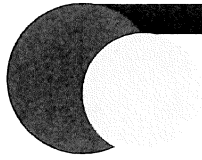
初代会長富永明氏



二代目佐藤一郎



1999.8.10江別建設業協会会長杯大会表彰式



江別バスケットボール協会

設 立
加 盟

昭和34年 頃
昭和46年 4月

《現 役 員》

会 長	池 永 和 親
副 会 長	渡 辺 登
〃	中 内 良 朗
〃	浅 野 善 迪
〃	内 村 邦 臣
〃	久 司 敏 夫
理 事 長	源 藤 均
競 技 委 員 長	三 浦 洋
同 副 委 員 長	西 田 昌 平
同 委 員	若 林 明
〃	廣 田 史 夫
〃	惣 蔵 靖 順
〃	鶴 卷 慎 也
〃	恩 田 貴 史
〃	川 端 貢 也
強 化 委 員 長	前 田 優 二
同 委 員	村 松 光 男
〃	斎 藤 雅 美
審 判 委 員 長	中 山 雅 裕
同 副 委 員 長	安 部 美 孝
同 委 員	北 本 健 二
〃	瀬 戸 智 規
〃	佐 藤 卓 也
事 務 局 長	濱 崎 利 彦
同 次 長	佐 野 祐 之
監 事	桑 原 幸 雄
〃	西 田 義 伸
中 学 生 部 会	8名
ミ ニ 部 会	5名

《沿 革》

半世紀ほど前、日本ではほとんどの男の子が初めにスポーツを体験したのが、父親とのキャッチボールではなかっただろうか。野球は、すっかり国民の娯楽のスポーツとなり、競技そして観戦と多くのファンが多い。

この社会的な流れの中にあっても、バスケットボールの魅力に取り付かれていた人も少なくはなかったようである。

学校でのクラブ活動を機に野球以外のスポーツ愛好者が増え、併せて市内でも青年センターや体育館などの基盤整備が進み、バレーボールやテニス、サッカー、バスケットボールと子供たちが校外でも気軽に体験することが出来るようになった。

バスケットボールの歴史は浅いが、衛星放送のおかげでアメリカNBAのスーパープレーを身近に見ることができるようになり、日本でもバスケットボール愛好者が急激に増えてきた。

“マイケル・ジョーダン”や“ダンクシュート”などの名前や言葉は、バスケット愛好者でなくても中・高校生であればほとんどの人が知っていると言っても良いだろう。

一般的にバスケットボールは、スピードと体力が必要とされ、かなりハードなスポーツであることから、手軽に取り入れられるものではないようであるが、近年では小学生による少年団（略称：ミニバス）の活動やストリートバスケットな

ど、体格や開催趣旨に合わせなじみ易いルールを作り新しい活動も行われている。



ミニバス全国大会出場記念（野幌レッドブリックス）

日本のバスケットボールは、まだ世界で通用するレベルとまでは行かないようであるが、ここ江別市からは国内でも強豪と言われる高校や大学に進み上を目指している者、更には実業団でも現在活躍中の選手も数多いのである。

《活動の歩み》

当協会では、一昨年に創立40周年の記念式典を挙行了したところであるが、設立当時から大きく役員も変わり、当時の記録もなく諸先輩方の話から、協会設立は昭和34年頃であるとしか分らない。

協会の設立経緯は確かではないが、当時、中学校の教員で当協会の初代会長である故倉島繁氏のバスケット好きが当協会を産んだと言っても過言ではないだろう。

（初代会長そして今）

倉島氏は、第三中学校の校長として江別市に関わり、以後、市教育長に就任、自らのバスケット好きから江別市のバスケットボールの普及、振興に傾注し、中学校のクラブ活動指導者の確保や活動機会の拡充などにも積極的に取り組み、江別市のバスケットボールの父とも言われる人物であり当協会の発展にご尽力さ

れた。

また、協会の運営にあたり倉島氏のサポート役を果たされた佐藤利雄氏についてもやはり当時一中の教員であり、市内中学校バスケット指導者による貢献度は相当高かったことが伺える。

昭和40年頃であるが、倉島氏と親交の深かった池永和親氏が協会長として、今日まで長期にわたり汗をかいていただいている。

池永氏は江別医師会々長として地域医療に寄与されている傍ら、学生の頃よりバスケットを愛好し、現在、北海道学生バスケットボール連盟会長、北海道バスケットボール協会副会長としての重責も担っている。

（観客ゼロ）

協会が設立した頃は、チーム数も僅かであったとのことである。

何せ記録が残っていないため協会活動は不明であるが、協会事務局は中学や高校の先生の協力により、当時江別高校にあったようである。

市役所でもチームが結成され、その記録によると市役所チームは昭和34年に創部し、当初“箆排部”としてバレーボール部が掛け持ちの状態であったそうだ。創部初年度の試合は、僅か市民体育大会の1試合だけに終わり、メンバー不足からその後冬眠状態に陥ってしまったそうである。当時の記録に開発局、酪農学園大学、角谷組のチームなどの名前が連ねられていた。

40年頃に入り、王子製紙（当時北日本製紙）、や北海網機などでもチームが結成され、活気付いたかのように見えたが、大会の出場チームは高校生を含め5～6チームほどしかなく、試合は学校の体育館を借りて行い、観客はほとんど“ゼロ”であったとの証言もある。

しかし、この頃から地域ではスポーツ少年団の活動が徐々に盛んになり、大麻地区でミニバスケットボールチームが結成され、数年後には、江別地区でも結成されますますます勢いを増すことになる。



S48頃の試合風景

(道民スポーツ石狩での活躍)

体育協会の30年史によると、第2回道民スポーツ石狩夏季大会が昭和44年に開かれたとの記録があるが、バスケットボールに関しては残念ながら定かではなく、私が、自チームを介して協会と関わり始めたのは、昭和50年代であった。



昭和53年道民スポーツ出場

その頃市内で行われる大会は年間約4大会ほどで、活動内容としては精一杯であったようである。しかし、毎年開催されている道民スポーツ石狩夏季大会には、市役所チームを中心に出場していたが、徐々に選抜チームを結成し、市内大会でいつも顔を合わせている者たちとの連合チームは、自分にとっても刺激的で新鮮

なものであった。

複数人で競技するスポーツと言うものは、バスケットボールに限らず仲間意識が強いもので、連合チームでありながらこれまでも目覚ましい成績を収めてきたところである。

“優勝”の2文字を合言葉に選手の意気込みも相当なものであった。

また、つい頭に乗ってしまい1回戦負けを喫し、会長から大目玉を食らったことも今思えば楽しい思い出である。

(活動と功績)

江別市のバスケットボール熱は更に高まりを見せており、これまでも輝かしい成績を残しているほか、今後の活躍が更に期待されるところである。

これまでも、各年代層において数多くのチームが全国出場を果たしている。古くには昭和33年に江別高校男子が初の全国出場を決め、数年後には女子が4回の全国出場を果たしているのである。この他私の記憶の範囲ではあるが、ミニバスでは、江別地区、野幌地区で活動する少年団が男女それぞれに全国出場しており、全国2位の成績も残している。中学の部では、大麻中学校を筆頭に第二中学校、野幌中学校などが出場し、高校では、とわの森三愛高校が出場経験を持つほか、最近では、大麻高校が3年連続出場と頭角を表しており、今後も有望な選手の入部とともに期待が高まるところである。一般のクラブチームでは、地元で活動する江別クラブがこれまでに8回全国出場し、内7年連続出場の輝かしい記録もある。

市内には、大学も多く集積しており、北海道女子短期大学（現浅井学園大学）についても、全国出場の常連校である。

この他にも高成績を持つ学校やチームがあろうかと思うが、何せ記憶の範ちゆ

うでありご容赦願いたい。

《現 況》

1. 登録チーム・競技者数

現在の協会加盟は、ミニバスの部が男女各4チーム、中学生の部で男女各8チームがあり、一般の部では男子41チーム、女子12チームで一般の部でも総人数750名を数えジャンボ協会に膨れ上がっている。

大会運営や強化活動に協会としても支援しているところである。

2. 組織活動

江別市は、公式には札幌地区協会のエリアにあり、日本のバスケットボール組織は、全日本協会の傘下に北海道協会があり、更に札幌地区協会と続く。



協会主催の審判講習会

当協会は、本市で早くからバスケット愛好者が多かったことから、独自の活動を行ってきた。

現在、大会数は一般で年間6大会開催しており、一大会あたり男女合わせて40チームほどの参加があり、試合会場や運営スタッフの確保に対する苦労もあるが、参加チームの協力得てスムーズな運営に努めている。

また、当協会の産みの親である初代会長の功績を称え「倉島杯」を開催しているほか、スポンサー大会も実施している。

ここ数年で加入チームが急速に増え、

大会でも試合日程が消化しきれないほどの活気を見せている。

その反面、試合に対するマナーの欠落や競技、審判の技能不足も目立つことから、協会では、チーム力強化、技術力向上のため支援しているほか、バスケットボールの普及・振興を図るため、創立40周年を記念し「振興基金」を創設したところである。

さらに、昨年度には審判講習会を開催し、試合になくってはならない審判の技術向上にも努めている。

《展 望》

“NBA”や“マイケル・ジョーダン”などは、日本でも若者なら知らない人はいないほど有名となった。これに憧れバスケットボールを始める者も多く、競技人口の増加と共にレベルも確実に高くなっている。

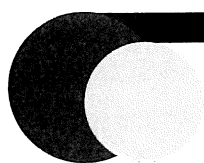
また、市内で活躍する指導者については、それぞれの場所や立場、年代層の中で、日々努力を重ね熱い指導の下、多くの有望な選手を生み出されている。

これからも次々と全国を舞台に活躍し、やがてはオリンピック出場選手が生まれるのも夢ではないだろう。

市内では、バスケットコートが据え付けられている公園や体育館なども整備されており、子供の時から手軽に楽しむ場が多い。これからも愛好者の増加と共に、ここ江別市からスーパースターが生まれていくことを楽しみにしている。

21世紀を目前にして、江別市の体育振興の進展と共に当協会に限らずより多くのスポーツが普及し、体育協会が本市のスポーツ発展の原動力となるよう加盟協会も一丸となり取り組んでいこうではないか。

(前田 記)



江別バドミントン協会

設 立
加 盟

昭和37年6月
昭和37年6月

《現 役 員》

会 長	出 淵 精 吾
顧問	飯 田 哲 雄
〃	江 口 歳 男
〃	本 間 勝 利
副 会 長	野 坂 豊三郎
〃	横 山 真
〃	密 山 征 雄
理 事 長	野 川 豊
副 理 事 長	渡 辺 繁 男
〃	井 須 清 治
〃	中 川 正 志
事 務 局 長	山 田 宗 親
事 務 局 次 長	多 田 孝 雄
〃	成 田 克 子
競 技 部 長	本 間 良 悦
競 技 副 部 長	古 川 孝 行
〃	辻 崎 洋 一
普 及 部 長	阿 部 忠 夫
普 及 副 部 長	岡 本 傳
監 事	内 藤 信 治
〃	小 林 照 美

《治 革》

バドミントン競技は、日本国内においては戦後に普及したスポーツで、日本バドミントン協会の設立が昭和21年、北海道協会の設立が同23年である。その後バドミントンは急速に普及し、昭和20年代には全道の主だった地域に地区協会などが設立された。

江別バドミントン協会のスタートは、昭和37年であるが、協会発足以前に市内で部活動などを行っていたのは、三愛高校（現とわの森三愛高校）同好会、江別高校バドミントン班（定時制）、江別市役所程度であった。その市役所のバドミントン部も昭和35年に小樽市で開催された第2回全道市役所大会に参加するために結成されたといってもよい出来立てのチームであった。

江別バドミントン協会の設立は、現在の協会会長出淵精吾が当時顧問をしていた江別高校定時制の生徒の本間、増田、今、鳴海、熊谷らが当時の倉島教育長に全市的な試合ができるような組織づくりができないものかと接触したのがことの発端であった。そのころ江別市に初の社会教育主事として赴任していた井上庸（後に初代会長）は、当時市役所チームのキャプテンであった飯田（現協会顧問）にこれを取り持ったのである。当時 弱冠26歳であった飯田は、バドミントン人口の極端に少ない当時の状況から時期未だしの感を抱いてはいたが、この機会にと協会創立へ邁進したのであった。飯田は、

出淵、三愛高校のバドミントン同好会顧問井上昌保（前とわの森三愛高校校長）、当時まだ同好会であった江別高校全日製の担当教諭加藤重明、愛好者のいた王子製紙の浜口悠一、同じく愛好者のいた江別市農協、それに市役所内有志を加えて協議・調整を加え、同年6月協会設立総会を開催して江別バドミントン協会は設立の運びとなった。

協会設立後の初大会は37年7月に開催された協会結成記念大会であった。当時の中央公民館（現郷土資料館）前にあった第三小学校の屋内体育館（現存せず）がその会場である。白チョークでラインを引き、旧式の卓球台の木枠を横にし、材木屋から買った角材を結びつけてポールとしたうえで、ネットが緩まぬよう両サイドの卓球台の木枠を跳び箱で押さえるという、現在ではまったく考えられない姿であった。



初めて全国に出場した江別高校チーム（昭和42年）

《活動のあゆみ》

協会では、昭和37年の結成以来毎年定期的に大会を開催してきたほか、ジュニアや初心者の育成指導にも力を入れてきた。特筆すべき事項は、次のとおりである。

昭和40年 市民体育大会でバドミントン競技が初めて行われる。

昭和42年 江別高校バドミントン部全国大会初出場でベスト8。

昭和45年 バドミントン教室を開催。手引き書「ビギニングバドミントン」を作成。

昭和51年 協会創立15周年記念式典開催。

昭和52年 ヨネックスバドミントン教室開催。

昭和52年 江別ママさんバドミントンサークル結成。

昭和54年 全道ママさん大会開催。木村敏男、高野美千子両選手が国体出場10回を数える。

昭和55年 全道実業団バドミントン選手権大会開催。

昭和56年 全道中学校体育大会開催。木村敏男、赤塚正三両選手社会人全国大会（30代複）で優勝。

昭和58年 協会創立20周年記念式典開催。

昭和59年 石狩地区バドミントン選手権大会始まる。

昭和60年 少年少女バドミントン育成指導始まる。

平成2年 江別バドミントンスポーツ少年団結成。

平成5年 協会創立30周年記念式典開催。

平成10年 ヨネックスバドミントン教室開催。

【会長】

昭和37年度～昭和52年度 井上 庸

昭和53年度～昭和55年度 小林純幸

昭和56年度～平成3年度 鳴海重久

平成4年度～現在 出淵精吾

【理事長】

昭和37年度～昭和41年度 出淵精吾

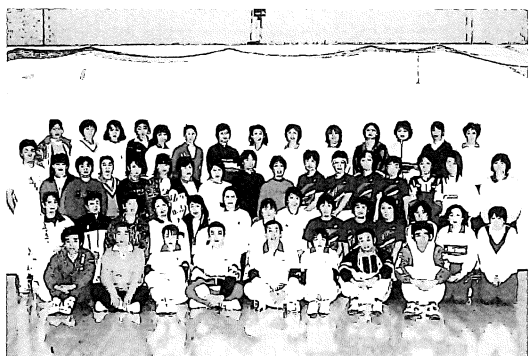
昭和42年度～昭和54年度 飯田哲雄

昭和55年度～平成7年度 密山征雄

平成8年度～現在 野川 豊

【事務局長】

昭和37年度～昭和42年度	飯田哲雄
昭和43年度～昭和52年度	密山征雄
昭和53年度	中川正志
昭和54年度～昭和57年度	多田孝雄
昭和58年度～昭和60年度	岩村重勝
昭和61年度～平成2年度	山田宗親
平成3年度～平成5年度	中川正志
平成6年度～現在	山田宗親



ヨネックスバドミントン教室（平成10年）

《現 況》

江別バドミントン協会は、平成11年度実績で、役員及び登録会員数が247人、登録制をとっていない中学生と未登録の家庭婦人が約300人で、合計550人規模の組織となっている。

中学校は、大麻、大麻東、第二、第三、中央、野幌、角山の各中学校にバドミントン部があり、それぞれ活発に活動を行っている。高校は、市内の江別、野幌、大麻、とわの森三愛、立命館大学慶祥の各高校がバドミントン部の活動を行っているほか、大会によっては札幌啓成高校、札幌厚別高校など厚別区の高校も参加している。この内とわの森三愛高校は、顧問の阿部忠夫（現協会普及部長）などの指導により、全道大会上位の常連である。大学は、市内の4大学（酪農学園大学、北海道浅井学園大学、札幌学院大学、北海道情報大学）にバドミントン部があり、

それぞれ活動を行っており、このうち札幌学院大学と北海道浅井学園大学は全道トップクラスの強豪校である。社会人では、市役所などの職場単位のクラブのほか、地域の体育館や愛好者同士の横のつながりをキーとしたサークル・クラブなどがある。また、家庭婦人は市内に10以上のクラブ・サークルがあり、いずれも活発に活動を行っているほか、市内で唯一のバドミントン少年団として、江別バドミントン少年団があり、協会副会長の横山真が会長に就任している。

協会では、毎年定期的に江別バドミントン協会結成記念大会、江別市長杯争奪家庭婦人バドミントン大会、中学選手権大会、江別バドミントン協会会長杯争奪大会、江別選手権大会、高校選手権大会の6大会を開催し、そのほか江別市民体育大会バドミントン競技及びマスターズスポーツバドミントン大会の主管をおこなっている。また数年に一度江別で開催される、道民スポーツ大会バドミントン競技や、ろうあ者スポーツ大会のバドミントン競技においても大会の主管者となっている。

協会結成記念大会、市民体育大会、会長杯争奪大会、江別選手権大会については、それぞれ300人～350人規模の参加者、中学選手権大会、高校選手権大会についてはそれぞれ200人規模の参加者による大会で、江別市民や市内在勤、在学者のほか、大会によっては、市外からの参加者も多く、盛況を極めている。

近年江別市においても、家庭婦人によるバドミントンがさかんになってきており、毎年10月に開催される市長杯争奪家庭婦人バドミントン大会には、100人近い家庭婦人が参加する。

また、育成事業として不定期ではあるが、講習会などを開催しているほか、市

内のバドミントン少年団に、事業補助を行っている。

(平成12年度の事業予定)

6月3日～4日／江別バドミントン協会
結成記念大会

6月24日～25日／ろうあ者スポーツ大会
(主管大会)

9月9日～10日／市民体育大会 (主管大会)

10月8日／市長杯争奪レディースバドミントン大会

10月21日～22日／中学選手権大会

11月18日～19日／江別バドミントン協会
会長杯争奪大会

2月3日～4日／江別選手権大会

2月4日／マスターズスポーツバドミントン大会 (主管大会)

2月17日～18日／高校選手権大会

《今後の展望》

バドミントンは、1992年のバルセロナオリンピックから正式種目となったこと、日本人選手（特に女子）が往年の強さは無いとはいえ、米倉加奈子の1998年アジア大会女子シングルス優勝（ヨーロッパの一部を除いてバドミントン競技はアジア地域（インドネシア・マレーシア・中国・韓国など）の国が圧倒的に強い）に代表されるように、世界のトップレベルに比較的近い位置にいること、はた目には手軽な印象があり中学校の部活などでも人気が高く顧問の教諭の確保も比較的簡単なこと、社会人の中にも根強い愛好者が多く、全道・全国を目指した競技指向から健康維持目的の愛好者まで多数がバドミントンに親しんでいることなどから、マイナースポーツと言われながらそれなりに競技人口の多い種目である。このことは江別においても同様であるが、

競技人口の多さが必ずしも全体のレベルアップにつながっていないのは、全国的な傾向といえる。

また近年、日本全国で若年層のスポーツ離れが急速に進行しており、学校教育での部活が盛んなバドミントン競技では比較的顕在化しにくいのが、決して例外ではない。他競技では競技人口、愛好者人口が半減したものもあり、堅実な愛好者が多いとはいえバドミントン競技も安閑とはしてられないのが現実である。

このような現状を踏まえ、協会では、現在行われている各種大会の健全運営はもとより、競技人口の維持拡大、底辺層の拡大、社会人になったバドミントン経験者の掘り起こしなどを行い、育成事業に力を入れていく必要がある。特に近年盛んになってきている家庭婦人によるクラブ活動は、これらの課題を解決する糸口になる可能性をもっており積極的な対応が求められるところである。また、協会の主要メンバーの高齢化が進んでいることから実働部隊の要員が不足しがちで、この点についても早急な若返りが課題である。

一方、バドミントンは生涯スポーツとしても最近特に注目されている。屋内競技のため気象条件に左右されず、中小体育館でも行えるなど比較的設備面での制約が少ない利点があり、また、バドミントン競技そのものは、愛好家レベルといえども身体的にはかなりハードであるが、継続的な活動により高齢（スポーツ振興財団主催のマスターズスポーツバドミントン大会などでも60歳台の選手が多数参加している）でも相当のレベルで楽しむことができることなど、今後とも生涯スポーツとして益々重要視される種目と言える。（文中敬称略）

江別バレーボール協会

設立 昭和23年6月
加盟 昭和25年4月

《現 役 員》

顧問	岡 英 雄
〃	小 川 公 人
〃	森 敏 捷
〃	野 村 義 次
〃	後 藤 俊 健
〃	桑 野 健 一
〃	増 井 清 一
会長	納 谷 和 行
副 会 長	佐 藤 健 三
〃	鈴 木 久 雄
理事長	嶋 倉 昭 章
副 理 事 長	西 尾 章 幸
〃	齊 藤 勝 幸
〃	浦 島 忠 勝
競技部長	渋谷 研 一
審判部長	小林 敏 一
強化部長	山 田 和 弘
指導普及部長	浅 野 方 伸
事務局 長	原 利 明
常任理事	田 村 孝 次
〃	今 井 啓 介
〃	富 川 核 一
〃	成 田 保 一
〃	小 池 和 意 一
〃	松 田 祐 二
〃	工 藤 憲 一
〃	田 島 郁 夫
〃	古 川 栄 一
〃	星 野 健 二
〃	清 水 隆 弘
〃	亀 岡 哲 一
〃	山 本 忠 文

〃	松 井 明 生
〃	原 よし子
〃	笹 岡 麻喜子
監 事	米 山 忠 夫
〃	松 村 加代子

《沿 革》

バレーボール競技は、いわゆる極東式と呼ばれる9人制で行われていたが、1964年に日本で開催された東京オリンピックで正式種目として採用されてから6人制が導入され、試合も屋外コートで行うのが普通であったが、屋内でのスポーツに移行していった。

このオリンピックで大松監督率いる「東洋の魔女」と呼ばれた日本女子チームが優勝、男子チームが3位と健闘し、これを契機にバレーボール競技の人気も高まりを見せていった。

現在は、国際的には6人制が主流であるが、国内的には9人制が根強く残っており、日本バレーボール界の底辺を支えている。

江別におけるバレーボール競技は、戦後間もなく企業のサークル活動として始まり、北日本製紙(現：王子製紙)、北教組、開発局機械工作所などがその中心であった。

その後、北海鋼機、火力発電所(北海道電力)などがチームを結成、昭和31年には江別市役所がチームを結成し

て最盛期を迎えることとなる。

協会の設立は、市内企業等のバレーボール愛好者が中心となって組織化を進め、昭和23年に札幌協会傘下として設立された。

昭和47年に青年センター、昭和53年に市民体育館が建設されたのを機に、ワールドカップなどの国際大会をはじめ、国内、道内の各種大会を開催・主管して実績を積み重ね、昭和57年に札幌協会傘下から独立して単独協会として江別バレーボール協会がスタートし、初代会長に桑野健氏が就任した。

北海道バレーボール協会の直轄協会となってからは、数々の国際大会をはじめ、国内、道内の大会を開催する一方、地域においても良き指導者を得て全道大会、全国大会の常連として活躍するチームが育つなど、協会自体の基礎も確固たるものとなり、今や道内の地区協会としては先導的協会として今日に至っている。

《活動のあゆみ》

協会の主な出来事、主要事業、協会加盟チームの足跡などを振り返ってみる。
() 内のチーム名は全道規模大会の優勝チームである。

現在の登録チームは、実業団1、一般1、大学6、高校10、中学校12、小学校5、家庭婦人12となっている。

昭和44年・全日本9人制総合選手権道予選

(道女子短大【現：北海道浅井学園大学】)

45年・大学選手権(道女子短大)

46年・大学選手権(道女子短大)

47年・全日本6人制総合選手権道予選(道女子短大)

50年・全日本6人制総合選手権道予選(道女子短大)

・江別家庭婦人バレーボール連盟創立

51年・大学選手権(道女子短大)

52年・全日本9人制総合選手権道予選(道女子短大)

・大学選手権(道女子短大)

53年・日本・中国ジュニア親善大会開催

・大学選手権(道女子短大)

54年・日本産業人9人制優勝大会道予選(江別市役所)

・全日本9人制総合選手権道予選(道女子短大)

・大学選手権(道女子短大)

55年・日本産業人9人制優勝大会道予選

(江別市役所・・・全国大会3位)

・全日本9人制総合選手権道予選(江別雅会)

・大学選手権(道女子短大)

56年・ワールドカップ81女子大会開催

・日本産業人9人制優勝大会道予選(江別市役所)

・大学選手権(道女子短大)

57年・札幌協会傘下から協会独立

・国民体育大会道予選(江別雅会)

・大学選手権(道女子短大)

・大学春季リーグ(道女子短大)

・大学秋季リーグ(道女子短大)

58年・国民体育大会道予選(江別雅会)

・大学選手権(道女子短大)

・大学春季リーグ(道女子短大)

・大学秋季リーグ(道女子短大)

・全日本9人制総合選手権道予選(江別市役所)

59年・大学選手権(道女子短大)

・大学春季リーグ(道女子短大)

・大学秋季リーグ(道女子短大)

60年・日本リーグ(現：Vリーグ)男子大会開催

・日本、カナダ親善大会開催

・全日本9人制クラブカップ道予選(江別雅会)

・国民体育大会道予選(江別市役所、江別雅会)

・大学選手権(道女子短大)

・大学春季リーグ(道女子短大)

・大学秋季リーグ(道女子短大)

61年・国民体育大会道予選(江別雅会)

・全日本9人制総合選手権道予選(江別市役所)

・ライオンカップ小学生南大会(中央ガッツ、ジャンプ)

・道新カップ小学生大会(中央ガッツ)

・小学生選抜優勝大会(中央ガッツ)

・大学選手権(道女子短大)

・大学春季リーグ(道女子短大)

・大学秋季リーグ(道女子短大)

・北海道バレーボール協会常任理事に就任(嶋倉昭氏)

・江別市体育協会理事長に就任(嶋倉昭氏)

62年・全日本9人制実業団道予選(江別市役所)

・国民体育大会道予選(江別雅会)

・ライオンカップ小学生南大会

(中央ガッツ・・・全国ベスト8)

・道新カップ小学生大会(中央ガッツ)

・小学生選抜優勝大会(中央ガッツ)

・大学秋季リーグ(道女子短大)

63年・全日本9人制実業団道予選(江別市役所)

・国民体育大会道予選(江別市役所)

・全日本9人制総合選手権道予選(江別雅会)

・9人制選抜リーグ(江別市役所、江別雅会)

・ライオンカップ小学生南大会(中央ガッツ・・・全国ベスト16)(中央ジャンプ)

・道新カップ小学生大会

(中央ガッツ、中央ジャンプ)

・小学生選抜優勝大会(中央ガッツ)

- ・大学選手権（道女子短大）
- ・大学秋季リーグ（道女子短大）
- ・北海道実業団バレーボール連盟副理事長に就任（嶋倉昭氏）

平成元年・全日本男子合宿

- ・実業団リーグ1部（江別市役所）
- ・全日本9人制クラブカップ道予選（江別雅会）
- ・第44回北海道はまなす国体道予選（江別雅会・・・全国4位）
- ・全日本9人制総合選手権道予選（江別市役所、江別雅会）
- ・中学校（2中男子、3中女子）
- ・小学生道ブロック（中央ガッツ）
- ・道新カップ小学生大会（中央ガッツ）
- ・大学選手権（道女子短大）
- ・大学春季リーグ（道女子短大）
- ・大学秋季リーグ（道女子短大）

2年・実業団リーグ1部（江別市役所）

- ・国民体育大会道予選（江別雅会）
- ・ライオンカップ小学生南大会（中央ガッツ・・・全国ベスト16）（中央ジャンプ）
- ・小学生道ブロック（江別太スピリッツ）
- ・道新カップ小学生大会（中央ガッツ、江別太バース）
- ・小学生選抜優勝大会（中央ガッツ）
- ・小学生ふかがわカップ（中央ガッツ）
- ・大学春季リーグ（道女子短大）
- ・大学秋季リーグ（道女子短大）

3年・北海道ソフトバレーボール協会創立

- （理事長に嶋倉昭氏就任）
- ・全日本男子合宿
- ・日本リーグ男子大会開催
- ・実業団リーグ1部（江別市役所）
- ・全日本9人制総合選手権道予選（江別市役所、トランタンVC）
- ・9人制選抜リーグ（江別市役所）
- ・中学校（3中男子）
- ・ライオンカップ小学生南大会（中央ガッツ・・・全国ベスト8）
- ・道新カップ小学生大会（中央ガッツ、中央ジャンプ）
- ・小学生選抜優勝大会（中央ガッツ、中央ジャンプ）
- ・大学秋季リーグ（道女子短大）

4年・実業団リーグ1部（江別市役所）

- ・全日本9人制総合選手権道予選（江別市役所、道女子短大）
- ・ライオンカップ小学生南大会（江別太スピリッツ）
- ・道新カップ小学生大会（江別太スピリッツ）
- ・小学生選抜優勝大会（江別太スピリッツ）
- ・大学選手権（道女子短大）
- ・大学秋季リーグ（道女子短大）

5年・日本、カナダ親善大会

- ・実業団リーグ1部（江別市役所）
- ・全日本9人制実業団道予選（江別市役所）
- ・中学校（中央中男子）

- ・中学校選抜優勝大会（中央中男子）
- ・北海道バレーボール協会副理事長に就任（嶋倉昭氏）

6年・全国中学校大会開催

- ・国民体育大会道予選【成年2部】（江別JVクラブ・・・全国5位）
- ・全日本9人制総合選手権道予選（道女子短大）
- ・高校選抜南大会（とわの森男子）
- ・中学校（中央中男子）
- ・中学校選抜優勝大会（中央中男子）
- ・大学選手権（道女子短大）
- ・大学秋季リーグ（道女子短大）

7年・全日本9人制総合選手権道予選（道女子短大）

- ・9人制クラブ選手権（江別雅会）
- ・大学選手権（道女子短大）

8年・全日本9人制実業団道予選（江別市役所）

- ・全日本9人制総合選手権道予選（江別雅会）
- ・9人制クラブ選手権（江別雅会）
- ・中学校（江陽中女子）
- ・ライオンカップ小学生南大会（中央ジャンプ・・・全国3位）
- ・道新カップ小学生大会（中央ジャンプ）
- ・小学生選抜優勝大会（中央ジャンプ）
- ・ななかまど杯小学生大会（中央ジャンプ）

9年・全日本9人制実業団道予選（江別市役所）

- ・国民体育大会道予選（江別市役所、江別雅会）
- ・ライオンカップ小学生南大会（中央ジャンプ）
- ・道新カップ小学生大会（中央ジャンプ）
- ・ななかまど杯小学生大会（中央ジャンプ）
- ・小学生選抜優勝大会（中央ジャンプ）
- ・ときめき杯ママさん大会（江別好友）
- ・大学選手権（道女子大）
- ・大学春季リーグ（道女子大）
- ・大学秋季リーグ（道女子大）

10年・全日本男子紅白試合

- ・全日本9人制実業団道予選（江別市役所）
- ・中学校（中央中女子）
- ・ライオンカップ小学生南大会（中央ガッツ）（中央ジャンプ・・・全国ベスト8）
- ・道新カップ小学生大会（中央ガッツ、中央ジャンプ）
- ・ななかまど杯小学生大会（中央ガッツ、中央ジャンプ）
- ・小学生選抜優勝大会（中央ガッツ、中央ジャンプ）
- ・大学選手権（道女子大）
- ・大学春季リーグ（道女子大）
- ・大学秋季リーグ（道女子大）

11年・国民体育大会道予選（江別市役所）

- ・全日本9人制総合選手権道予選（江別市役所）
- ・ライオンカップ小学生南大会（中央ジャンプ・・・全国「敢闘賞」受賞）
- ・道新カップ小学生大会（中央ガッツ、中央ジャンプ）
- ・ななかまど杯小学生大会（中央ガッツ、中央ジャンプ）
- ・大学選手権（道女子大）

- ・大学秋期リーグ（道女子大）
- ・小学生選抜優勝大会
（中央ガッツ、中央ジャンプ）
- ・北海道バレーボール協会理事長に就任
（嶋倉昭氏）
- ・北海道バレーボール協会総務委員長に就任
（渋谷 研一氏）

《現 況》

江別のバレーボール界は、昭和42年開学の北海道女子短期大学（現：北海道浅井学園大学）が後藤俊監督（現：永谷稔監督）のもと古くから孤軍奮闘し、現在も道内無敵を誇っており、全国大会でもベスト16に入る力を持っている。

小学校では、昭和60年代から中央小学校に赴任した工藤憲先生の指導により誕生した中央少年団の男子「中央ガッツ」、女子「中央ジャンプ」チームがめきめきと力をつけ、全国大会出場の常連となり、中央ジャンプは、全国3位の快挙を成し遂げている。

中学校においては、この中央少年団の卒業生を中心にした、中央中、二中、三中などが全国大会に出場しており、卒業生は、東海大第四高校、とわの森 三愛高校などに進学し、高校、さらには大学・実業団などで活躍している。高校では、とわの森三愛高校男子チームが突出しており、山田和弘監督のもと、道内では常にベスト4に入る成績を残している。平成6年には、春の高校選抜大会で優勝し、全国大会へ駒を進めている。

一般男子は、昭和31年結成の江別市役所が実業団チームとして群を抜いている。昭和54年以降、常に全国大会に出場し、国体5位入賞2回、全日本産業人大会3位入賞など、輝かしい成績を残している。また、江別市役所OBチームを中心に結成した「江別JVクラブ」が、平成6年の愛知国体成年2部に出場し、5位入賞

を果たしている。

一般女子は、昭和53年結成の江別雅会が北海道のバレーボール界を引っ張っている。江別市役所バレー部OBの鈴木久雄監督（現：栗田明彦監督）の指導のもと、国体の常連として全国に江別雅会の名を轟かせている。

《今後の展望》

現在、バレーボール界はかつてない氷河期を迎えている。

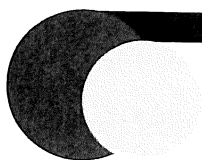
全日本チームの低迷、登録チームの減少など暗い材料が多い。

江別協会においても、特に中学校、高校のチームの減少が顕著である。

少子高齢化の影響も否めないところであり、バレーボールに限らず、多くのスポーツ競技にも言えることであると思うが、魅力ある指導者の養成、底辺の拡大、惹きつけるスポーツの推進について我々関係者は原点に返って見つめ直し、手を打つ時期にきていると思う。



全日本男子チーム紅白試合
（中央バレーボール少年団から記念品贈呈）



江別パワーリフティング協会

設 立 昭 和 60 年 1 月 1 日
加 盟 平 成 6 年 4 月 15 日

《現 役 員》

会 長	鷺 見 武
理 事 長	出 口 徹 文
副 理 事 長	笠 井 恭 夫
事 務 局 長	清 水 伸 二
事務局長補佐	後 昌 司
教 導 部 長	藤 田 英 生
教 導 副 部 長	佐 藤 清
競 技 部 長	森 田 勲
競 技 副 部 長	原 正 人
ボディビル部長	佐 藤 末 男
ボディビル副部長	津 田 英 志
ウイメンズ部長	川 住 京 子
ウイメンズ副部長	川 端 春 代
審 判 部 長	堤 祐 一
審 判 副 部 長	山 森 正 春
監 査 役	森 田 勲
〃	原 正 人

なかでの仲間意識の高まりから自然発生的に発足しました。

発足当時のトレーニング自体は、必ずしもゲーム性があるわけではなく、何らかの目標を定めて行ったほうが、効果が上がるという考えと、筋肉が発達する為の栄養学を各自で研究しつつトレーニングに励んでいました。

8人程度で日常的にトレーニングを続けて行くうちに少しずつ会員も増えると共に体育館さんの協力で器材も増え、施設も整いはじめた頃から体育館さんとの共同事業で月1回の市民の為のトレーニング教室を開催したり、普段のトレーニング練習中に市民の為のトレーニング指導を行うなか、ウエイトの挙上重量をトレーニング効果として意識するようになりはじめ、それと同時にパワーリフティング競技と言うものを知り、その競技を通じて「記録」と言う目標を掲げてより効果的なトレーニングを継続し何名かの選手が大会に参加する様になりました。

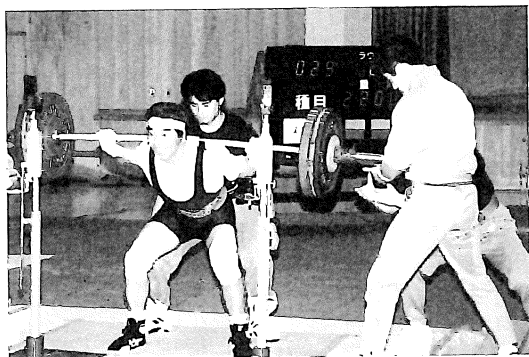
その結果、北海道チャンピオンをはじめ種目別（デッドリフト）に於いては全日本チャンピオンを輩出し、北日本記録（北海道&東北6県）や日本記録を樹立する一方、女子選手の育成にも力を注ぎ、ベンチプレスで北海道記録を樹立する等々、北海道はもとより日本国内に江別市の名前を知らしめ、北海道パワーリフティング協会の中枢を占めていく事となり、北海道パワーリフティング協会が

《活動の歩み》

当協会は、昭和60年に市民体育館トレーニング室でウエイトトレーニングに没頭していた8人の同好の志が集まり同好会として出発したものです。

定期的に市民体育館でウエイトトレーニングをしていましたが、現在の様に器材や施設が整っているわけでもなく、プレートが10kgが最大でトータルで90kg位、シャフトも2本でベンチ台もスクワットラックも無い為、利用者同士やその当時のトレーニング指導員に持たせてもらったり、担がせてもらったりと言う状況の

(財)北海道体育協会に加盟する年に、当協会の理事長が北海道パワーリフティング協会の理事長に就任する事となりました。その翌年の平成6年3月に同好会を「江別パワーリフティング協会」とし、江別市体育協会加盟団体として活動する事となり、当協会の選手が道体協の2度の表彰を受け、そして江別市体育協会の優秀選手賞を受ける等々、当初の活動状況では考えられない様な発展をとげて今日に至ったものです。



スクワット種目

《現 況》

現在、北海道パワーリフティング協会の加盟団体として、市よりの後援のもと、全日本女子パワーリフティング選手権大会を主管したり、北海道パワーリフティング選手権大会を主管する等と共に、日常的なトレーニングを通じ、メンバーはもとより、メンバー以外のトレーニング室利用者の方達にもトレーニングの方法などをアドバイスしています。日常的なトレーニングと言う点では、当団体の出発点と言う事もあり、自己のトレーニングだけではなく、生涯スポーツの原点に立って、リハビリやダイエットなど積極的にアドバイスを行うよう意識しています。ただ、最近まで中心メンバーが勤務の関係で、平日の夜間などにトレーニングが出来ず手薄になっていましたが、

最近になって復帰し、再び日本や世界を狙ってトレーニングに励んでいますので、トレーニング室に行ったらお気軽に声をお掛け下さい。

主管する大会は、年3回の全道大会のうち、秋(10月)に開催される大会は、当協会が主管しています。これは江別市という都市が、地理的に北海道の中心であるという事と、会場となる市民体育館が、他都市と異なり駅から近いという事から、選手にとって便利であるという事で支持された結果です。現在会員のなかには、(社)日本パワーリフティング協会公認審判員資格者が6名おり、そのうちの1人が北海道に2人しかいない1級審判員でもう1人が2級審判員という、日本国内でも屈指のレベルの中での判定指導で練習がなされています。

また、競技種目中、デッドリフト種目では、江別は注目の的で全国のパワーリフターの目標とされてきたところ です。

《展 望》

パワーリフティング競技とは非常に単純な力比べのスポーツです。

力比べという点ですでに古くからウェイトリフティングがありますが、これは高度のテクニックを必要とするスポーツです。

一方パワーリフティングは、スポーツの補強やボディビルで広くトレーニングされているバーベルの種目を3種類選んで力比べをすると言う、簡単明瞭なスポーツで、その為に現在では広く高校生から40歳代～70歳代までのマスターズの選手まで、盛んに大会が行われるようになりました。女子の部門は1980年に世界選手権大会が始まって以来、20年の歴史を持っているという事は、女性にとっても

入門しやすいと言うパワーリフティングの基本特性によるものでしょう。パワーリフティングは全身の筋力を競う為に3種目の違った挙げ方で競技します。

競技の方法は一つの種目毎に一人3回挑戦し、その中で成功した最高重量がその人の記録となり、3種目の記録を合計したトータル重量で競うものですが、失敗したからと言って、次の試技の時に重量を下げる事は出来ませんので最初の重量選択は重要です。

1つ目の種目は足腰の力を競う競技でスクワットと言ひ、陸上や野球等々各種スポーツ競技の補助トレーニングに欠かせられない種目です。

2つ目の種目のベンチプレスは腕と胸の力を競ひ、広くスポーツクラブや学校のクラブ活動の補強運動として行われ、ベンチプレスだけの大会もありますし、身障者の方の戦うクラスもあり、パラリンピックの公式競技にもなっておりますし、近年、北海道からアジア及び世界チャンピオンも生まれています。

最後の種目のデッドリフトは背中と足腰の力を競う競技で、床に置いてあるバーベルを両手でつかんで直立不動の姿勢まで引き上げるという単純な競技で、単純なだけに扱う重量は非常に重く、江別の選手はこの種目に強い事で有名です。

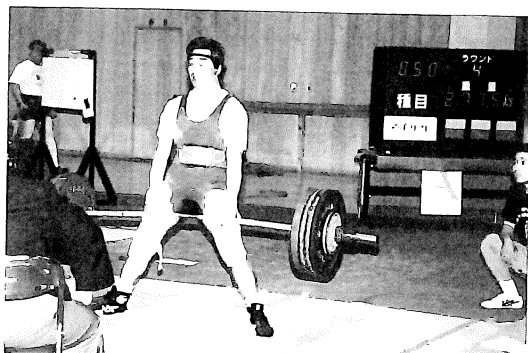
パワーリフティングは体重別に女子が10のクラス、男子が11のクラスに分かれ、年齢は14歳以上で心身共に健康なアマチュア選手であれば、どなたでも出られますし、高校・ジュニア（24歳以下）マスターズ（40歳以上49歳・50歳以上59歳・60歳以上）3階級と一般男女に分かれています。

また、来年度にはプッシュ&プル競技というパワー競技をもっと単純化した、一般市民が気軽に参加出来る日本一の力

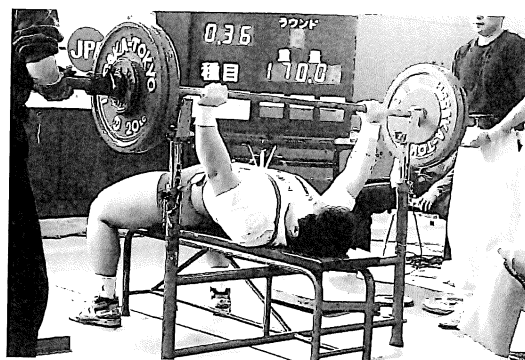
持ちを決める、日本協会公認の競技も実現に向けて考案中等々、パワーリフティング競技はウェイトトレーニングを基本としており、全ての運動競技の基礎となっている運動です。従って、日常的に練習を行わなければ、効果は現れず、継続する事が課題となっています。

将来的には全国はもとより世界に通用する選手を育成する事を目標とし、自身はもとより会員各自が切磋琢磨し日夜筋力向上の為に人間の限界を遙に超えたトレーニングに励んで各人の自己の競技分野での成績を追究することは続けていかなければなりません、それと同時に、他の運動の基礎トレーニングとして筋力向上の面で、トレーニング室利用者の方々へのアドバイスなどの日常活動も心掛けていかなければならないと考えていますので、何かトレーニング効果に疑問のお持ちの方や運動等で記録に伸び悩んでいらっしゃる方々、お悩みの方はお気軽にご相談して頂きたいと思います。

何せ中心メンバーはこよなくパワーリフティングを愛し、パワーリフティングに人一倍情熱を燃やしておりますし、何よりも教え魔でおせっかいやきです、どうか市民の皆様、生涯スポーツに情熱を燃やして、健康で明るい毎日の送るためにウェイトトレーニングに励んで下さい。



デッドリフト種目



ベンチプレス種目



我が愛すべき裏方



女性でもこの力！デッドリフト



女性スタッフの一員



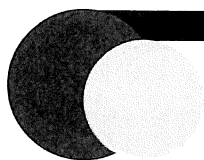
記念すべき第1回江別大会



団体戦2位



スクワット



江別武術太極拳連盟

設 立
加 盟

平成2年9月 1日
平成6年4月15日

《現 役 員》

会 長	松 本 栄 樹
理 事	石 山 雅 志
理 事	角 瀬 義 治
〃	石 山 美智子
会 計	中 條 順 子
〃	石 山 ひとみ

《沿 革》

1987年（昭和62年）
（日本武術太極拳連盟が創立）

1988年（昭和63年）
札幌中国武術栄鳳会から北京武術隊
武英級 張顕明氏にきてもらい、大麻
麻の実児童センターで武術の練習を始
める
（日本連盟が社団法人となる）

1989年（平成元年）
（北海道武術太極拳連盟が創立）

1990年（平成2年）
江別太極拳協会となる。同時に北海道
武術太極拳連盟に加盟。
（武術太極拳がアジア大会の正式種目
となる）

1991年（平成3年）
（日本連盟が体育協会に加盟）

1993年（平成5年）
江別武術太極拳連盟として江別市体育
協会に加盟

1994年（平成6年）
全国選手権大会初出場
以後毎年数名出場

1995年（平成7年）
ジュニアオリンピック初参加 2名

以後毎年数名参加

1999年（平成11年）

全国競技大会初出場

日本連盟主催 強化合宿参加

江別市第一回ジュニア演武大会をおこなう。

2000年（平成12年）

第一回北京海外強化合宿参加 コーチ

1名 選手1名

日本連盟主催 強化合宿参加

全国競技大会出場

《活動の歩み》

日本で太極拳が広く行なわれるようになって約40年になる。

近年では、長拳、南拳や各種の伝統拳術が若い人たちの間で行なわれている。

中国武術は、国際的には「武術」の中国語の発音（ウーシュウ）の名称で普及している。太極拳は武術（ウーシュウ）の中の一つ目であるが日本では太極拳の愛好者が圧倒的に多いことから太極拳と各種の中国武術を総称して「武術太極拳」の名称で普及を進め、1987年には（社）日本武術太極拳連盟が発足した。現在日本での愛好者は100万人と言われている。江別市でもその影響をうけ、太極拳が普及されていった。

健康スポーツとしての太極拳の普及は現北海道連盟副会長、現札幌連盟会長の新免 環氏の功績が大である。

一方、江別市の競技武術としての始まりは、中国北京市より、1988年頃、武英級（中国武術最高位）の張顕明氏が留学生として来道しており、氏が大麻麻の実児童センターで教え始めたのがきっかけである。

現在、北海道で当時氏が教えた生徒の中からは、国際大会クラス全日本クラスの選手、一級審判員、指導員が輩出している。今、張顕明氏は国際審判員、北京武術隊コーチとして活躍している。

その後、大麻体育館を使用させていただけようになり、現在、毎年春の全日本競技大会、ジュニアオリンピックカップ、夏の全日本競技大会に数名出場することができている。また3年ほど前から高砂地区の町内会の協力により高砂自治会館を借りることができるようになり、そこでは主にジュニアの将来の選手たちが育ってきている。

北海道交流大会競技部門においても、太極拳、長拳において入賞できるようになった。

昨年からは、ジュニアオリンピック太極拳部門で入賞を続けてきた山岸正史が全日本強化選手に選ばれ、強化練習にコーチとして石山雅志も同行し太極拳の技術レベルの向上が望めるようになってきた。



張顕明氏 酔拳

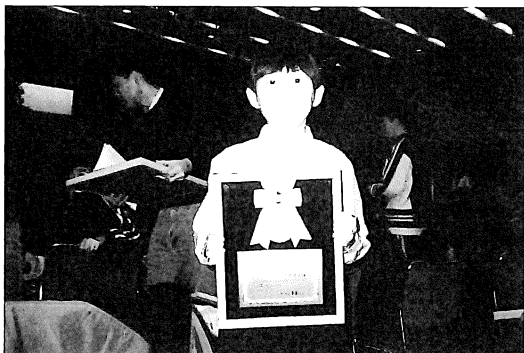
ジュニアオリンピックカップ成績

1993年	太極拳	山岸正史	2位
1996年	太極拳	山岸正史	4位
1997年	太極拳	山岸正史	2位
	長拳B	徳和優樹	6位
1998年	太極拳	山岸正史	6位
1999年	太極拳	山岸正史	3位

北海道武術太極拳交流大会成績

1999年 競技部門

長 拳	角瀬義浩	2位
太極拳	山岸正史	最優秀賞
男子少年長拳		
	大野達哉	2位
	江別市教育委員会	賞受賞



大野達哉 教育委員会賞受賞

2000年 拳術部門

男子最優秀賞	角瀬義浩
女子最優秀賞	玉城愛子
ジュニア男子 2位	石山健介
対練 中華人民共和国駐札幌総領事賞	
	山岸正史
	玉城愛子
	梅沢昌英

《現 況》

中国武術の起源は、数千年前に遡るが、14世紀から20世紀初めにかけて目覚しく発達して、打つ、蹴る、投げる、つかむ、刺す等の技法を組み合わせた数多くの武術の党派、種類が生まれた。

このような格闘技としての武術は、しだいに健身、体育種目としての心身の鍛練と修養を目的とするようになった。最近では、技能検定試験が整備されてきたり審判員制度が整備され、国際大会が開催され日本からも参加している。

中国では、シドニーの後、北京でのオリンピックの正式種目をめざしている。

・登録団体

現在、三団体70名ほどである。

・活動内容

技能検定試験（段級試験）

現在は太極拳のみの技能検定試験があり、現在有段者は2段1名、初段4名である。昨年度は、3級2名合格した。

公認指導員の養成

現在日本連盟の公認指導員試験は、段とリンクしており、初段合格者とC級指導員、2段合格者とB級指導員、3段合格者とA級指導員がそれぞれ受験資格と受験可能な指導員資格である。

昨年度は、C級指導員が1名合格した。

一昨年度は、長拳指導員が1名合格した。

公認審判員の養成

審判員には、大きく分けて公認太極拳審判員と公認審判員の二種があり、公認審判員には、3級から国際審判員まで、4階級あり、3級は地方大会、2級は選抜大会、1級は国内大会は全て審判でき、国際審判員は審判だけでなく実際に自分も国際套路（型）が演武できなくてはならない。

昨年度は当連盟で1級審判員が1名合格した。

競技スポーツ、生涯スポーツとして

各種事業に参加

大会試合形式には、一定のルールに基づいて、相手と格闘して勝負を決めるものと（対抗性競技）と一定の動作を演武

してその技術水準を評価するもの（演武競技）、の2種類がありますが、国際スポーツとしての、武術太極拳は現在のところ演武競技が、主流となっている。

北海道交流大会、全日本選手権大会、全日本競技大会、ジュニアオリンピック大会にそれぞれ選手を派遣参加してきた。

強化選手の養成

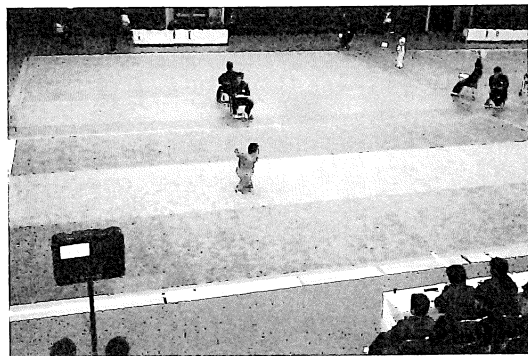
全日本強化に入れるだけの人材を養成する。太極拳は、2000年度強化選手に1名入った。

ジュニア長拳での強化選手育成をめざす。

ジュニア育成

選手となるだけでなく、心身を健康にし、青少年問題に関係のない明るい団体づくりを目指している。選手になりたい子には、誰にでも門戸を開いて別け隔てなく指導している。

来年から行なわれる、長拳の技能検定試験に参加する予定である。



ジュニアオリンピックカップ全国大会の様子

《今後の展望》

生涯スポーツとしての活動

当連盟としては、今までは、武術太極拳をより深く理解する時期であった。そして、生涯スポーツとしての要求に対してどのように答えていくか、方向性を考える時期であったといえる。

今後は、技術的にしっかりした、指導

員を増やし武の芸術、「武術」を楽しんで健康増進にやくだててもらえるように取り組みたいと思う。

そのためには無料講習会を開いて、武術太極拳をよく知ってもらう活動を行ったり生涯スポーツとしての発表の場を多く持てるようにすることが必要であろう。

そして、今後は全国スポーツレクリエーション祭、ねんりんピック、などにも参加していきたい。

競技スポーツとしての展望

●大切なジュニアの発掘

武術太極拳は、まだまだ若い人口が少ない分野で、競技に出られる人材が少ない。今後もっとジュニアの募集と人材の発掘を行ないたい。

ジュニアからの選手育成とコーチの育成が急務である。

江別市から国際大会に出場できるような選手を育成したい。

そのためには必要な器具備品として、競技用のじゅうたんが必要になってくるし、よりよい練習場所の確保も必要である。

●対抗性競技への取り組み

また、将来をみて散打競技（対抗性競技・組手乱取り）にも取り組んで行きたい。北京合宿の時に散打選手を見かけたが、選手を育成するにはまったく新たな取り組みが必要である。



高砂自治会館練習風景

江別ミニバレー協会

設 立 平成3年 5月13日
加 盟 平成6年12月12日

《現 役 員》

会 長	布 川 義 治
副 会 長	関 根 信 子
〃	吉 田 恵美子
事 務 局 長	阿瀬川 裕 子
事 務 局 次 長	奥 陽 子
〃	斉 藤 美 洋
理 事	渡 邊 由 美
〃	吉 田 広 子
〃	今 泉 美津枝
〃	宮 腰 供 子
〃	三 浦 明 美
〃	工 藤 正 一
〃	中 野 淳
監 事	風 林 由紀子
〃	中 田 留 美
〃	宮 本 久美子
〃	三木田 美 静
〃	原 子 瑞 穂
会 計	大 島 三枝子
会 計 監 査	渡 辺 一 雄
相 談 役	中 井 登美枝

《沿 革》

札幌冬季オリンピックが開かれた、昭和47年に、十勝管内大樹町で生まれたスポーツ、ミニバレー。ビニールのボールに息を吹き込んでふくらませ、手軽に遊ぶことが出来るミニバレー。帯広でミニバレーに出会った転勤族が、61年に、札幌でもミニバレーをしたいという強い思いで仲間を募り、練習場所の確保に苦労しながらスタートしたそうです。まだ知名度の低いミニバレーを何とか広めようと、新聞へのサークル会員募集、ラジオやテレビへの投書等、さまざまな宣伝活動を行ない、62年に北海道新聞の『女のつどい』に大きく紹介され、HBCテレビ『パック2』の中でもミニバレーを紹介してもらったことから、江別にもミニバレーが広がり始めたようです。その後、江別のミニバレー愛好者が徐々に増え始め、札幌まで練習に行っていた人達も、江別市内に練習場所が確保できるようになり、試合に向けての動きも盛んになってきたこともあって、平成3年5月、江別ミニバレー協会が発足いたしました。設立から今年度までの会長は次のとおりです。

・初代会長（平成3年・4年）

西 照夫（石狩川江別ゴルフ場代表取締役社長）

・2代目会長（平成5年・6年）

白幡 寿（文京台スポーツクラブ）

・3代目会長（平成7年・8年）

吉川 等志（江別飛鳥サークル）

- ・ 4代目会長（平成9年～11年）
中井登美枝（EMC江別ミニバレークラブ）
- ・ 5代目会長（平成12年～）
布川 義治（北海道議会議員）



そして、協会設立から約5年半もの間、柱となってささえてくれた前事務局長の齊藤 裕氏。規約作りから理事会、大会等の運営全ての基礎作りをしていただいたといっても過言ではないと思います。

《活動の歩み》

次に設立時からの協会への登録状況です。

平成3年	4サークル	133名
平成4年	6サークル	114名
平成5年	5サークル	99名
平成6年	6サークル	110名
平成7年	7サークル	117名
平成8年	8サークル	121名
平成9年	6サークル	108名
平成10年	6サークル	116名
平成11年	6サークル	118名
平成12年	6サークル	116名

以上のように、サークルの増減はあっても、加盟人数はだいたい落ちついていきます。ただ、協会に加盟せずにミニバレーを楽しんでいるサークルはまだあります。人数的にも100名以上はいるでしょ

う。この未加盟でミニバレーをしている人達に、試合の楽しさを知ってもらいたいと、市民体育大会では、協会員だけの部（これを一般の部と呼んでいます）とは別に、ビギナーの部というのを設け、ビギナーの人達同志の交流が出来るようにしました。今では年1回のこの大会を目標に練習していると聞き、私達役員、大変うれしく思っています。このビギナーの部で優勝したチームは、翌年の大会では、一般の部の中に混じって試合をしてもらうようにしたので、毎回同じチームが優勝するのではなく、他のビギナーの人達にも優勝、準優勝のチャンスが来たということも、さらに練習に熱が入るきっかけになっているのかもしれませんが。試合の楽しさの中にも厳しさがあることも知ってもらい、一人でも多くの方が協会に加盟して、さらに上のミニバレーを目指して頑張ってもらいたいと願ってやみません。

ミニバレーの大会は年間、数多くあります。その中でも一番大きな大会がジャパンカップです。北海道ミニバレー協会には67の協会・連盟が加盟しています。その他に、道外からも、東京都をはじめに、青森県、秋田県、山形県、富山県、茨城県、埼玉県、神奈川県、沖縄県、さらには外国人チームの参加もあります。今年は、2000イン札幌ということで『きたえーる』で、256チーム、約1300名の選手、役員が参加して盛大に行なわれました。江別からも毎年、参加していますが、その中で勝ち上がっていくのは、なかなか容易なことではありません。その次に位置するのが、読売杯全道155ミニバレー大会になります。155大会とは、ミニバレーのネットの高さ155cmにちなんで、参加プレーヤー4人の年齢合計が155歳以上、155歳未満で分けて行なう大会です。

この2つの大会は2日間に渡って行なわれます。この155ミニバレー大会は、前回168チーム、約700名の参加がありました。その次に道央ミニバレー大会があります。この道央ミニバレー大会は、開催地が、札幌、三笠、恵庭、小樽、江別の持ち回りになっています。昨年、10周年記念大会が小樽で開催されました。127チーム、約550名が参加して行なわれましたが、いずれの大会もレベルが高いことは言うまでもありません。この3大会の成績を報告させていただきます。

- ・第7回ジャパンカップ イン小樽（平成6年）

混成40歳以上の部

第2位 飛鳥（参加12チーム中）

- ・第11回ジャパンカップ イン帯広（平成10年）

女子40歳未満の部

ベスト8 EMC（参加51チーム中）

- ・第4回道央155MV大会（平成10年）

女子155歳未満の部

第3位 EMC（参加26チーム中）

- ・第5回道央MV大会（平成6年）

女子40歳未満の部

優勝 EMC（参加44チーム中）

女子40歳以上の部

第3位 大麻MVC（参加8チーム中）

- ・第6回道央MV大会（平成7年）

女子40歳以上の部

第2位 大麻MVC（参加12チーム中）

- ・第8回道央MV大会（平成9年）

女子40歳以上の部

第4位 飛鳥（参加16チーム中）

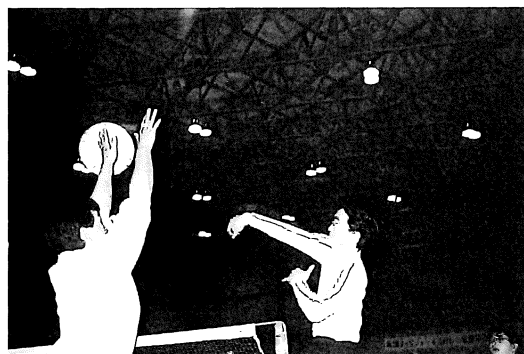
- ・第9回道央MV大会（平成10年）

女子40歳未満の部

ベスト8 EMC（参加46チーム中）

今後、もっともっと成績が残せるよう頑

張ってほしいと思います。



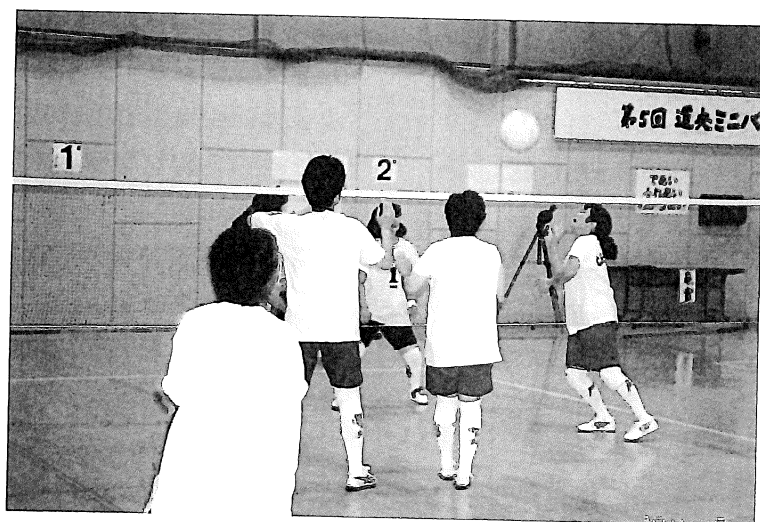
江別チャリティーミニバレー交流試合

私達が毎年行なっている事業の中にチャリティミニバレー交流試合があります。これは、江別近郊の市町村と交流試合を楽しみながら、少しでも江別の競技レベルの向上が計ればということで、初年度は練習試合形式で行われました。が、あまりにも多くのチームが集まったため、待ち時間も長く、これではまずいと、翌年から案内状を出してチーム数を制限して行なう形に変えました。参加料の方も、2回目までは特に決めずに募金という形で、大会当日、募金箱に入れてもらっていましたが、何しろ小銭がほとんどで、役員の集計作業も大変だということで、3年目から参加料を一人500円に決めました。集まった参加料の中から大会運営費を差し引いた残額を、社会福祉協議会を通じて、役立ててもらおうと始めた交流試合も、今年度は9回目になります。毎回5万円の金額をチャリティさせていただいています。平成7年だけは、阪神大震災の義援金として同金額を送らせていただきました。今後も、このチャリティミニバレー交流試合を通じて、少しでも多く、チャリティできるようになればと思っています。

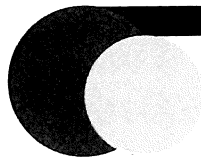
《今後の展望》

平成12年度は、例年どおりの事業{審判講習会（4月23日）、会長杯ミニバレー大会（5月21日）、第4回江別ミニバレー交流会（7月2日）、第47回江別市民体育大会（10月15日）、第9回チャリティミニバレー交流試合（平成13年1月28日）}の他に、『第11回道央ミニバレー大会』が、8月27日（日）、道立野幌総合運動公園のメインアリーナ、サブアリーナの全13面をフルに使って開催されます。参加チーム数約117チーム、選手、役員を合わせると約500人くらいが集まるこの大会を成功させるべく、役員一同、準備に追われています。前回、江別で行なったときは、市民体育館と大麻体育館の二会場で行ないました。会場が分かれている為、進行状況がつかめず、大変苦勞をしました。同じ大変さを味わいたくないと、今回野幌

総合運動公園のひと会場を使用して行なうことが出来る事に、大分気持ちの面では楽になっています。また、来年度は、協会設立10周年に当たり、記念式典、記念大会を予定しています。とりあえずは道央ミニバレー大会を無事に終わらせることが出来るよう全力で取り組まなければならない事は、言うまでもありません。今後の取り組みとしては、審判員のレベルアップがあげられます。B級公認審判員を増やすこともそうですが、一人一人が審判員としての自覚を持って、日々努力しなければならないと思います。また、協会員を増やしていくことも、今後の課題となるでしょう。ミニバレーのモットーである“出会い・ふれあい・分かちあい”を念頭におき、ひとりでも多くの人にミニバレーの楽しさを伝え、広めていきたいと思っています。



第5回道央ミニバレー大会



江 別 野 球 連 盟

設 立 平成24年5月20日
加 盟 平成25年4月26日

《現 役 員》

顧 問	北 城 鉄 雄
〃	高 間 専 造
〃	青 田 安 雄
参 与	藤 井 清左衛門
〃	秋 山 勇
〃	児 玉 末 治
〃	五十嵐 悦 治
会 長	田 原 藤太郎
副 会 長	吉 川 学
〃	今 井 利 秀
〃	中 村 敏 雄
理 事 長	伊 藤 清
副 理 事 長	水 野 健 二
〃	佐々木 一 男
総 務 部 長	鎌 倉 猛
総 務 副 部 長	加 藤 孝 和
審 判 部 長	和 田 信一郎
審 判 副 部 長	堀 節 雄
〃	高 橋 浩
〃	和 田 定 夫
常 任 理 事	鈴 木 俊 和
〃	堺 誠 司
〃	佐 藤 博
〃	高 橋 省 一
理 事	月 田 孝 一
〃	内 山 由
〃	新 正 史
〃	岡 本 晃
〃	山 口 修
〃	和 田 正 司
監 査	横 澤 彰
〃	伊 藤 俊 悦

《沿 革》

※野球連盟の創立※

戦後の物資不足のときスポーツがこれだけ発展するとは誰もが考えられなかったと同時に誰かが率先して復興ののろしをあげることも考え付かない状況であった。

しかし、世相もようやく安定し、昔から野球を愛し自ら野球をやった方々から誰というもなく集まったことも当然なことだと思います。

終戦後、当時の職場チームとして、王子製紙・江別町役場・土木機械工作所・北海道電力江別火力発電所、クラブチームは、北江クラブ・江別江陵・野幌富士・ライオン・レッドスター・コンドル・タイガース他連盟が結成され組織的な大会が開催されるまで、各チーム同志で試合の日程、審判等を決めて試合を行なっておりました。

そこで、野球が徐々に盛んになり、連盟結成の気運が高まり、昭和24年に同好会的に野球を楽しんでいた人達が相談した結果、当時、町で精肉店を経営され町議会議員もされていた三浦光三氏を会長に迎え連盟が創立された。

※江別飛鳥山球場開き※

昭和25年6月11日完成を見た町営飛鳥山球場のグランド開き野球大会は、4千人の観衆を集めて盛大に行なわれた。球場は万国旗に飾られ花火を合図にプラスバンドの吹奏でボーイスカウトを先導に

入場式が行なわれ、球場建設の功労者に、古田島町長より表彰状、道新本社および岩田合名会社より記念品の贈呈があったのち後藤助役の始球式で参加チームの試合が展開され各優勝チームに道新本社より賞品が贈られた。
(昭和25年6月13日北海道新聞より)

《活動の歩み》

※連盟の危機、開店休業と新聞報道※

昭和35年8月16日付けの新聞に連盟の役員、審判員各自が家業多忙のため事業を消化するにも役員、審判員が集まらなくなり、事業の推進が出来なくなったと報道された。

それまで、運営の資金作りに映画や楽団、劇団等で資金作りをしてきたが運営が行き詰まりこのままでは連盟を解散しなければならなくなる状態であった。

こうした事から役員会が開催され「この際登録するチームより登録料と各大会に参加する時は参加料を納めていただき、それを連盟の運営資金にし連盟の立直しをする時期ではないか。」との結論に皆賛同し再出発した。

※連盟創立30周年記念大会開催※

昭和53年9月3日連盟創立30周年記念大会が開催された。

この年は江別開基百年の記念すべき年でもあり、少年団チームの選抜と一般チームの選抜選手が紅白に分かれ、日頃鍛えた技術と技を遺憾なく発揮された。

また第三試合に地元フランチャイズの社会人野球日産サニー札幌と新生チームの札幌フライヤーズとの交流試合が開催され大会に花を添えた。

大会終了後中央公民館で記念式典及び祝賀会が開催され盛会に終了した。

※北海道軟式野球連盟石狩支部発足※

平成2年4月に北海道軟式野球連盟の26番目の支部として石狩支部が誕生した。

石狩支部の加盟市町村は、江別市・石狩町・当別町・新篠津村・厚田村の五市町村が加盟、チーム数も学童32チーム、一般80チームで発足した。

支部大会は、一般で天皇賜杯大会を始め7大会、学童で全道少年大会他2大会が開催されている。

これまで石狩支部では、東日本(2部)大会を始め全道少年大会の北海道地区大会を主管し、平成11年11月27日に支部結成10周年記念式典と祝賀会を江別市にて開催している。



役員及び審判員

※連盟創立50周年記念式典開催※

平成10年11月8日江別市コミュニティセンターで連盟創立50周年記念式典・祝賀会が江別市長を始め多数の来賓、関係者が出席し盛大に開催された。式典では、野球関係者の物故者に対し黙祷を捧げ、青田会長の式辞で式典が開会された。

表彰式では、感謝状受賞者5名、表彰状受賞者6名、チーム表彰8チーム、特別表彰受賞者5名が栄を受けた。

これら受賞者を代表し前連盟会長の高間専造氏より謝辞をいただき式典を終了した。

式典に引き続き同会場にて祝賀会が開催され、野村義次道議会議員の祝杯で会

が開催された。

アトラクションでは、見晴台の「豊太鼓」が出演し会を盛り上げ、森敏捷道議会議員の万歳三唱で会を締め括った。

また、創立50周年記念として記念誌「あゆみ」が作成され、関係団体、関係者等に配布された。

《現 況》

※クラブチームの登録台頭※

平成12年度連盟総会が4月25日に開催されその年度の登録チームが登録された。

平成12年度は、25チームの登録があり、その内職場単位チームは10チームで残り15チームはクラブチームである。

社会経済成長時代は、職場単位チームが8割以上が占めており、職場単位チームにも活気があふれ登録チームも50チームを超えていた時代もあった。

近年の社会経済不況時代になり職場単位チームが次々と消えることは、連盟にとりましても非常に淋しいかぎりです。

しかし、クラブチームは野球好きな仲間が集い、クラブ員全員で会費を支出し楽しく野球をやろうとする集団のため、野球にかける情熱は物凄く感じるものがある。

しかしながら、各自職業が異なるため試合日程の調整と連絡等にチーム責任者は大変苦勞していると聞いている。

また、事業を運営している連盟にとっても、土曜日や祝祭日に試合日程を組み入れたいが、クラブチームが多数を占めていることから日曜日のみの開催しか日程が組めない状態であり、日曜日が雨天等で試合が延期された場合は調整に苦慮している状況にある。

※グラウンド確保に事務局苦慮状態※

各大会を開催するグラウンドの関係については、年間事業に勤労者体育大会・市民大会の開催があり、広く市民に呼び掛け登録チーム以外にも案内をしている関係から、出場チームも30チームを超えることがある。

一般の大人が使用出来る野球場が現在一ヶ所（河川敷グラウンドは遺跡発掘調査のため当分の間閉鎖）のため、多数のチームが参加する大会では、1、2回戦を開催するには、2会場が必要であり事務局では、中学校のグラウンドや民間会社のグラウンドの確保に充たって日程調整に苦慮している。

※連盟主催大会関係※

- 春季大会兼道民スポーツ大会参加予選大会
- たそがれ野球6月大会
- たそがれ野球7月大会
- 勤労者体育大会野球大会
- 江別市民体育大会軟式野球大会

※道軟連石狩支部大会関係※

- 高松宮賜杯（1部）大会～Bクラス
- 高松宮賜杯（2部）大会～Cクラス
- 天皇賜杯（南大会）大会～Aクラス
- 国民体育大会（一般B）～ABC
- 国民体育大会（成年）
- 東日本大会（1部）～Bクラス
- 東日本大会（2部）～Cクラス
- 全日本学童軟式野球大会
- 全道少年軟式野球大会



市民大会

《今後の展望》

※市営球場に夜間照明設備の設置を※

現況でも記載しているが、現在登録チームが職場単位チームよりクラブチームが多数を占めており、今後もこうした状況が続くものと思われる。

クラブチームに基準を合わせ試合日程を調整すると日曜日のみの日程調整になることが多くなる。

また、道立野幌総合運動公園に硬式・軟式の野球場が設置されており、これら施設を利用した北海道大会規模の野球大会が常開催されており、市営球場もこれら大会の会場になることが多く、連盟主催大会と重複することが多く見られ苦慮している。

こうしたことを解消するために、市営球場に夜間照明設備の設置要望書を市教育委員会に提出している。この夜間照明設備が設置されたことにより、平日の夜間球場使用が可能になり、日曜日のみの開催にこだわらなくなり、大会数も多く開催できると思われる。

また、この施設を利用して、野球大会のみに限らず各種スポーツ大会の開催や各種イベント関係の開催にも活用できると思われる。

北海道の短い夏の期間をこれら施設を市民が利用し楽しく開放できることを期待している。

※審判員の高齢化※

野球の試合を開催するためには、選手だけでは野球の試合を進行することは出来ません。

誰でも知っているとおりの審判員が必要なことは知っていると思いますが、連盟の審判員が不足しているのと高齢化しているのが現状です。

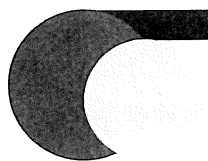
現役審判員の最高年齢74歳を筆頭に40歳、50歳台の審判員が多く登録されているのが現実であり、連盟審判部にとっては、若年後継者が入部せず頭を痛めている。

審判員は、試合を演出する演出家であったり、脚本家であったり、選手と一体となったプロデューサー的役割をもっております。

自分が担当した試合の進行がスムーズに運んだときの喜びや自分のミスで試合の流れが変わったときの反省とか、その時々学ぶことが大変多くあります。

また、審判員4人の呼吸が合わなければ試合の流れが変わることがあり、大変重要な役割を担っております。

こうした役割をもっている審判員になりたいと思っている方は、ぜひ連盟審判部に申し込み願いたいと思います。



江別市陸上競技協会

設立
加 盟

昭和24年4月 1日
昭和25年4月26日

《現 役 員》

名 誉 会 長	高 橋 行 雄
名 誉 顧 問	佐 野 猛
会 長	角 谷 正 宏
副 会 長	加 藤 敏 夫
〃	恒 遠 一 男
〃	松 本 紘 一
顧 問	渡 辺 登
理 事 長	最 上 光 弘
副 理 事 長	赤 尾 全 廣
総 務 委 員 長	三 宅 久 雄
総 務 監 事	田 村 隆 子
資格審査委員長	最 上 栄 子
競 技 委 員 長	奥 谷 忠 浩
審 査 委 員 長	小 山 勇 夫
強 化 委 員 長	佐 藤 茂
普 及 委 員 長	小 林 博 美
普 及 委 員	川 村 龍 彦
〃	谷 村 宏 之
〃	藤 波 好 英
〃	東 谷 恭 子
〃	鈴 木 文 子
記 録 委 員 長	茶 木 秀 昭
記 録 幹 事	山 西 裕 子
施 設 委 員 長	引 地 久 雄
監 査	小 玉 博 義
〃	加 藤 倬 英

《沿 革》

昭和23年	全野幌体育連盟の愛好者が集い創立
昭和24年	江別陸上競技連盟を結成し、10月9日第1回マラソン大会を開催する。競技場にしても昭和24年創立当時町に陳情現飛鳥山多目的公園（当時イモ畑）に競技場の位置を決定してから第三種競技場として道陸協の検定を受けパスをし日本陸連から正式に公認競技場として認定されるのに6年間、また再公認の昭和33年競技場施設の整備不良のため公認取消しを言い渡され、100万円の競技場整備費の要求に7万円しか整備費が認められず、陳情に陳情を重ね競技場整備を完了したこともあります。
昭和25年	江別陸上競技連盟を協会に改名
昭和30年7月	飛鳥山グランド（第三種公認）
昭和37年	北海道陸上競技協会へ第16番目として加盟

平成9年2月 道央陸上競技協会に加盟

平成9年4月 江別市陸上競技協会に改名

《活動のあゆみ》

江別選手権

町民体育大会（現市民体育大会）

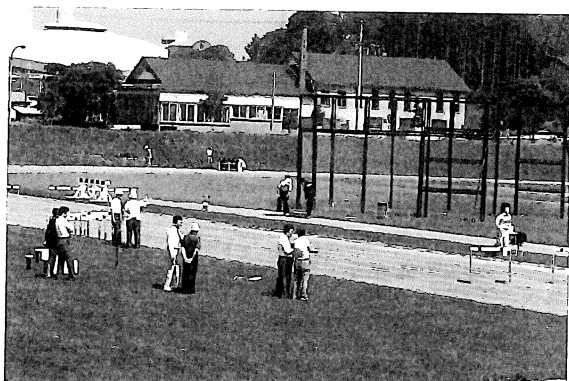
職域対抗陸上

加盟団対抗戦

北海道女子陸上競技選手権



96.全道中学陸上競技大会野幌総合運動公園陸上競技場



昭和60年の飛鳥山陸上競技場



市内中体連



市内中体連



旭札幌伝（女子）江別←→札幌間 開会式



旭札幌伝スタート

《現 況》

平成9年4月より道央陸上競技協会の下部組織として活動する。

市内の小学生、中学生の児童生徒をもって組織し、陸上競技の振興と普及を通じて心身のバランスのとれた人間性の育成を目指し、明るく豊かな適応能力を高めることを目的とし、平成11年4月江別市ジュニア陸上競技クラブ（E・J・R・C）を設立する。

道立野幌総合運動公園陸上競技場において5月より11月迄の期間でE・J・R・Cの練習会と、石狩管内の小学生選手権、市民体育大会、原始林クロスカントリー大会の後援、原始林マラソン競技大会兼市民マラソンの主催を行っております。電気時計の設置がない為に現在は主として千歳市の青葉陸上競技場において活動しています。

《今後の展望》

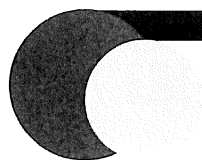
現在は市内に陸上競技場が1ヵ所しかなく、その競技場（野幌総合運動公園陸上競技場）も電気時計の設置がないために中学生以上の公認大会が行えない現状です。

又、小学校の指導者が不足のために江別市ジュニア陸上競技クラブを設立しても小学生の参加者が不足し、中学生が充実している次第です。

その為今後は更に改善・努力を行い、全市内より陸上競技の愛好者の充実に務めて行きます。



原始林マラソン大会懇親会にて



江別ハンドボール協議会

設 立 昭 和 61 年 6 月 12 日

加 盟 昭 和 61 年 6 月 20 日

《沿 革》

平成元年、本道において開催された第44回国民体育大会（はまなす国体）では、ハンドボール、水泳（飛び込み・水球）、テニス、ホッケー、ラグビーフットボールの5種目が本市で開催されております。

このような背景の中で、昭和60年に市職員を中心にして有志が集い、市民にハンドボール競技に関心をもってもらい、知ってもらうことが、3年後に迎える国体開催を支援するためには必要ではないかと協議を行い、報道機関などに協力を求めハンドボールを一緒にやっていく仲間を募ったところ、高校の先生、地元企業に勤務するサラリーマン、近郊に在住する郵便局職員など学生時代などにハンドボールの経験を有する人たちの輪ができ、市内で初めての社会人ハンドボールチーム「江別ハンドボール愛好会」が結成されました。

ハンドボールは、スピード感あふれる攻防と豪快な「スカイプレイ」などが随所に見られるパワフルな競技であります。当時の市内におけるハンドボール競技は、大学、高校のハンドボールチームはもとより、指導者もいなく、施設環境面でも市民体育館にゴールとボールが用意されましたが、競技コートのラインマークは設定されていないなどの状況があり、人材・施設環境など育成・整備が求められておりました。

このような中で、チームを結成した仲間を中心に、ハンドボール競技の国体開

催を契機として、ハンドボールの競技人口の拡大と選手の発掘育成、指導者の養成、国体運営に協力することを目的として協議会を結成することになりました。

〈結成時の役員〉

会 長	池田 春男
副 会 長	草野 新平
理 事 長	池田 和司
副理事長	安藤 徹
理 事	村上 良
理 事	伊藤 武
理 事	菊地 博志
理 事	荻谷 正
監 事	西島 洋介
事務局長	小原 博

《活動の歩み》

市内のハンドボール競技の普及、指導者養成などのため昭和61年度から大会、講習会などを開催しております。

昭和61年度の主な事業を挙げると

- (1) 7/8 江別ハンドボール協議会結成記念大会
- (2) 8/30 ハンドボール・スクール（初心者のための技術指導・リハーサル試合）
- (3) 3/26～30 北海道競技力向上ジュニア強化ハンドボール競技長期強化合宿への協力
- (4) 3/28 ハンドボール・ジュニアスクール（初心者のための技術指導・リハーサル試合）

これらの活動を通じて競技人口の底辺

の拡大、市民への普及の推進を図ったところ。

また、63年国体リハーサル大会として全日本教職員ハンドボール選手権大会の運営にも協力しました。

当協議会は、平成2年度まで各種大会・講習会等を開催したところですが、はまなす国体の支援、酪農学園大学、札幌学院大学にチームが結成されるなど協議会設立時の一定の目標が達成され、また、協議会運営を行う後継人材などの課題があり協議会としての活動は休止を行い、それぞれの活動を通じ、ハンドボール競技の普及活動などの取り組みを行うこととなりました。

《現況・今後の展望》

その後、それぞれで活動を続けてきておりましたが、平成8年に協議会を運営した仲間が中心となり札幌圏の社会

営した仲間が中心となり札幌圏の社会人・大学チームで構成する札幌社会人ハンドボール連盟を設立し、市民体育館、野幌運動公園体育館などを会場として、札幌圏ハンドボールリーグなどの大会を開催し、現在にいたっておりますが、本年開催時には、市内チームを含め29チームの参加を得ております。

また、本年4月1日現在、市内のチームとしては、男子は酪農学園大学、札幌学院大学、野幌高校、女子は酪農学園大学、北海道浅井学園大学が活動しております。

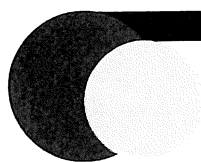
いずれにしても、日本では歴史が浅く市民に馴染みが薄い競技なのかもしれませんが、大学・高校のOBなどを主体にしたハンドボール競技の仲間の輪の拡がりができ、本市を拠点とした普及活動を推進していく土壌が築かれることを願っております。



はまなす国体「みなぎる闘志」



「炸裂するパワー」



江別ホッケー協議会

設立 昭和61年6月10日
加盟 昭和61年6月20日

《役員》

名誉会長	岩田政勝
会長	池田春男
副会長	小田島昌三
理事長	林克明
副理事長	高橋信行
理事	佐々木英二
〃	長光雄
〃	斎藤和夫
〃	黒済亮次
〃	菊地慶治
〃	渡部勝英
〃	川田卓司
監事	鈴木斎

の普及発展に尽力された岩田政勝氏の長年の夢とも言える「国体」の地元開催に向けた熱意と努力〔道立野幌運動公園に造成された人工芝専用グラウンドの誘致等〕に少しでも報いるため又「はまなす国体ホッケー競技」の成功を願い、競技の開催支援及び普及啓発更には地元選手の育成等を図ることを目的として設立した協議会であります。当時当市には少年団以外にホッケー競技にかかわる組織が無く「はまなす国体」開催に向けた地元の協力支援組織としてホッケー競技に関心の高い市内に居住する競技経験者や少年団の父兄等で組織されたものであります。

《沿革》

ホッケー競技は16世紀頃にイギリスで発祥したと言われる世界で最も古いスポーツの一つであります。

当時は騎士の運動競技として気品と格調を重んじた厳格なスポーツだったと言われております。

北海道においてもホッケー競技は古くから行われており、昭和20年代中頃から30年代後半にかけてはホッケー王国と言われた程に隆盛を誇り、数多くのオリンピック選手等を輩出し全国に君臨した時代もありましたが近年は他府県の台頭が目覚しく低迷を余儀なくされているところであります。

その北海道ホッケー界を統括し半世紀以上に亘り道協会長としてホッケー競技

《活動の歩み》

昭和61年に協議会設立後は、「はまなす国体ホッケー競技」の地元開催に向けた普及活動として北海道ホッケー協会が開催した青少年ホッケー教室の支援協力、北海道スポーツ少年団ホッケー交流大会の運営協力、小中学生を対象とした協議会長盾争奪ジュニアホッケー交流大会の創設、市民体育大会、インドアホッケー交流大会等の競技会の開催。

又、昭和62年に当市で開催された「全国高等学校ホッケー選手権大会」の競技・運営にかかわる協力。

昭和63年には国体のリハーサル大会として開催された「全国実業団ホッケー選手権大会」の競技・運営にかかわる協力

等、平成元年の「はまなす国体」本番に向けた各種大会等の運営支援、又小中学生を対象としたホッケー交流大会等を開催してホッケー競技の普及啓発を図った。

こうした地道な努力が実を結び平成元年の「はまなす国体ホッケー競技」の開催時には、開会式のセレモニーに地元ホッケー少年団員による各県代表チームに対する花束贈呈を始め、本番の競技には一般男子の部に1名、少年男子の部に4名の地元少年団出身選手等を送ることが出来、これら選手の活躍により種目別天皇杯総合2位の好成績を修めることが出来、当協議会の設立目的を十分に果たしたものと考えております。

「国体」終了後もホッケー競技の普及啓発のため小中学生を対象とした各種のジュニアホッケー交流大会、市民体育大会の開催継続等について努力して参りましたが「国体」を頂点とした盛り上がりも月日の経つ毎に薄れ、競技自体の知名度や、近時では少子化等の影響もあり、団員の確保も難しくなり2団あった少年団も逐次休団を余儀なくされ、現在では各種競技大会等の開催もままならず、協議会としての十分な事業活動が困難とな

っておりました。

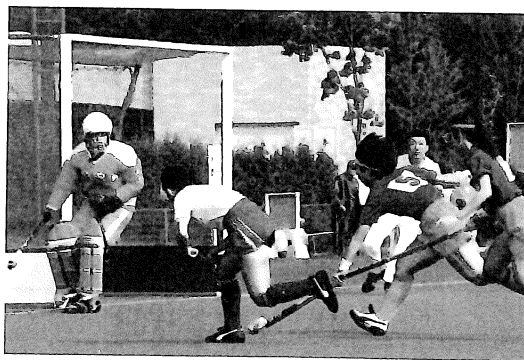
《現況・今後の展望》

前段の、活動の歩みでも触れましたが当協議会は「はまなす国体」の成功を目的として、その普及啓発を図って来たところであり、一時期その芽生えが見えた時もありましたが実に成るまでに至りませんでした。

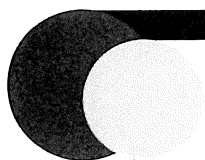
道内には北海道ホッケー協会の傘下には社会人・大学・高校等のチームがあり野幌総合運動公園（人工芝コート）等を主会場に競技活動が行われております。

当市にも現在札幌学院大学（男子）と江別高校（女子）の2チームが活動しております。江別高校（女子）は平成6年の創部ですがインターハイや「国体」の北海道代表として活躍するまでに育っております。

しかしながら現状では指導者不足やホッケー競技の知名度等の問題もあり前記チーム以外に新たな競技団体等が結成される見込みもないことから協議会として平成10年度で休止しております。



守る、攻める、奪取！



江別市ラグビーフットボール協会

設 立
加 盟

昭和61年6月13日

昭和61年6月20日

《沿 革》

平成元年、本道において開催された、第44回国民体育大会（はまなす国体）が本市で開催された。背景として昭和61年に選手の発掘、指導者の育成、国体運営に対する協力を当面の活動として、市民に馴染みの少ないスポーツであったが、市民窓口の意味からも未組織協会の設立を江別市体育協会の立場から指導を受け、設立することになりました。

〈組織時の役員〉

会 長	檜崎 昇
副会長	池田 春男
理事長	信清 邦雄
理 事	広瀬 善修
〃	竹村 広美
〃	粕谷樫一郎
〃	眞崎 浩二
監 事	山内 一俊
事務局長	信清 邦雄

《活動の歩み》

市内のラグビーフットボール競技の普及、指導者養成など昭和61年度から強化事業大会、講習会など開催して来ました。昭和61年度の主な事業を挙げると

- (1) 7/18・ラグビーフットボール協会結成大会
- (2) 9/21・ラグビーフットボール大学選手権大会
- (3) 9/27・ラグビーフットボール大学・高校対抗戦
- (4) 10/2・ジュニア選手権大会
- (5) 11/5・ラグビーフットボール江別ラグビースクール（教室）

これ等の活動を通じ、競技人口、底辺の拡大、市民への観戦案内とラグビースクールの開催に努めて来ました。ラグビー教室では、竹村先生に指導をお願いし、大麻西公園で34名の参加を得て「強い体力、強い精神を養う」をモットーに激しい練習が行われました。

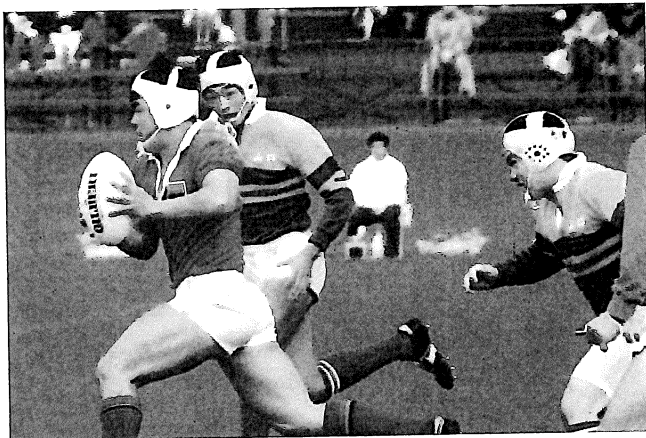
以降、平成元年7月まで大学対高校、ジュニアの技術力向上試合等を繰り返し計画し実施してきましたが、初期の目標は達成されたかと思います。

《現況・今後の展望》

ラグビーフットボールは、指導者不足、格闘球技と言うことか？市内に経験者も少なく、一般に市民に普及は難しく、大企業でも取り組みづらいのが現状かと思っています。

しかし現在は、札幌学院大学、酪農学園大学の2チームと、高校では大麻高校、立命館慶祥高校が、札幌地区のそれぞれの組織に加盟し活動が続けております。

ラグビーフットボール競技は、激しいタックルや、スクラム合戦等男性的な競技ですが、将来社会人、大学OB会等でクラブ等が出来て、再び協会活動が出来ることを願い諸般の事情で、平成元年度末で休止することにしました。



ゴールめがけて突進！



「はまなす国体」

江別市体育協会50年に想う

江別市体育協会副会長 池田 春 男

江別市体育協会が創立50周年の記念すべき大きな節目を迎え、設立以来今日まで協会の基盤づくりや、発展に寄与された江別市を始め、歴代役員、先輩各位に心から感謝と敬意を表する次第です。

顧みますと、昭和25年に8競技団体で江別体育連盟が結成され、市制施行により体育協会に改称、55年の創立30周年時には15団体の加盟を数え、今年の50周年では24団体が活動しており、市政の進展と人口の増加に合わせて、体育協会は市民のスポーツに対する期待に応えながら発展して参りました。

体協設立初期の佐野元副会長の話では、市内唯一の体育施設と言えば飛鳥山公園に陸上競技場と野球場があっただけで、屋内競技施設の整備が急がれていたこと、また、清水元副会長は青年時代に吉葉山や千代の山など後の大横綱と土俵上で競いあった話、岩田元会長からは学生時代のホッケーの話題やホッケー少年団の設立、さらに今後におけるスポーツ指導者確保の必要性等々、施設整備、競技力の向上、指導者の育成について情熱的に語られていたことが思い出されます。

私は、32年頃から協会と関わりましたが、40年には体育指導員として42年からの学校開放事業や43年からスタートした飛鳥山野球場のスケートリンク造成に、指導と運営委員として参画したほか、体協の初代事務局長として施設整備と予算の確保に奔走した記憶があります。

施設整備では、時代の要請に応じて46年に青年センター体育館が完成し翌年には市民待望の屋内プールが併設され、53年には江別市の開基100年と市制施行25年

記念事業として、市民体育館が完成しました。こうした屋内施設の整備によって、スポーツの振興は大きく進展することになり、今までは開催出来なかった全道、全国レベルの大会が身近なものとして市民に紹介され観戦の機会が増加し、市民皆スポーツ、生涯スポーツへと発展することになりました。

55年には「第44回国民体育大会（64年北海道国体）」の開催が内定し、江別市民あげて道立運動公園の誘致のために署名運動や陳情活動が展開された結果、道内最大規模の64ヘクタールの面積と、180億円の巨費を投じた「道立野幌総合運動公園」の建設が江別市に決定し、57年に着工し61年に完成を見ました。

翌62年には、冷夏の中での高校総体、63年にはプレ国体、そして平成元年の「はまなす国体」の開催へと繋がり、屋内、屋外の体育施設の近代化とともに、体協の組織や運営にも大きな影響を与えたと思います。

国体開催に当っては、61年度の体協総会で国体運営支援のための専門委員会制として、三副会長の担当制と常任理事の所属を決め、調査、実施の円滑に努めたほか、特に江別市にはあまり馴染みのないラグビー、ホッケー、ハンドボール競技については、高校教員の市内配置を岩田会長に私が同行して関係する協会や道教育委員会に要請したことが思い出されます。

しかし、何といたってもスポーツを愛する多くの市民の協力があって「大自然の中で選手の心に残る大会」として盛会裡に終ることが出来たと思っております。

以下、思いつく儘に私と体協の関わりさらには歩みについて触れて見ますと、日体協50周年記念事業として昭和37年からスポーツ少年団の設置が推進され、41年頃と思いますが常任理事兼事務局として、大麻剣道及び角山柔道の両少年団に団旗授与に出向いたこと、予算獲得のために少年団窓口を一時教育委員会に移し、体協本体の予算額確保の拡大に努めた経緯もありました。

特別会計の思い出では、青年センターに売店がオープンし、財源確保対策として体協事業にどうかと総会で話題になりましたが、市民体育館開館後に市教委のご理解によって、自動販売機の委託設置販売やバドミントンのシャトル、卓球のボールなどの販売による収益で特別会計を設置し、体協独自で事務局職員の雇用など自立への一步を踏み出しました。

また、57年度からは自販機収入は一般会計扱いとして、収益をスポーツ振興基金特別会計に繰り入れる形に整備されたことは、当時の監事として感謝しております。

さて、体協の法人化については、岩田元会長（現顧問）が、札幌市体協が54年当時に法人組織としたことで、江別も法人化することの必要性を訴え自ら基金設立にご寄付いただき、62年と平成2年に森道義のお世話で道教委を訪れたことに始まります。

その後、市教委が前面的に窓口となり規約整備（寄付行為）に努力され、体協にも検討委員会を設置し、3千万円の基本金の2分の1を体協が負担することに決まりました。

基金の造成に当っては、58年から60年まで市から3百万円の助成をいただき、自販機収入からの繰り出し、各大会費用の節減、加盟団体を中心とした募金活動、

さらには資金確保のためのビールパーティの開催などによって目標額に達し、市と体協が1千5百万円ずつの負担で平成4年に、めでたく「スポーツ振興財団」の設立となりました。

また、財団設立と合わせて懸案事項であった体協の事務局長職について、財団の課長職に担当していただくことになり、20年来の課題が解決されたことは喜びに耐えません。

現在財団は、市民皆スポーツ、生涯スポーツ、スポーツ底辺の拡大さらには健康を考える市民の参加などのさまざまな事業を展開しており、財団設立の成果の大きさに拍手を送りたいと思います。

今年、体育協会設立50周年という記念すべき年を迎えましたが、社会環境、学校環境、少子・高齢社会への対応、市民意識の変化等々、さまざま面で時代の大きな変化を実感する年ではないかと思います。そのため、体協がスポーツを通じてどのような役割を担うのかが問われるものと考えます。

ハード面では、全天候型体育施設や利用時間の拡大を図るための夜間照明付き広場などの整備、ソフト面では指導者の育成と確保が望まれています。

こうした取り組みについて、50周年を契機として「着々寸進洋々万里」を合い言葉に、具現化されるよう努められることを期待し、体協の一層の発展と飛躍を心から祈念して私の拙文を終わります。



「柔道で得た心と体の変化」

佐々木 五月
(旧姓 渡部)

私はちょっとしたケガがもとで柔道を始めることになりましたが、その前に私は母の勧めで「お琴」を習うことになっていました。

当時の私には到底不釣り合いだったのですが、「髪を結い上げ、綺麗な着物を着て、優雅にお琴を弾く」そんな自分の姿を想像し「いいかもしれない」と心踊らせてみたものの、やはり性格に合わない事には縁がないらしく、一度も弦を弾く事なく「柔道」の道を進んで行ったのです。

始めた当初は柔道と称して有り余るエネルギーを相手にぶつけ、少しずつ技を覚えてくると、自分自身が更にパワーアップした様に思え、柔道をする事が楽しくて仕方ありませんでした。

がしかし、楽しい事はそう続くものではなく「試合に出る」という目標が出来てからは、先生の顔から笑顔が消え、そのかわりに激励の竹刀が先生にお供する様になったのです。

練習は決して楽なものではありませんでしたが、強くなりたいという気持ちが強かったことと、自分自身の変化を肌で感じ、大きな充実感を味わっていたことで、厳しい練習にも耐えられたのだと思います。

何より変わったのが体付きであり、風呂上りには鏡の前に立ち、いわゆるボディビルポーズをとって、腕の力こぶ・腹筋の割れ・太股の盛り上がりをチェック

クする事が私の密かな楽しみでありました。

今ではとても戻るに戻れないので、当時のマッチョな写真を撮っておくべきだったと、チョッと後悔しているのです。

私自身一番心に残っているのが、ウィーンで開かれた世界選手権であり、私にとっては初めての海外で、試合に勝った負けたという記憶より、聞き慣れない言語、味わったことのない食べ物、歴史ある建物、全く違う習慣等を体験することで改めて世界の広さを感じ、単純な考えではありますが「また海外に行ける様に頑張ろう」と目の前の大きな餌に向かって気持ちを新たにすることを覚えています。

しかし私がここまでやってこれたのも、月並みですが、あらゆる面で支援して頂いた方々や協力を惜しまず陰で支えてくれた両親、共に苦しみ、喜びを分かち合った良きライバル、そして無から有を引き出して頂いた恩師のお陰であり、今のこうして私があるのも多くの方の力添えや励ましがあったからと思っています。

今後は私を育ててくれた柔道に、微力ながら恩返しができればと思っています。

佐々木 五月 (旧姓 渡部)

【経歴】

生年月日 昭和41年 5月17日生

出身地 江別市

最終学歴 北海道女子短期大学

職業 公務員

昭和60年

全日本女子柔道体重別選手権

(-56kg級) 2 位

昭和59年

世界女子柔道選手権 (ウィーン) 出 場

福岡国際女子柔道選手権 3 位

【柔道経歴】

昭和54年～昭和61年

全道女子柔道体重別選手権 優 勝

昭和60年

フランス国際女子柔道選手権 出 場

福岡国際女子柔道選手権 3 位

昭和55・57年～昭和62年

全道女子柔道選手権 (無差別) 優 勝

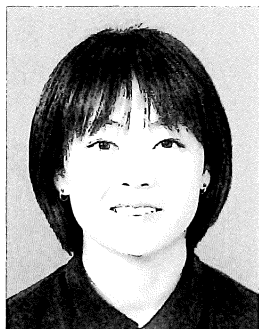
昭和58・59年

全日本女子柔道体重別選手権

(-56kg級) 優 勝



世界選手権出場時、激励に来てくれた山下さんとホテルにて撮影



「柔道と私」

枝元 真実子
(旧姓 荘司)

私が柔道と出会ったのは、小学校二年生の時。一つ年上の兄が、出来たばかりの町道場を見学に行くというので、それに付いて行ったことに始まりました。習う気など全く無かった私でしたが、先生（私の恩師である佐々木先生）の「女の子もいるんだけど、やってみないかい。」の一言に、すっかりその気になったのです。

習い始めた頃は、家族的な雰囲気的道場で、体を動かすことがただ楽しくて、そして、少年団対抗の試合に出してもらえるようになってからは、男の子を投げて試合に勝つことが・・・という風にどんどん柔道の楽しさに魅せられていったように思います。小学校入学当初は、男の子に泣かされていた私でしたが、柔道を始めてからは、性格も外向的になっていきました。

本格的に、競技としての柔道に取り組むようになったのは、小学校の卒業式を欠席して出場した全道選手権で、あっさり一本負けをしてからでした。何とかその大会で優勝し、全国大会に出場したいという思いから、真剣に練習に取り組むようになりました。練習と並行して減量したこともあり、中学生の頃には、給食何時間も食べずに保健室で寝ていたり、すっぱいガムを食べて、唾液まで出していたことも、今ではなつかしい思い出です。

選手としての私は、決して器用ではなく、一つの技術を習得する迄には、何度も反復練習する必要がありました。又、

試合でも思うような成績が残せず卑屈になった時期もありました。その頃の写真を見ると、無理に作ったひきつった笑顔の自分がそこにいます。柔道着を脱ぎ十年以上たった今、その頃のことを思い出すと、そんな私を根気強く、指導して下さった先生や、支えて下さった方々に感謝せずにはられません。

柔道を通して私は沢山のことを学びました。私の内面にある物の考え方や、感じ方の基礎は、柔道を通して作られたといっても過言ではありません。これからは、スポーツの楽しさや素晴らしさを、自分の職業である教師という立場から、そして、一人の親として子供たちに伝えていけたらいいなと考えています。結果も大切ですがそこに至るまでの過程をしっかり見守ってあげられる教師であり、親となれる様に頑張っていきたいと思います。

○主な大会での成績

- ・全道体重別選手権優勝 7回
- ・全道選手権（無差別）準優勝 2回
- ・全日本体重別選手権3位 2回
- ・第1回全日本女子柔道団体優勝大会
優秀選手賞

「私と中国武術」



全日本強化選手 山 岸 正 史

誰もがそうであるように、スポーツを始めた時は初心者であり、その競技のトップ選手達を雲の上の存在であるように思う。私は今でこそ、全国大会に出場し、全日本強化選手に選ばれてはいるが、私も昔は初心者であり、今の状況など想像もつかなかった。しかし、人間は良いイメージを保ちつつ、その努力を惜しまないならば、当初想像もしていなかったような事に会えるようになる。

私が武術に興味を抱き、習いたいと思うようになったのは、幼少の頃であった。しかし、当時は武術を教えてくれるような人も場所もなかった。もし、私がそこで諦めていたならば、今の私は存在しないであろう。私は諦める事なく、その想いを抱き続けた。そして、ついに数年後、願いが叶い、武術を習う機会を得た。私は自分なりに、一生懸命練習に打ち込んだ。小さな空き時間でも、習った動きをやったり、体を動かさせない時でも、先生の動きを頭の中で繰り返しイメージした。不思議な事に、体を動かさせない時でも、頭の中で細部にわたりイメージをすると、上達している時がある。頭の中で良く動けない時は、実際に動いても上手くできないものだ。

…そのように練習をして一年がたち、北海道大会に出る事になった。初めての大会であったが、運良く一位になれた。自分なりに一生懸命に取り組んだ事に対して、良い評価を得られる事は、非常に嬉しい事である。そして、武術を始めて2年目の夏、

私は全国大会に出場する事ができた。私にとって、全国の舞台に立つという事は初めてである。

私は、出場の数ヶ月前から常に、その状況をイメージするように心がけた。…名前が呼ばれ、コートに立ち、演武をする。その数分間を何回も繰り返し、繰り返しイメージをした。その結果私は、初出場ではあったが二位という好成績をおさめる事ができた。

武術の門をくぐった時の私には、想像もできないような結果である。

私が毎年全国大会に出場して思うのは、全国のレベルは毎年確実に上がっており、その空気に触れていなければとり残される恐れがあるという事だ。スポーツ等、何でもそうであるが、その技術は、日進月歩をとげている。だからこそ、選手は常にレベルの高いものに触れ、変化を感じなければならぬ。そうする事により、自分も、周囲もレベルが上がっていく。それが、競技のレベルを上げる事にもつながっていくのではないか。

私が武術を始めて9年になるが、それでもまだ技術が完全だとは言い難い。武術は、実に奥が深く、又、様々なものを与えてくれる。私はより一層練習に打ち込み、もっと武術を理解し、レベルの高いものに触れたいと思っている。



北京強化合宿 張 顕明氏(中央) 全日本強化合宿選手と

ジュニアオリンピックカップ

1993	2位
1996	4位
1997	2位
1998	6位
1999	3位

全日本武術太極拳選手権大会
24式太極拳Cクラス【39才以下】

1997	6位
総合太極拳規定【国際規定】	
1998	6位
1999	4位
2000	6位

「江別中央バレーボール少年団の足跡」

江別中央ジュニアバレーボールスポーツ少年団
(現日本小学生バレーボール連盟指導普及委員長)

工 藤 憲

江別市体育協会設立50周年おめでとうございます。

体育協会がこれまで江別市のスポーツの振興に寄与した業績は計り知れないものがあります。

江別中央バレーボール少年団も体育協会のご支援を受け今日まで活動してきました。心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。

江別中央バレーボール少年団は、昭和60年5月16日に誕生しました。

まだ小学生バレーボールが現在程盛んでなかった当時、バレーボール少年団を創設するのは、なかなか大変なことでした。それでも、父母、バレーボール協会、体育協会、社会体育関係の皆さんの暖かいご支援を頂き、男子チームを「ガッツ」、女子チームを「ジャンプ」と名付け、活動をスタートしました。

ゼロからの出発ということで、口ではいえぬ苦労も多かったのですが、バレーボールを通して人間教育をしようという指導者の考えに賛同して下さる方が日に日に増えていったのは、本当に心強かったです。

「全員全力」を合言葉に、全国大会出場を目指して練習に明け暮れました。

厳しい練習に耐えて選手は本当によく頑張ってくれました。

選手の素晴らしい頑張りで、創部わずか1年で南北海道大会において、男女共優勝し、第6回ライオンカップ全国大会に出場することができました。

初めての全国大会で、選手は暑さにも負けずよくけんとうしました。女子は予選リ

ーグ突破の後決勝トーナメントの初戦で敗退しましたが、男子はベスト16に入り、フェアプレー賞、又ブロック賞などの個人賞も獲得しました。

それから男子は6年間に5回、女子も3回の全国大会出場を果たし、全国に江別中央ガッツ、ジャンプの名を轟かせました。江別中央で育った選手達は、中学校、高校でも活躍し、男子一期生は東海第四の主力選手として全国優勝の原動力になりました。

その後、指導者の転勤、交替期に入り、一時低迷気味でしたが、平成6年から新しい指導体制の下、復活を目指しての挑戦がはじまりました。

平成8年の第16回ライオンカップではジャンプが久し振りの全国大会出場を果たし、全国3位という快挙をなしとげました。その後ジャンプは4年連続全国大会出場を果たし、北海道では敵なしのチーム力を誇っています。

男子のガッツも第18回、20回大会と南北海道大会に優勝し、全国大会出場を果たしました。第2期の黄金時代を迎えたといっても過言ではないと思います。

初出場の時は江別をコウベツと読まれたこともありましたが、今や、小学生バレーボールでは全国の名門チームとなっています。

これも選手の努力はもちろん、江別市体育協会を始め今日までチームを支えて下さった多くの皆さんのお陰だと思っております。ありがとうございます。今後も小学生バレーボールのリーダーとしてより一層努力したいと思います。

最後になりましたが、江別市体育協会の益々のご発展をご祈念申し上げます。

「DASH 江別」

江別バスケットボールスポーツ少年団 源 藤 均

昭和51年4月江別少年団は発足しましたが、当時札幌市内のチームが大変強く、全く勝てないシーズンが続く中で、翌年チーム強化の対策として江別が中心となり近隣の大麻、当別と練習試合の計画から始まり、なんとか1勝でも出来るようにと昭和53年江別・大麻・当別定期戦と名称をつけ活動しておりました。

しかし、年1回の対戦では強化の面からも成果がみられないとのことから、昭和54年4月、春（4月）、夏（8月）、秋（12月）、冬（2月新人戦）年4回の総当たりリーグ戦の石狩リーグと改称して札幌地区でより良い成績を残すための石狩管内唯一の公式大会として歩み始めました。

創成期の56年夏の当別大会で初めての勝利とまではいかないが強豪当別と『引き分け』リーグでの初ポイントを獲得したことが大きな弾みとなり、翌年の第2回全道夏季交歓大会で地方の強豪帯広大空を破り、勢いにのり冬の全道選手権で初のベスト8に入り、リーグも初優勝し、北海道のトップレベルの位置につくようになってきました。

そんな中で激しくもまれることにより、全チーム念願の全国大会へ平成4年江別女子、平成5年江別男子、そして平成6年江別男子、平成8年江別男子と合計4回も出場しており、特に平成6年江別男子は全国準優勝（北海道では2回目）と全国的にもトップレベルと認知されてきております。

また、平成2年度からの中学ジュニアオールスターにも数多くの好選手を送り出し全国優勝も含め数々の好成績も少年団での経験があったからこそと思えます。

少年団1期生は現在33歳となり社会でも若手として中心になる世代となり実業団、クラブ、大学、高校、中学の各世代チームで中心選手として活躍する一方、第二世代の指導者として後進の世話を始めたものも出てきました。

誰でも、いつでも、どこでも、プレイできる、指導できる、楽しめるチームがある江別のバスケットを目指して21年、これから大いなる目標、全国制覇できるよう皆で頑張っていきたいと思います。

春季札幌地区選手権大会	男子優勝	5回
秋季札幌地区選手権大会	男子優勝	7回
	女子優勝	1回
北海道選手権	男子優勝	3回
	女子優勝	1回
全国大会	男子	準優勝



全国大会 “準優勝”



「リバウンド 城宝！」

歴代役員

役 職	昭和 25 年度	26 年度	27 年度	28 年度	29 年度	30 年度
会 長	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	福 本 重 亀
副 会 長	福 本 重 亀 三 浦 光 三 江 草 信 道	福 本 重 亀 三 浦 光 三 江 草 信 道	福 本 重 亀 三 浦 光 三 江 草 信 道	福 本 重 亀 三 浦 光 三 江 草 信 道	福 本 重 亀 三 浦 光 三 江 草 信 道	佐 野 猛
理 事 長	佐 野 猛	佐 野 猛	佐 野 猛	佐 野 猛	佐 野 猛	片 岸 性 喜
常 任 理 事	剣 道			徳 永 健 児	徳 永 健 児	徳 永 健 児
	自 転 車					
	柔 道	村 上 政 雄	村 上 政 雄	丸 山 武 敏	丸 山 武 敏	丸 山 武 敏
	相 撲					
	ソフトテニス (軟式庭球)	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉
	卓 球					
	バレーボール (排 球)					
	野 球	三 浦 光 三	三 浦 光 三	三 浦 光 三	三 浦 光 三	片 岸 精 喜
	陸上競技	佐 野 猛	佐 野 猛	佐 野 猛	佐 野 猛	佐 野 猛
監 事						

昭和25年～36年

役	職	昭和31年度	32年度	33年度	34年度	35年度	36年度
会	長	福本重亀	福本重亀	福本重亀	福本重亀	高橋豊雄	高橋豊雄
副	会 長	佐野 猛	佐野 猛	佐野 猛	佐野 猛	福本重亀 芦屋一三	福本重亀 芦屋一三
理	事 長	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	佐野 猛
常 任 理 事	弓 道						
	剣 道	徳永健児	徳永健児	徳永健児	徳永健児	徳永健児	徳永健児
	自転車						
	柔 道	丸山武敏	丸山武敏	丸山武敏	丸山武敏	丸山武敏	丸山武敏
	相 撲						
	ソフトテニス	阿部梅吉	阿部梅吉	阿部梅吉	阿部梅吉	阿部梅吉	阿部梅吉
	卓 球						
	バレーボール						
	野 球	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	片岸性喜	小島昭次
	陸上競技	佐野 猛	佐野 猛	佐野 猛	佐野 猛	佐野 猛	佐野 猛
監	事						

役 職	昭和 37 年度	38 年度	39 年度	40 年度	41 年度	42 年度
会 長	高 橋 豊 雄	福 本 重 亀	福 本 重 亀	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝
副 会 長	清 水 重 雄	清 水 重 雄	清 水 重 雄	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛
理 事 長	佐 野 猛	佐 野 猛	佐 野 猛	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉
常 任 理 事	弓 道					
	剣 道	徳 永 健 児	徳 永 健 児	徳 永 健 児	徳 永 健 児	徳 永 健 児
	自 転 車					
	柔 道	丸 山 武 敏	丸 山 武 敏	丸 山 武 敏	丸 山 武 敏	丸 山 武 敏
	相 撲				(	
	ソフトテニス	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉
	卓 球					
	バドミントン	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄
	バレーボール					
	野 球	小 島 昭 次	小 島 昭 次	小 島 昭 次	小 島 昭 次	小 島 昭 次
監 事	陸上競技	佐 野 猛	佐 野 猛	佐 野 猛	中 島 昭 一	佐 野 猛

昭和37年～48年

役 職	昭和43年度	44年度	45年度	46年度	47年度	48年度
会 長	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝
副 会 長	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛
理 事 長	阿 部 梅 吉	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦
副 理 事 長		政 田 政 一	政 田 政 一	政 田 政 一	政 田 政 一	政 田 政 一
常 任 理 事	弓 道		笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄		笹 岡 武 雄
	剣 道	徳 永 健 児	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄
	柔 道	丸 山 武 敏	大 森 明	大 森 明	大 森 明	大 森 明
	水 泳		工 藤 祐 三	工 藤 祐 三	工 藤 祐 三	工 藤 祐 三
	スケート		納 谷 和 行			
	相 撲		中 山 満	中 山 満	中 山 満	中 山 満
	ソフトテニス	阿 部 梅 吉	長谷川 守	長谷川 守	阿 部 梅 吉	
	卓 球		小 松 守	小 松 守	服 部 實	服 部 實
	バスケット ボ ー ル		松 丸 和 嗣	松 丸 和 嗣	中 内 良 明	
	バトミントン	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄
	バレーボール		桑 野 健	桑 野 健		
	野 球	小 島 昭 次	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦
	陸上競技	佐 野 猛	田 中 淳 介	田 中 淳 介	最 上 光 弘	渡 辺 登
監 事		出 淵 精 吾 鷺 田 三 郎	出 淵 精 吾 鷺 田 三 郎			
(事務局長)	池 田 春 男	池 田 春 男	池 田 春 男	池 田 春 男	池 田 春 男	池 田 春 男

役 職	昭和 49 年度	50 年度	51 年度	52 年度	53 年度	54 年度
会 長	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝
副 会 長	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛 伊 藤 清 彦	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛 伊 藤 清 彦	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛
理 事 長	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦	政 田 政 一	政 田 政 一	七 戸 君 雄
副 理 事 長	政 田 政 一	政 田 政 一	政 田 政 一	七 戸 君 雄	西 澤 良 夫	西 澤 良 夫
常 任 理 事	空 手 道				音 部 憲 夫	音 部 憲 夫
	弓 道	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄
	剣 道	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄
	柔 道	大 森 明	大 森 明	大 森 明	大 森 明	大 森 明
	水 泳	工 藤 祐 三	佐 藤 昭 彦	佐 藤 昭 彦	佐 藤 昭 彦	佐 藤 昭 彦
	ス キ ー			久 慈 正 徳	久 慈 正 徳	久 慈 正 徳
	ス ケ ー ト	高 橋 良 次 郎	高 橋 良 次 郎	高 橋 良 次 郎	一 休 止 一	一 休 止 一
	相 撲	中 山 満	中 山 満	中 山 満	中 山 満	中 山 満
	ソ フ ト テ ニ ス	阿 部 梅 吉	阿 部 梅 吉	勝 田 太 市	勝 田 太 市	小 野 寺 秀 晃
	卓 球	服 部 實	服 部 實	服 部 實	服 部 實	服 部 實
	バ ス ケ ッ ト ボ ー ル	中 内 良 明	中 内 良 明	中 内 良 明	中 内 良 明	中 内 良 明
	バ ト ミ ン ト ン	西 澤 良 夫	西 澤 良 夫	西 澤 良 夫	西 澤 良 夫	西 澤 良 夫
	バ レ ー ボ ー ル		嶋 倉 昭	嶋 倉 昭	嶋 倉 昭	杉 本 亮 二
監 事	野 球	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦	伊 藤 清 彦	五十嵐悦治	五十嵐悦治
	陸上競技	渡 辺 登	佐 藤 憲 次	渡 辺 良 洪	渡 辺 良 洪	渡 辺 良 洪
(事務局長) (事務局次長)		桜 井 孝 市 小 林 一 男	桜 井 孝 市 小 林 一 男	桜 井 孝 市 小 林 一 男	池 田 春 男 小 林 一 男	池 田 春 男 小 林 一 男
		飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄	前期 渡辺 登 後期 政田政一	政 田 政 一 石 垣 秀 人

昭和49年～60年

役 職	昭和55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度
(顧 問)						岩 田 政 勝
会 長	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	泉 重 陽
副 会 長	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛	清 水 重 雄 泉 重 陽 佐 野 猛
理 事 長	七 戸 君 雄	五十嵐 悦治	五十嵐 悦治	中 山 満	中 山 満	中 山 満
副 理 事 長	西 沢 良 夫	西 沢 良 夫	西 沢 良 夫	最 上 光 弘	最 上 光 弘	最 上 光 弘
常 任 理 事	空 手 道	音 部 憲 夫	音 部 憲 夫	音 部 憲 夫	音 部 憲 夫	音 部 憲 夫
	弓 道	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄
	剣 道	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄	七 戸 君 雄	久美屋 清一郎
	サッカー		佐 藤 省 三	佐 藤 省 三	佐 藤 省 三	堀 江 祐 一
	柔 道	大 森 明	大 森 明	大 森 明	大 森 明	大 森 明
	水 泳	大 郷 正 裕	佐 藤 昭 彦	佐 藤 昭 彦	山 本 幸 秀	山 本 幸 秀
	ス キー	久 慈 正 徳	久 慈 正 徳	久 慈 正 徳	増 田 昌 廉	増 田 昌 廉
	ス ポー ツ 少 年 団		富 田 勝 彦	富 田 勝 彦	富 田 勝 彦	富 田 勝 彦
	相 撲	中 山 満	中 山 満	中 山 満	中 山 満	中 山 満
	ソフトテニス	小 野 澤 秀 晃	小 野 澤 秀 晃	小 野 澤 秀 晃	小 野 澤 秀 晃	工 藤 旻
	ソフトボール					三 上 孝
	卓 球	服 部 實	服 部 實	服 部 實	服 部 實	服 部 實
	テ ニ ス (硬式庭球)	古 屋 清 美	淵 戸 義 三	淵 戸 義 三	古 屋 清 美	山 本 末 治
	バスケット ボ ール	中 内 良 朗	中 内 良 朗	中 野 正 行	渡 辺 登	中 野 正 行
	バドミントン	西 沢 良 夫	西 沢 良 夫	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄
	バレーボール	杉 本 亮 二	杉 本 亮 二	嶋 倉 昭	嶋 倉 昭	嶋 倉 昭
	野 球	五十嵐 悦治	五十嵐 悦治	五十嵐 悦治	今 井 利 秀	今 井 利 秀
	陸上競技	最 上 光 弘	最 上 光 弘	最 上 光 弘	最 上 光 弘	最 上 光 弘
監 事	池 田 春 男 小 林 一 男	池 田 春 男 小 林 一 男	池 田 春 男 小 林 一 男	池 田 春 男 小 林 一 男	池 田 春 男 小 林 一 男	小 林 一 男 大 森 明
	(事務局長) (事務局次長) (事務局員)	岩 淵 威 雄 中 川 正 志 一 柳 さつき	中 川 正 志 鳴 海 良 子	中 川 正 志 石 垣 秀 人 鳴 海 良 子	中 川 正 志 石 垣 秀 人 鳴 海 良 子	中 川 正 志 石 垣 秀 人 鳴 海 良 子

役 職		昭和 61 年度	62 年度		63 年度	平成元年度	2 年度
(顧 問)		岩 田 政 勝	岩 田 政 勝		岩 田 政 勝	岩 田 政 勝	岩 田 政 勝
会 長		泉 重 陽	泉 重 陽		泉 重 陽	泉 重 陽	泉 重 陽
副 会 長		清 水 重 雄 佐 野 猛 池 田 春 男	清 水 重 雄 佐 野 猛 池 田 春 男		清 水 重 雄 佐 野 猛 池 田 春 男	清 水 重 雄 佐 野 猛 池 田 春 男	清 水 重 雄 佐 野 猛 池 田 春 男
理 事 長		嶋 倉 昭	嶋 倉 昭		嶋 倉 昭	嶋 倉 昭	嶋 倉 昭
副 理 事 長		久美屋 清一郎 最 上 光 弘 今 井 利 秀	久美屋 清一郎 最 上 光 弘 今 井 利 秀		久美屋 清一郎 最 上 光 弘 今 井 利 秀	久美屋 清一郎 最 上 光 弘 今 井 利 秀	久美屋 清一郎 最 上 光 弘 今 井 利 秀
常 任 理 事	空 手 道	音 部 憲 夫	音 部 憲 夫		音 部 憲 夫	音 部 憲 夫	音 部 憲 夫
	弓 道	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄		笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄	笹 岡 武 雄
	ゲートボール	平 岡 信 夫	平 岡 信 夫		平 岡 信 夫	平 岡 信 夫	平 岡 信 夫
	剣 道	久美屋 清一郎	久美屋 清一郎		久美屋 清一郎	中 山 喜 美 雄	中 山 喜 美 雄
	拳 法		鍵 谷 好 得		鍵 谷 好 得	鍵 谷 好 得	鍵 谷 好 得
	サ ッ カ ー	堀 江 祐 一	堀 江 祐 一		堀 江 祐 一	堀 江 祐 一	堀 江 祐 一
	柔 道	今 野 昭 男	今 野 昭 男		今 野 昭 男	今 野 昭 男	今 野 昭 男
	水、 泳	山 本 幸 秀	大 野 聡	理	大 野 聡	大 野 聡	大 野 聡
	ス キ ー	中 村 敏 雄	中 村 敏 雄		中 村 敏 雄	中 村 敏 雄	中 村 敏 雄
	ス ポ ー ツ 少 年 団	富 田 勝 彦	富 田 勝 彦		富 田 勝 彦	佐 古 利 男	佐 古 利 男
	相 撲	中 山 満	中 山 満		中 山 満	中 山 満	中 山 満
	ソフトテニス	工 藤 旻	工 藤 旻		工 藤 旻	工 藤 旻	工 藤 旻
	ソフトボール	三 上 孝	三 上 孝		三 上 孝	月 田 孝 一	月 田 孝 一
	卓 球	服 部 實	服 部 實		服 部 實	服 部 實	服 部 實
	テ ニ ス	山 本 末 治	山 本 末 治		山 本 末 治	遠 藤 毅	遠 藤 毅
	バスケット ボ ー ル	中 野 正 行	中 野 正 行	事	中 野 正 行	中 野 正 行	中 野 正 行
	バドミントン	飯 田 哲 雄	飯 田 哲 雄		飯 田 哲 雄	中 川 正 志	中 川 正 志
	バレーボール	鈴 木 久 雄	鈴 木 久 雄		鈴 木 久 雄	浦 島 忠 勝	浦 島 忠 勝
	野 球	今 井 利 秀	今 井 利 秀		今 井 利 秀	吉 川 学	吉 川 学
	陸上競技	赤 尾 全 広	赤 尾 全 広		赤 尾 全 広	赤 尾 全 広	赤 尾 全 広
監 事	ハンドボール	池 田 和 司	池 田 和 司		池 田 和 司	池 田 和 司	池 田 和 司
	ホ ッ ケ ー	林 克 明	林 克 明		林 克 明	林 克 明	林 克 明
	ラグビー	信 清 邦 雄	信 清 邦 雄		信 清 邦 雄	信 清 邦 雄	信 清 邦 雄
		小 林 一 男 大 森 明	小 林 一 男 大 森 明		小 林 一 男 大 森 明	渡 辺 登 明 大 森 明	渡 辺 登 明 大 森 明
(事務局長) (事務局次長) (事務局員)		中 川 正 志 石 垣 秀 人 鳴 海 良 子	中 川 正 志 鳴 海 良 子		中 川 正 志 鳴 海 良 子	吉 川 敬 造 富 川 核 子 松 下 良 子	吉 川 敬 造 富 川 核 子 松 下 良 子

昭和61年～平成7年

役	職	平成3年度	4年度	5年度	6年度	7年度
(顧問)		岩田政勝	岩田政勝 清水重雄 佐野猛	岩田政勝 清水重雄 佐野重陽 泉	岩田政勝 清水重雄 佐野重陽 泉	岩田政勝 清水重雄 佐野重陽 久美屋清一郎
会長		泉重陽	泉重陽	高間專造	高間專造	高間專造
副会長		清水重雄 佐野猛男 池田春男	池田春男 高間專造 久美屋清一郎	池田春男 久美屋清一郎 服部實	池田春男 久美屋清一郎 服部實	池田春男 服部永和親 池永
理事長		嶋倉昭	中川正志	中川正志	中川正志	中川正志
副理事長		久美屋清一郎 最上光弘 今井利秀	服部實弘 最上光弘 今井利秀	今井利秀 井野昭孝 今月田孝一	今井利秀 井野昭孝 今月田孝一	今井利秀 井野昭孝 今月田孝一
理事	空手道	音部憲夫	音部憲夫	音部憲夫	金内晴夫	金内晴夫
	弓道	笹岡武雄	笹岡武雄	笹岡武雄	笹岡武雄	前田孝
	ゲートボール	三宅守	三宅守	三宅守	岡田典雄	岡田典雄
	剣道	中山喜美雄	中山喜美雄	中山喜美雄	中山喜美雄	中山喜美雄
	拳法	鍵谷好得	鍵谷好得	鍵谷好得	鍵谷好得	鍵谷好徳
	サッカー	堀江祐一	堀江祐一	堀江祐一	堀江祐一	堀江祐一
	柔道	今野昭男	今野昭男	今野昭男	今野昭男	今野昭男
	水泳	大野聡	大野聡	大野聡	大野聡	大野聡
	スキー	中村敏雄	中村敏雄	中村敏雄	中村敏雄	中村敏雄
	スポーツ少年団	佐古利男	佐古利男	大郷正裕	大郷正裕	大郷正裕
	相撲	中山満	中山満	佐藤良男	佐藤良男	佐藤良男
	ソフトテニス	工藤旻	工藤旻	工藤旻	工藤旻	工藤旻
	ソフトボール	月田孝一	月田孝一	月田孝一	月田孝一	月田孝一
	卓球	服部實	吉川敬造	橋本茂昭	橋本茂昭	橋本茂昭
	テニス	遠藤毅	遠藤毅	遠藤毅	遠藤毅	遠藤毅
	バスケットボール	中野正行	中野正行	中内良朗	中内良朗	中内良朗
	バドミントン	中川正志	密山征雄	中川正志	中川正志	中川正志
	バレーボール	浦島忠勝	浦島忠勝	浦島忠勝	浦島忠勝	浦島忠勝
	パワーリフティング				出口敏文	出口敏文
	武術太極拳				石山雅志	石山雅志
	ミニバレー					斎藤裕
	野球	吉川学	吉川学	今井利秀	今井利秀	今井利秀
監事	陸上競技	赤尾全広	赤尾全広	最上光弘	最上光弘	最上光弘
	ハンドボール	池田和司	休止	休止	休止	休止
	ホッケー	林克明	林克明	林克明	林克明	林克明
	ラグビー	信清邦雄	休止	休止	休止	休止
		渡辺登明 大森	渡辺登明 大森	渡辺登明 大森	渡辺登明 大森	渡辺登明 大森
(事務局長)		吉川敬造	吉川敬造	佐々木雄二	佐々木雄二	大友和則
(事務局次長)		松下良子	波田理美子	波田理美子	波田理美子	波田理美子
(事務局員)						

平成8年～12年

役	職	平成8年度	9年度	10年度	11年度	12年度
(顧問)		岩田政勝 清水重雄 佐野猛陽 泉重陽 久美屋清一郎 高間専造	岩田政勝 清水重雄 佐野猛陽 泉重陽 久美屋清一郎 高間専造	岩田政勝 清水重雄 佐野猛陽 泉重陽 久美屋清一郎 高間専造	岩田政勝 清水重雄 佐野猛陽 泉重陽 久美屋清一郎 高間専造	岩田政勝 清水重雄 佐野猛陽 泉重陽 久美屋清一郎 高間専造
	会長	池永親	池永親	池永親	池永親	池永親
	副会長	池田春男 服部實宏 角谷正宏	池田春男 服部實宏 角谷正宏	池田春男 服部實宏 角谷正宏	池田春男 服部實宏 角谷正宏	池田春男 服部實宏 角谷正宏
	理事長	中川正志	中川正志	中川正志	中川正志	中川正志
理事	副理事長	今井利秀 今野昭男 今月田孝一	今井利秀 今野昭男 今月田孝一	今井利秀 今野昭男 今月田孝一	今井利秀 今野昭男 今月田孝一	今井利秀 今野昭男 今月田孝一
	空手道	金内晴夫	金内晴夫	金内晴夫	金内晴夫	金内晴夫
	弓道	前田孝	前田孝	前田孝	前田孝	前田孝
	ゲートボール	岡田典雄	上原慶一	上原慶一	上原慶一	上原慶一
	剣道	中山喜美雄	中山喜美雄	中山喜美雄	吉田雄策	吉田雄策
	拳法	鍵谷好徳	鍵谷真紀子	鍵谷真紀子	鍵谷真紀子	鍵谷真紀子
	サッカー	高間専逸	高間専逸	堀江祐一	堀江祐一	堀江祐一
	柔道	今野昭男	今野昭男	今野昭男	田中啓介	田中啓介
	水泳	大野聡	大野聡	大野聡	大野聡	大野聡
	スキー	中村敏雄	中村敏雄	木内俊次	木内俊次	木内俊次
	スポーツ少年団	大郷正裕	大郷正裕	大郷正裕	佐古利男	佐古利男
	相撲	佐藤良男	佐藤良男	佐藤良男	佐藤良男	佐藤良男
	ソフトテニス	工藤旻	工藤旻	工藤旻	工藤旻	工藤旻
	ソフトボール	月田孝一	月田孝一	月田孝一	月田孝一	月田孝一
	卓球	橋本茂昭	橋本茂昭	橋本茂昭	橋本茂昭	橋本茂昭
	テニス	遠藤毅	遠藤毅	遠藤毅	遠藤毅	半田陸美
	パークゴルフ	佐藤一郎	佐藤一郎	佐藤一郎	佐藤一郎	佐藤一郎
	バスケットボール	中内良朗	中内良朗	中内良朗	中内良朗	中内良朗
	パドミントン	中川正志	中川正志	中川正志	中川正志	中川正志
	バレーボール	富川核	富川核	富川核	富川核	富川核
	パワーリフティング	出口敏文	出口敏文	出口敏文	出口敏文	出口敏文
	武術太極拳	石山雅志	石山雅志	石山雅志	石山美智子	石山美智子
	ミニバレー	吉川等志	中井登美枝	中井登美枝	阿瀬川裕子	阿瀬川裕子
	野球	今井利秀	今井利秀	今井利秀	今井利秀	今井利秀
	陸上競技	最上光弘	最上光弘	最上光弘	最上光弘	最上光弘
	ホッケー	林克明	林克明	林克明	休止	休止
監事		渡辺登明 大森	渡辺登明 大森	渡辺登明 大森	佐々木亨雄 櫻木光	佐々木亨雄 櫻木光
	(事務局長)	大友和則	川崎満	川崎満	原利明	原利明
	(事務局次長)	長尾えり子	石岡明	小林則幸	小林則幸	小林則幸
	(事務局員)		長尾えり子	長尾えり子	長尾えり子	長尾えり子

年度	団体・個人名	推薦団体	表彰内容
昭和43年度	江別高等学校 陸上競技班 野幌機農高校 陸上競技部 江別市役所 剣道部 北日本製紙 柔道部 江別高等学校 バドミントン部 佐野 猛 福本重 亀 阿部梅 吉 大塚 豊 今井 毅 清水重 雄 丸山武 敏 山北 修 木村敏 雄 片岸 性 喜		
44年度	政田 政一		
45年度	藤井正紀 江別市役所排球部 笹岡武雄 渡部武司 桑原忠雄	陸上競技協会 バレーボール協会 弓道連盟 剣道連盟 野球連盟	
46年度	対馬英二 大森 明 山須田清一 野幌剣道愛好会	軟式庭球連盟 柔道連盟 野球連盟 剣道連盟	功労賞 功労賞 功労賞 功労賞
47年度	勝田太市 秋山 勇 江別市役所バドミントン部 王子製紙剣道部	軟式庭球連盟 野球連盟 バドミントン協会 剣道連盟	功労賞 功労賞 優秀団体賞 功労賞
48年度	倉島 繁 村谷清吉 北城鉄雄 小塚栄四郎 佐藤多喜治	バスケットボール協会 柔道連盟 野球連盟 剣道連盟 軟式庭球連盟	功労賞 功労賞 功労賞 功労賞 功労賞
50年度	今野昭男 小島昭次 青田安雄 北海道女子短期大学卓球部	柔道連盟 野球連盟 野球連盟 卓球連盟	功労賞 功労賞 功労賞 優秀団体賞
51年度	池永和親 矢田 巖 井上 庸 高橋 行雄	バスケットボール協会 軟式庭球連盟 バドミントン協会 陸上競技協会	功労賞 功労賞 功労賞 功労賞
52年度	甲斐六郎 桑原茂雄 加藤敏雄 佐藤 憲次	剣道連盟 陸上競技協会 陸上競技協会 陸上競技協会	功労賞 功労賞 功労賞 功労賞

[illegible]

年度	団体・個人名	推 薦 団 体	表彰内容
56年度	岩 淵 咸 雄 上 森 武 一 松 下 博 樹	陸上競技協会 軟式庭球連盟 柔道連盟	功 労 賞 功 労 賞 優秀選手賞
57年度	渡 辺 登	陸上競技協会	功 労 賞
58年度	高 木 定 義 澤 富 靖 渡 部 五 月	相 撲 連 盟 ス キ ー 連 盟 柔 道 連 盟	功 労 賞 優秀選手賞 特 別 賞
60年度	前 田 孝 沢 田 清 晴 荘 司 真実子	弓 道 連 盟 柔 道 連 盟 柔 道 連 盟	功 労 賞 功 労 賞 最優秀特別賞
61年度	江別中央ガッツ 江別中央ジャンプ 平 埜 哲 夫 土 蔵 辰 馬 本 原 得 子 高 崎 幸 子	バレーボール協会 バレーボール協会 野 球 連 盟 相 撲 連 盟 軟式庭球連盟 軟式庭球連盟	奨 励 賞 奨 励 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
62年度	佐 藤 泰 三 岩 田 善 輔 佐々木 金 治 広 島 富 弥 浅 野 四 郎 中 山 満	卓 球 連 盟 柔 道 連 盟 柔 道 連 盟 テ ニ ス 協 会 軟式庭球連盟 相 撲 連 盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
63年度	大麻テニスクラブ	軟式庭球連盟	優秀団体賞
平成元年度	大麻バドミントクラブ 飯 田 哲 男 野 坂 豊三郎 今 井 利 秀 鈴 木 四 郎 佐々木 昭 一	バドミントン協会 バドミントン協会 バドミントン協会 野 球 連 盟 軟式庭球連盟 柔 道 連 盟	優秀団体賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
2 年度	福 原 繁 寒河江 堅 二 杉 田 正 芳 小 山 千 博 小 玉 博 義	卓 球 連 盟 柔 道 連 盟 軟式庭球連盟 相 撲 連 盟 野 球 連 盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
3 年度	渡 邊 正 治 落 合 勇 勇 浜 口 和 行 納 谷 利 男 佐 古 利 男 服 部 実 雄 中 村 敏 雄	ソフトテニス連盟 柔 道 連 盟 相 撲 連 盟 バレーボール連盟 卓 球 連 盟 卓 球 連 盟 野 球 連 盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
4 年度	兵 藤 節 夫 星 和 武 堀 和 雄	ス キ ー 連 盟 空 手 道 連 盟 ソフトテニス連盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞

年度	団体・個人名	推 薦 団 体	表彰内容
4年度	大 湯 欣 市 伊 東 清 島 見 光 義 橋 本 茂 昭 大麻高等学校少林寺拳法部	相 撲 連 盟 野 球 連 盟 卓 球 連 盟 卓 球 連 盟 拳 法 協 会	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 優秀団体賞
5年度	山 畠 正 男 池 畑 博 司 佐 藤 健 三 鳴 海 重 久 池 岡 実 富 田 勝 彦 佐 藤 良 雄 吉 川 学	テ ニ ス 協 会 テ ニ ス 協 会 バレーボール協会 バドミントン協会 スポーツ少年団 スポーツ少年団 相 撲 連 盟 野 球 連 盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
6年度	前 川 半 造 森 田 芳 雄 安 部 昌 弘	ゲートボール協会 ソフトボール協会 ス キ ー 連 盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
7年度	浅 野 忠 雄 新 家 一 幸 出 口 徹 文 江別バスケットボールスポー ツ少年団	ゲートボール協会 柔 道 連 盟 パワーリフティング協会 スポーツ少年団	功 労 賞 功 労 賞 優秀選手賞 奨 励 賞
8年度	大 田 貞 三 深 澤 秀 則 高 橋 登 貴子 大 朝 暁 子	弓 道 連 盟 空 手 道 連 盟 卓 球 連 盟 卓 球 連 盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
9年度	鈴 木 久 雄 山 本 末 治 脇 坂 桂 吾 山 岸 正 史	バレーボール協会 テ ニ ス 協 会 弓 道 連 盟 武術太極拳連盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 優秀選手賞
10年度	水 野 健 二 月 田 孝 一 小野澤 由紀子	野 球 連 盟 ソフトボール協会 弓 道 連 盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
11年度	嶋 倉 昭 及 川 玲 子 北 野 幸 子 荒 木 英 助	バレーボール協会 ソフトテニス協会 テ ニ ス 協 会 野 球 連 盟	功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞
12年度	<協会創立50周年特別表彰>		
	布 川 義 治 山 崎 良 明 曾 山 忠 吉 王子製紙(株)江別工場剣道部 鍵 谷 好 徳 富 室 隆 岩 田 善 輔 天 内 淳 一	空 手 道 連 盟 弓 道 連 盟 ゲートボール協会 剣 道 連 盟 拳 法 協 会 サ ッ カ ー 協 会 柔 道 連 盟 水 泳 協 会	特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞

年度	団体・個人名	推 薦 団 体	表彰内容
12年度	歩くスキー専門委員会 土 蔵 辰 馬 阿 部 梅 吉 三 上 孝 田 辺 昭 雄 (故人) 古 屋 清 美 富 永 明 江別バスケットボールスポーツ少年団 出 淵 精 吾 江別中央ジュニアバレーボールスポーツ少年団 出 口 徹 文 山 岸 正 史 斉 藤 裕 青 田 安 雄 (故人) 最 上 光 弘 (故人) 岩 田 政 勝 清 水 重 雄 佐 野 猛 泉 重 陽 久美屋 清一郎 高 間 専 造 <12年度表彰> 曾 山 忠 吉 伊 藤 富 雄 吉 川 敬 造 後 藤 俊 作 大 橋 進 作 高 橋 省 一	ス キ ー 連 盟 相 撲 連 盟 ソフトテニス連盟 ソフトボール協会 卓 球 連 盟 テ ニ ス 協 会 パークゴルフ協会 バスケットボール協会 バドミントン協会 バレーボール協会 パワーリフティング協会 武術太極拳連盟 ミニバレー協会 野 球 連 盟 陸上競技協会 体 育 協 会 体 育 協 会 体 育 協 会 体 育 協 会 体 育 協 会 体 育 協 会 ゲートボール協会 剣 道 連 盟 卓 球 連 盟 バレーボール協会 野 球 連 盟 野 球 連 盟	特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別優秀団体賞 特別功労賞 特別優秀団体賞 特別功労賞 特別優秀選手賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 特別功労賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞 功 労 賞

50周年記念事業実行委員会名簿

実行委員長 池 永 和 親

実行副委員長 池 田 春 男 (記念誌発刊担当)
服 部 実 (式典担当)
角 谷 正 宏 (祝賀担当)

式典委員長 中 川 正 志

式典委員 吉 田 雄 策 富 川 核 堀 江 裕 一
佐 藤 一 郎 鍵 谷 真紀子

祝賀委員長 今 井 利 秀

祝賀委員 橋 本 茂 昭 田 中 啓 介 木 内 俊 次
石 山 美智子 阿瀬川 裕 子

記念誌発刊委員長 金 内 晴 夫

記念誌発刊委員 中 内 良 朗 大 野 聰 佐 藤 良 男
佐 古 利 男 半 田 睦 美 前 田 孝 一
工 藤 旻 最 上 光 弘 上 原 慶
出 口 徹 文

総務委員長 月 田 孝 一

総務委員 原 利 明 渡 辺 良 洪 長 尾 えり子

編／集／後／記

・あと数日で、日本のスポーツ界を代表する選手に大きな期待と限りない声援を送りながら、大多数の国民がテレビに釘付けとなるシドニーオリンピックが開催されます。

スポーツ愛好者にとって、オリンピックは生涯の憧れの場であり、それぞれが所属する協会や連盟の期待を背負って参加する選手の活躍に一喜一憂することでしょう。

この記念誌が発刊される時期はその興奮未だ覚め遣らずの頃かと思います。

・この記念すべき年、さらには西暦2000年の区切りの年に、江別市体育協会が創立50周年の節目を迎えたことは、関係者の皆さんにとって終生忘れることできない意義深い年になるものと思われます。

・各協会、連盟から寄せられた活動報告や寄稿にも述べられておりますが、戦後間もない昭和25年、真にスポーツを愛する有為の先達によって産声を上げた江別市体育協会が多くの皆さんの力によって支えられて、ここに50年の軌跡を記すことができました。

その軌跡は、勝者敗者の分けなくスポーツ振興に尽した汗と涙の結晶ではないかと思います。

・限られた期間にもかかわらず、快く原稿を提供いただいた各協会並びに関係の皆さんに心からの感謝とお礼を申し上げます。しかし、どこまでご期待に添う記念誌となり得たのかと担当者一同冷や汗を流しつつ反省しておりますので、ご寛容願います。

・いよいよ明年は新世紀への幕開けになりますが、江別市体育協会の歩みを三段跳びに譬えるならば、30周年がホップ、50周年がステップ、そしてこれからの新しい時代への挑戦がジャンプと言えるでしょう。協会のさらなる飛躍と関係の皆さん方のご健康、ご精進、ご発展をご祈念申し上げます。

2000年9月
江別体育協会50周年
記念誌発刊委員会

江別市体育協会創立50周年記念誌

発行 平成12年10月7日
編集者 江別市体育協会創立50周年記念誌発刊委員会
発刊者 江別市体育協会
〒069-0813
江別市野幌町9番地
江別市民体育館内
TEL (011) 384-5001
印刷 (株) 須田製版